

3. クロス集計による分析結果

クロス集計による分析については、子ども及びその保護者からの回答内容について、生活の困窮度や世帯構成、就業状況などを基にクロス集計を行い、家庭の経済状況などが、健康面や学習面等どのような影響を与えているかを検証しています。

「困窮度」の考え方

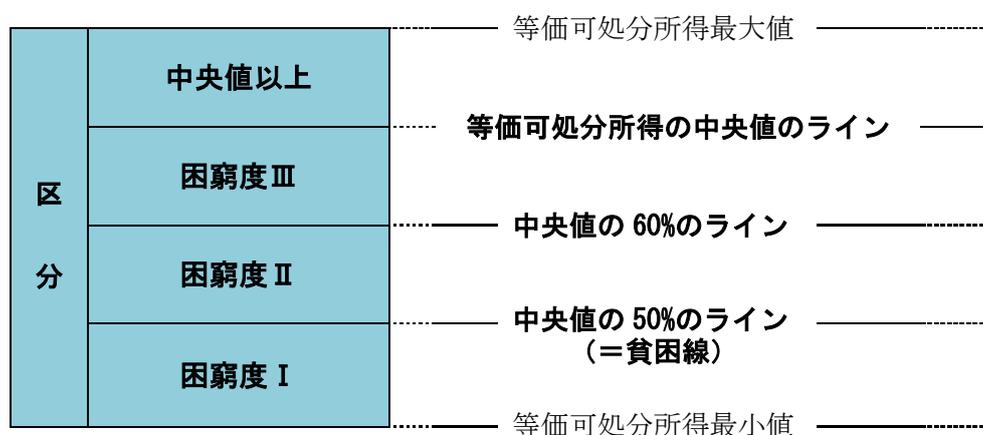
クロス集計に活用している家庭の経済状況の目安となる「困窮度」の考え方については、保護者から回答のあった世帯所得を基に「等価可処分所得」を試算し、以下のとおり、困窮の程度を4つの区分に分類しました。

「等価可処分所得」：世帯の可処分所得（収入から税金・社会保険料等を除いたいわゆる手取り収入）を世帯人員の平方根で割って調整した所得

区 分	基 準	枚方市の回答割合
中央値以上	等価可処分所得中央値（本調査では280万円）以上	50.8%
困窮度Ⅲ	等価可処分所得中央値未満で、中央値の60%以上	32.2%
困窮度Ⅱ	等価可処分所得中央値の60%未満で、中央値の50%以上	6.3%
困窮度Ⅰ	等価可処分所得中央値の50%未満（＝貧困線未満）	10.8%

※回答割合の合計値は、項目ごとに四捨五入で表記しているため100%となっていません。

【困窮度区分のイメージ】



【参考】

枚方市の中央値は280万円、相対的貧困率（国の定める基準）は10.8%。

大阪府内全自治体の中央値は255万円、相対的貧困率（国の定める基準）は14.9%。

※厚生労働省が実施する国民生活基礎調査（以下、「国調査」）において、「貧困線」とは、等価可処分所得の中央値の半分の額をいい、「相対的貧困率」とは、貧困線を下回る等価可処分所得しか得ていない者の割合をいいます。これらの算出方法は、OECD（経済協力開発機構）の作成基準に基づきます。

※国調査では、所得額等について回答者に詳細な記述を求めて算出していますが、本調査における世帯所得額については、回答者の負担感や回収率への影響を考慮し、平成 27 年中の所得額等について 50 万～100 万円といった数値の幅を持たせた選択肢で把握することとしました。そのため、国調査と同様の算出方法を用いることはできないため、国の算出方法に、本調査での幅のある所得の選択肢のそれぞれ上限値と下限値の平均値を当てはめました。

【例】世帯所得が「500～550 万円」で世帯人員 5 人の場合、世帯所得を 525 万円として等価可処分所得を算出 234.8 万円（ $\div 525 \text{万円} \div \sqrt{5}$ ）

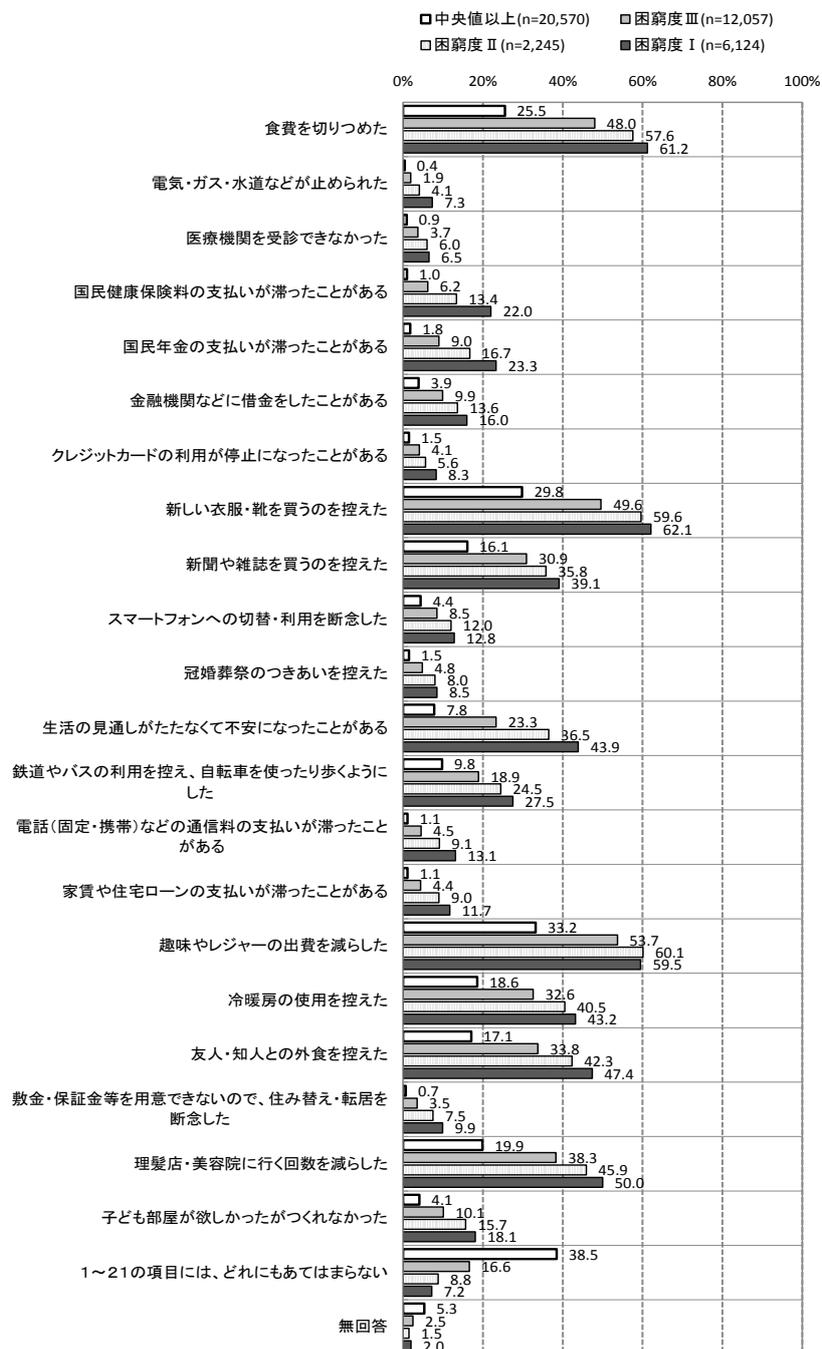
特徴のあった主なクロス集計結果について、以下のとおり、経済状況<3-1-(1)>、家庭状況（制度等）<3-1-(2)>、雇用<3-2>、健康<3-3>、家庭生活、学習<3-4>、対人関係<3-5>に分けて整理しました。

なお、大阪府内全自治体の傾向については記述していませんが、多くにおいて、枚方市と同様の傾向が見られます。

3-1. 基本情報 (1) 経済状況

困窮度別に見た、経済的な理由による経験（保護者票問7）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

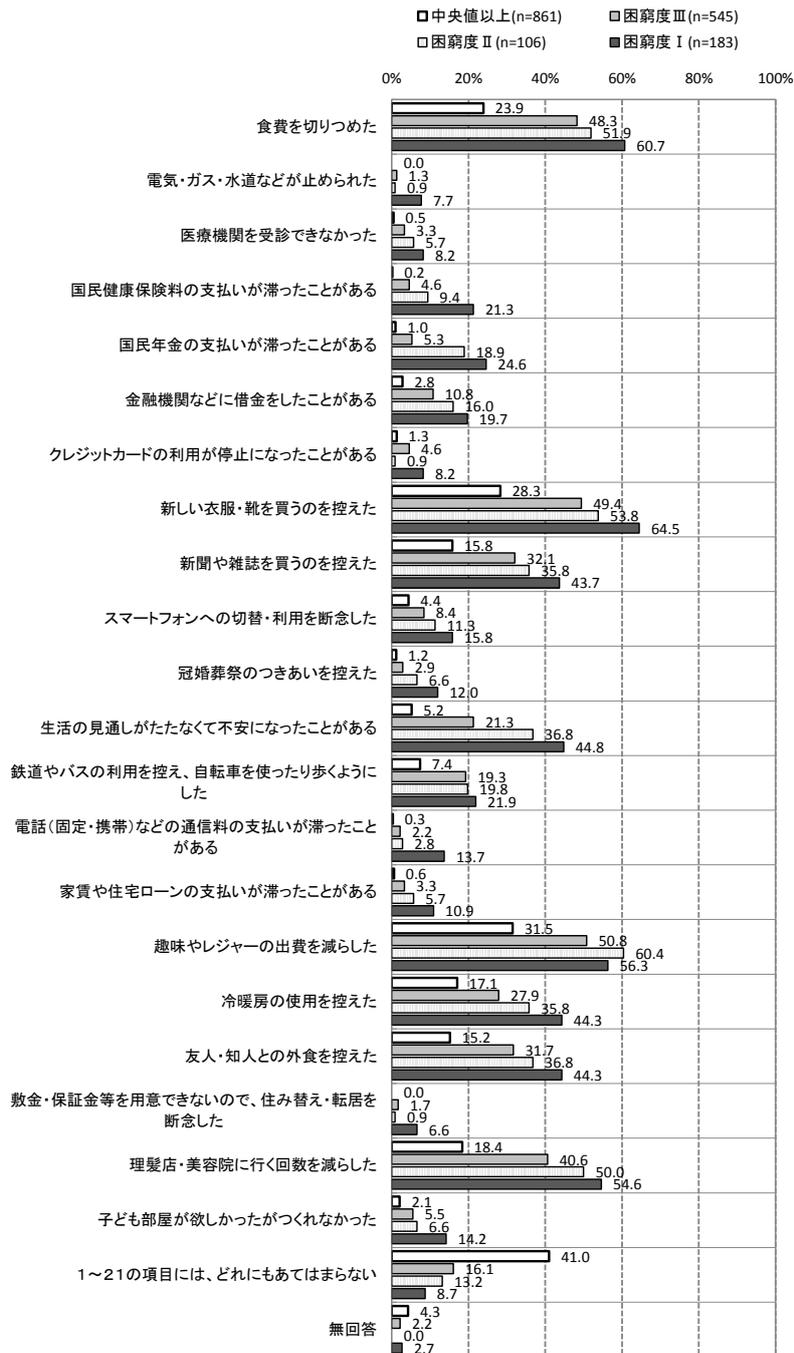
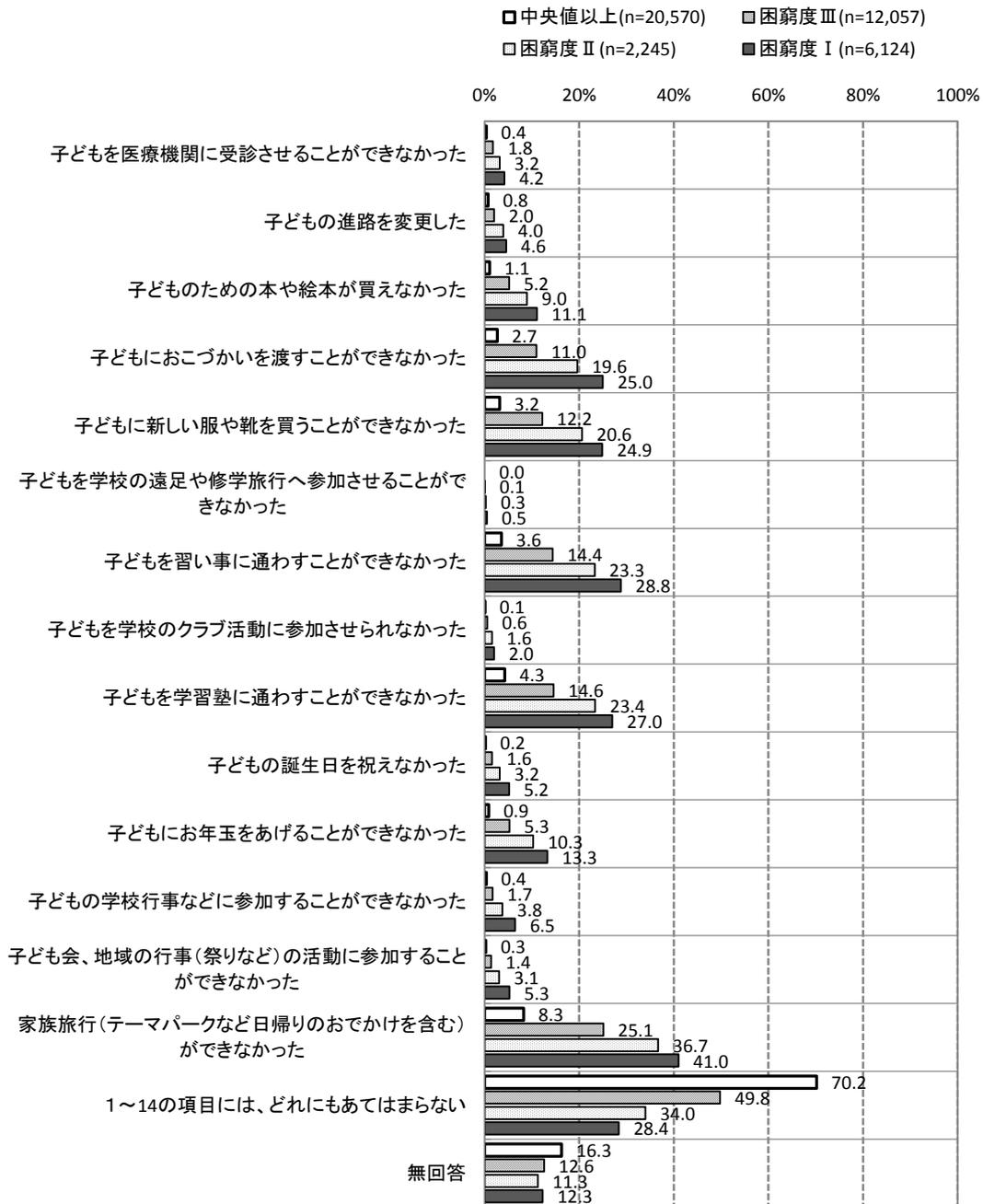


図 困窮度別に見た、経済的な理由による経験

困窮度別に経済的な理由による経験について見ると、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で差が大きい項目に着目しながら、困窮度Ⅰ群の数値を挙げると、「国民健康保険料の支払いが滞ったことがある」21.3%（中央値以上群に対して、91.7倍）、「電話（固定・携帯）などの通信料の支払いが滞ったことがある」13.7%（39.2倍）、「国民年金の支払いが滞ったことがある」24.6%（23.5倍）、「家賃や住宅ローンの支払いが滞ったことがある」10.9%（18.8倍）、「医療機関を受診できなかった」8.2%（17.6倍）となり、困窮度Ⅰ群において高い項目が複数みられました。また、「どれにもあてはまらない」は、中央値以上群で41.0%なのに対して、困窮度Ⅰ群において8.7%でした。

困窮度別に見た、子どもへの経済的な理由による経験（保護者票問13）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

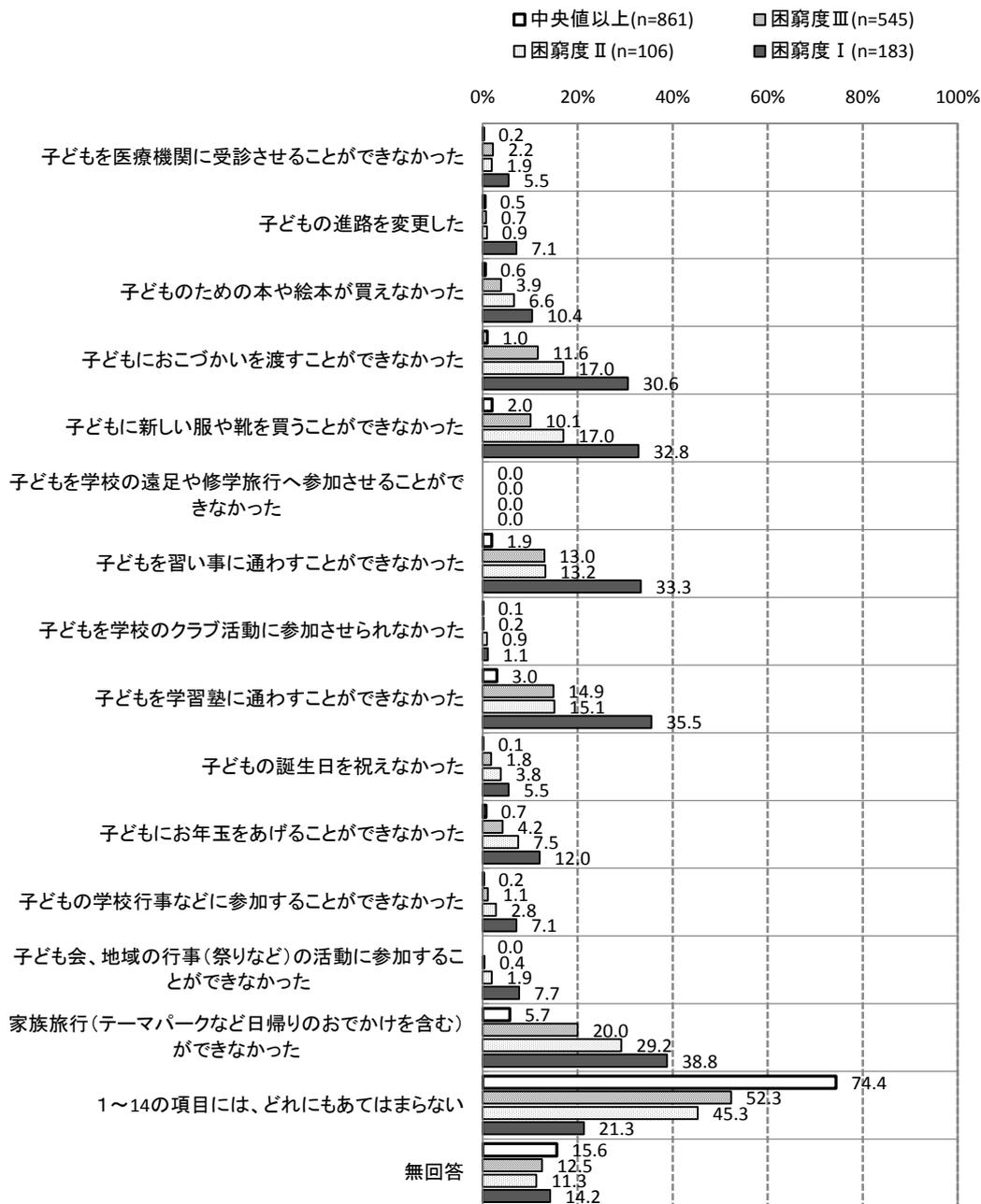
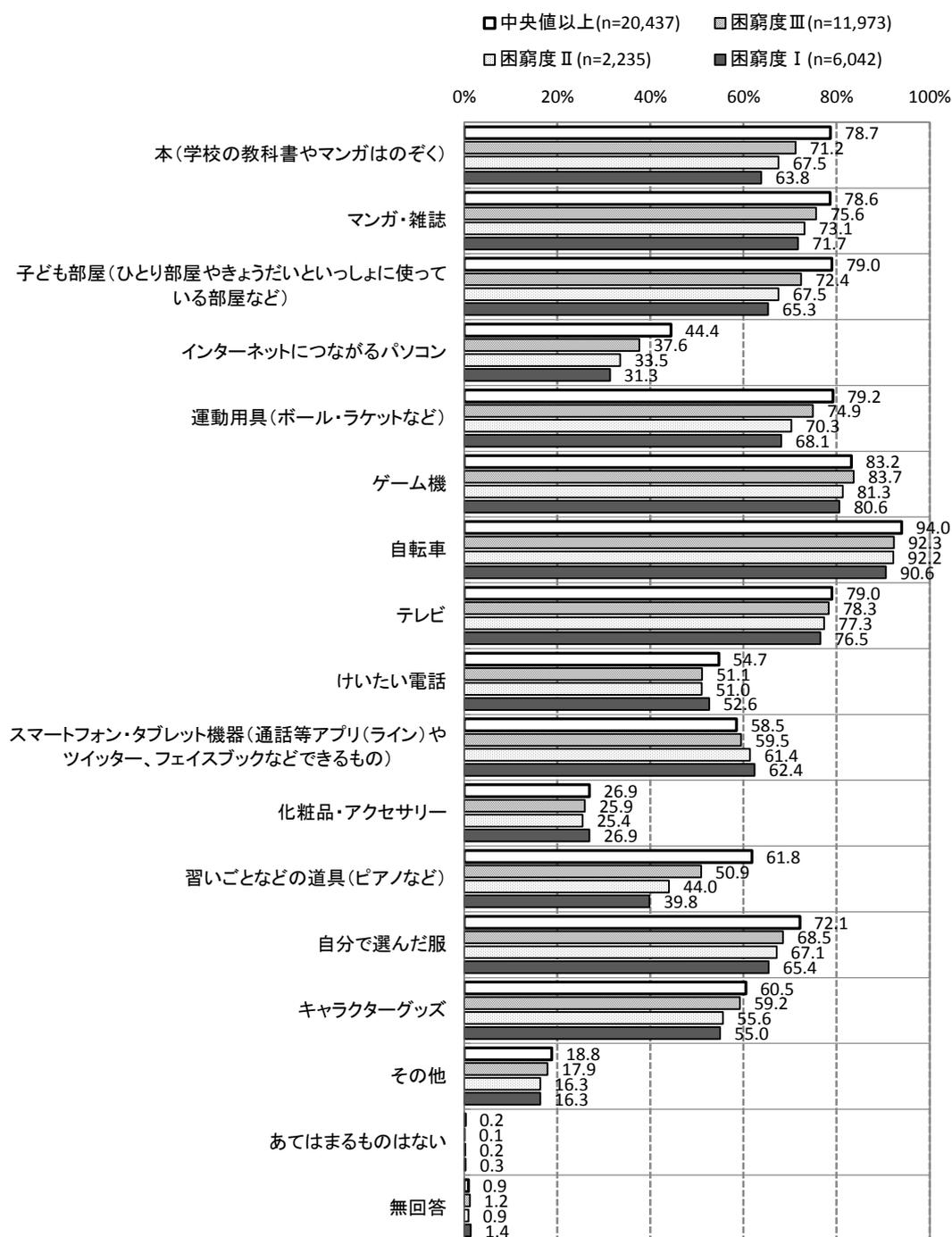


図 困窮度別に見た、子どもへの経済的な理由による経験

困窮度別に子どもへの経済的な理由による経験について見ると、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で差が大きい項目に着目し、困窮度Ⅰ群の数値を挙げると、「子どもの誕生日を祝えなかった」5.5%（中央値以上群に対して、47.0倍）、「子どもの学校行事などに参加することができなかった」7.1%（30.6倍）、「子どもにおこづかいを渡すことができなかった」30.6%（29.3倍）、「子どもを医療機関に受診させることができなかった」5.5%（23.5倍）などとなりました。また、「子どもの進路を変更した」7.1%、「子どもを学習塾に通わすことができなかった」35.5%などでも、困窮度が厳しいほどその割合が高くなっており、困窮世帯の教育環境への影響が見られました。また、「どれにもあてはまらない」は、中央値以上群で74.4%なのに対して、困窮度Ⅰ群において21.3%でした。

困窮度別に見た、持っているもの、使うことができるもの（子ども票問 22）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

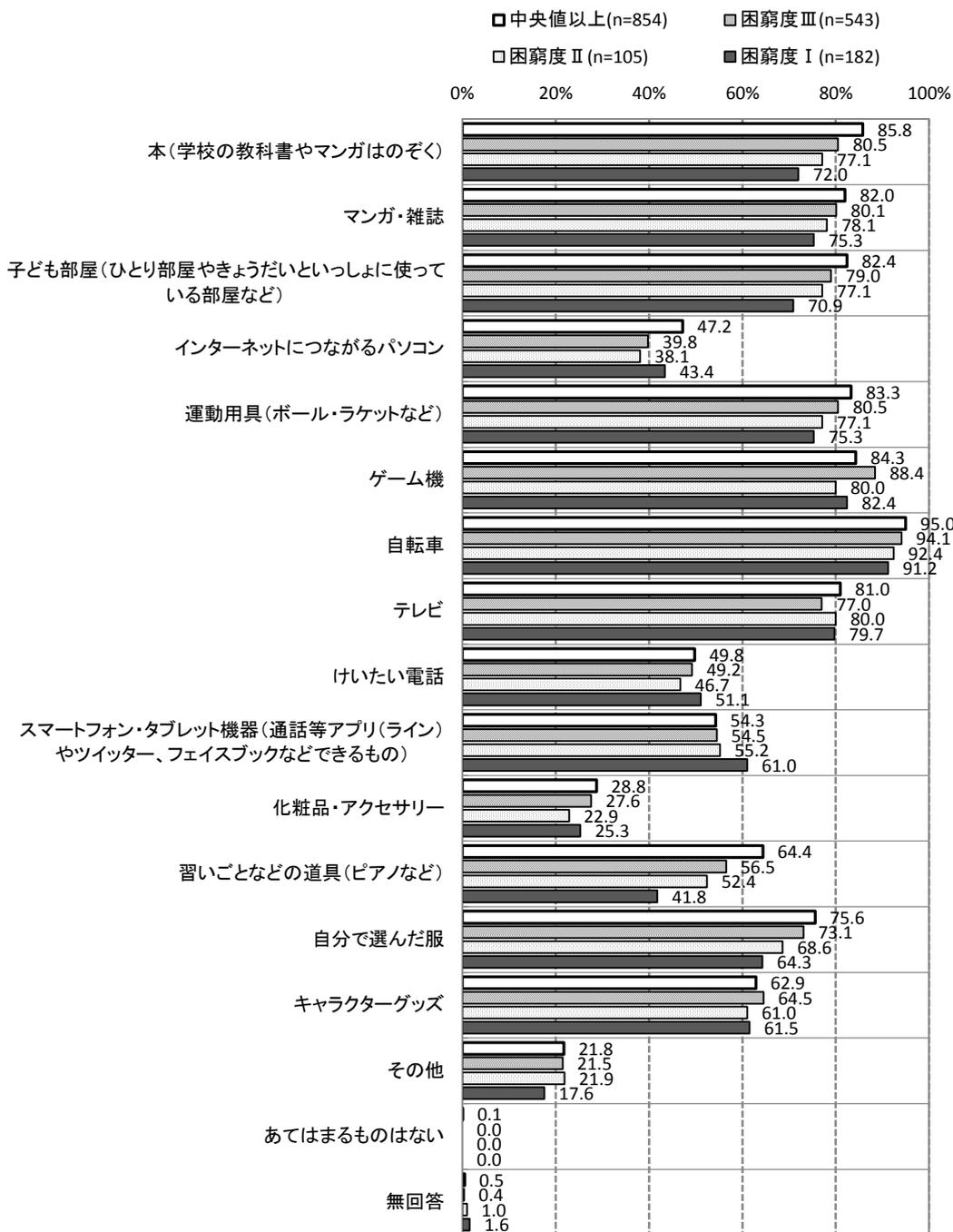
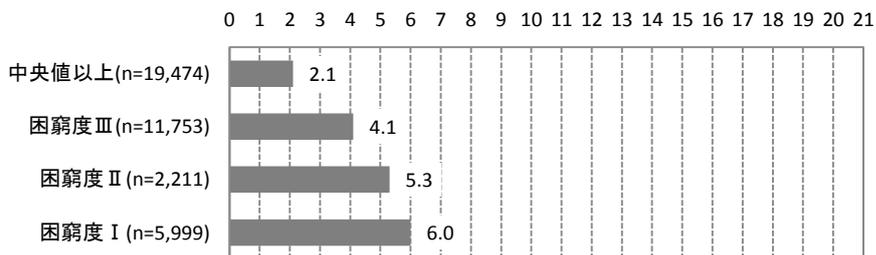


図 困窮度別に見た、持っているもの、使うことができるもの

困窮度別に子どもの持っているもの、使うことができるものを見ると、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で差が大きい項目に着目しながら、中央値以上群の数値を挙げると、「習いごとなどの道具(ピアノなど)」64.4%(困窮度Ⅰ群に対して、1.5倍)、「本(学校の教科書やマンガはのぞく)」85.8%(同じく1.2倍)、「子ども部屋(ひとり部屋やきょうだいといっしょに使っている部屋など)」82.4%(同じく1.2倍)、「自分で選んだ服」75.6%(同じく1.2倍)となり、中央値以上群において高い項目、すなわち困窮度Ⅰ群においては低い項目が複数みられました。困窮度が厳しいことでこれらを持っていない、使うことができないことは、子どもの生活や将来に影響を及ぼす可能性があるといえます。

困窮度別に見た、経済的な理由による経験の該当数の平均（保護者票問 7）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

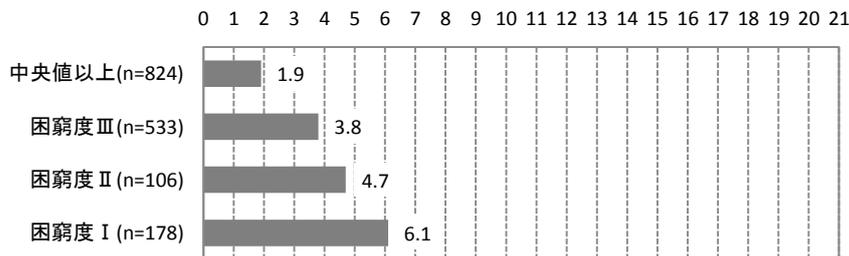


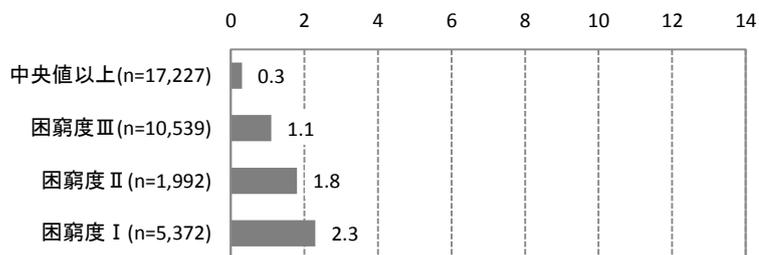
図 困窮度別に見た、経済的な理由による経験の該当数の平均

経済的な理由による経験として示した 21 個の項目のうち、該当すると回答された数について、困窮度別に平均値を算出しました。

その結果、困窮度が厳しくなるにつれ、経済的な理由による経験の該当数は多くなっていることがみられました。

困窮度別に見た、子どもへの経済的な理由による経験の該当数の平均（保護者票問 13）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

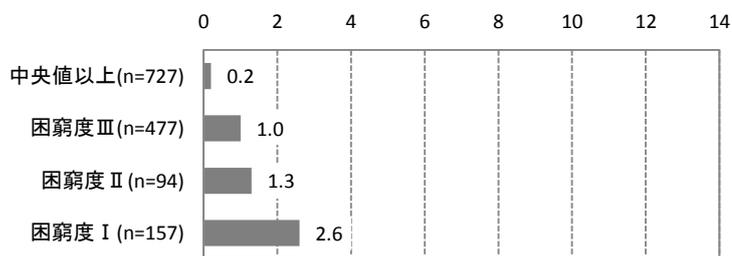


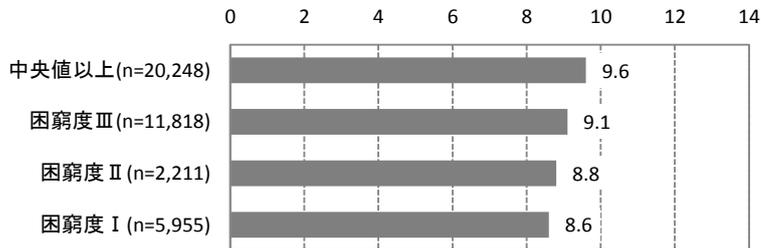
図 困窮度別に見た、子どもへの経済的な理由による経験の該当数の平均

子どもに関して経済的な理由による経験として示した 14 個の項目のうち、該当すると回答された数について、困窮度別に平均値を算出しました。

その結果、困窮度が厳しくなるにつれ、経済的な理由で子どもにできなかったことの該当数は多くなっていることがみられました。

困窮度別に見た、持っているもの、使うことができるものの該当数の平均（子ども票問 22）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

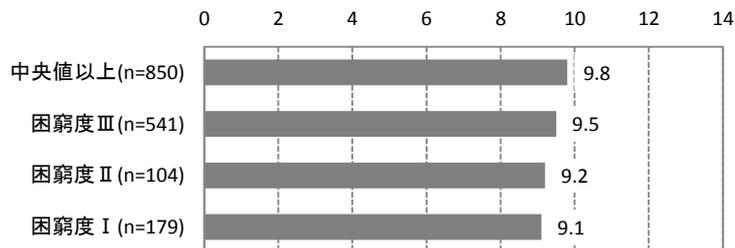


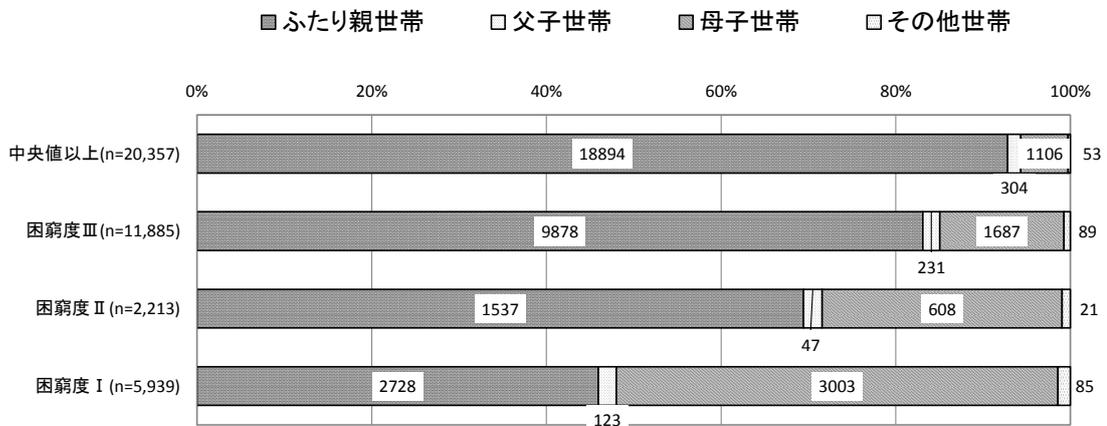
図 困窮度別に見た、持っているもの、使うことができるものの該当数の平均

子どもの持っているもの、使うことができるものとして示した 14 個の項目のうち、該当すると回答された数について、困窮度別に平均値を算出しました。

その結果、困窮度によって子どもの持ちもの、使えるものの該当数は困窮度が厳しくなるにつれてやや少なくなる傾向にあります。

困窮度別に見た、世帯員の構成（保護者票問 3-2 より）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

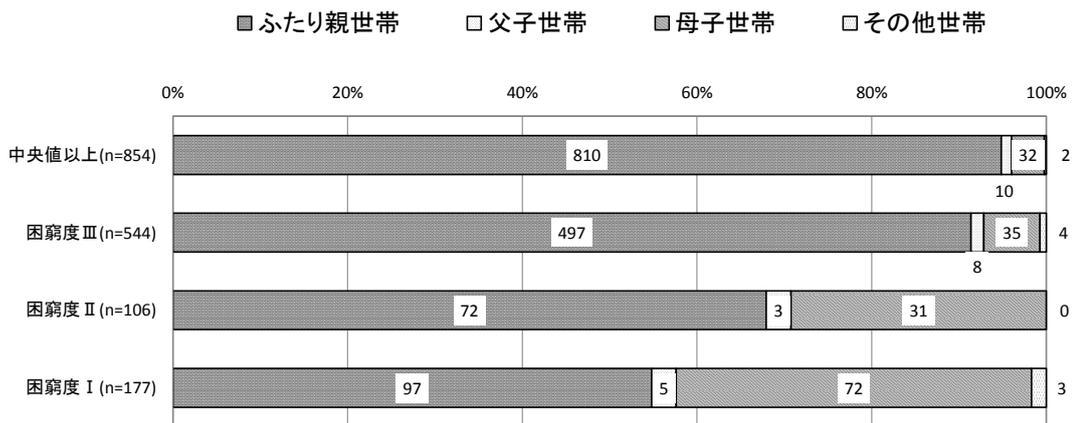
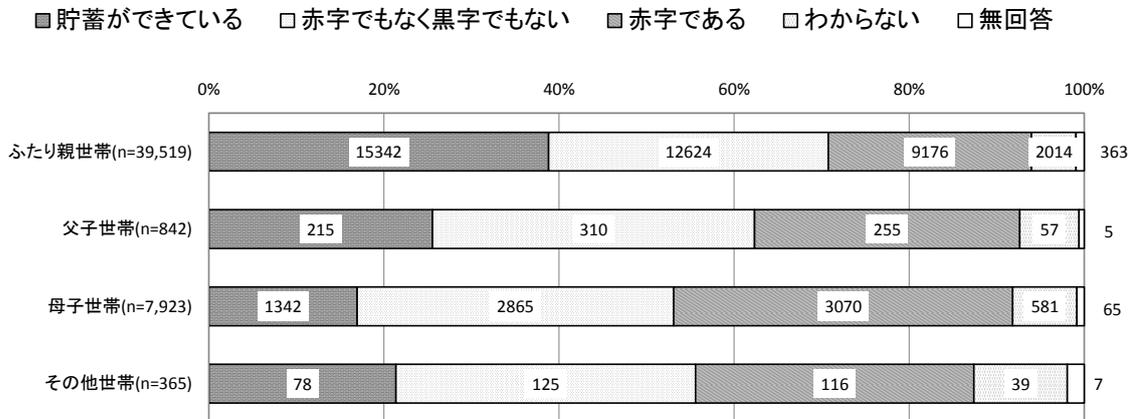


図 困窮度別に見た、世帯員の構成

困窮度別に世帯員の構成を見ると、「ふたり親世帯」と回答したのは、中央値以上群が 94.8%であるのに対して、困窮度Ⅰ群は 54.8%でした。また、「母子世帯」と回答したのは、中央値以上群が 3.7%であるのに対して、困窮度Ⅰ群は 40.7%でした。

世帯構成別に見た家計状況（保護者票問 6-1）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

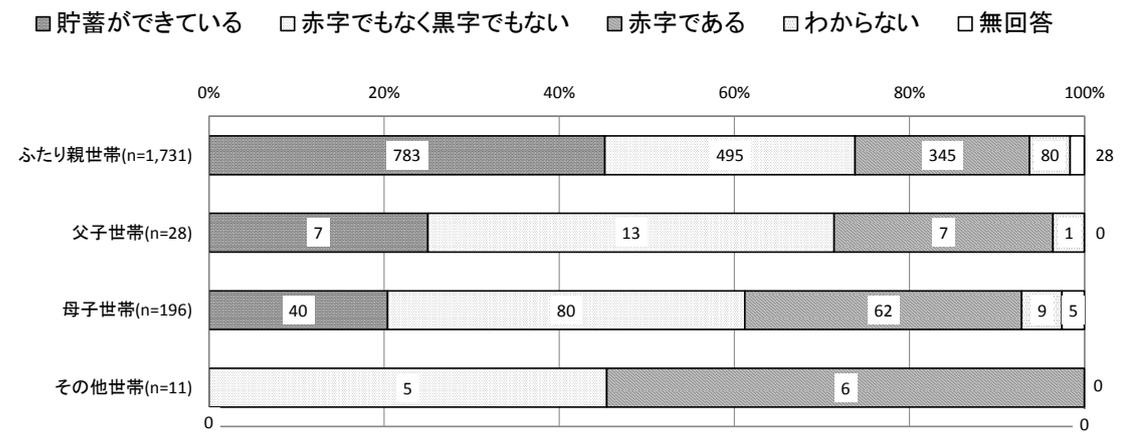
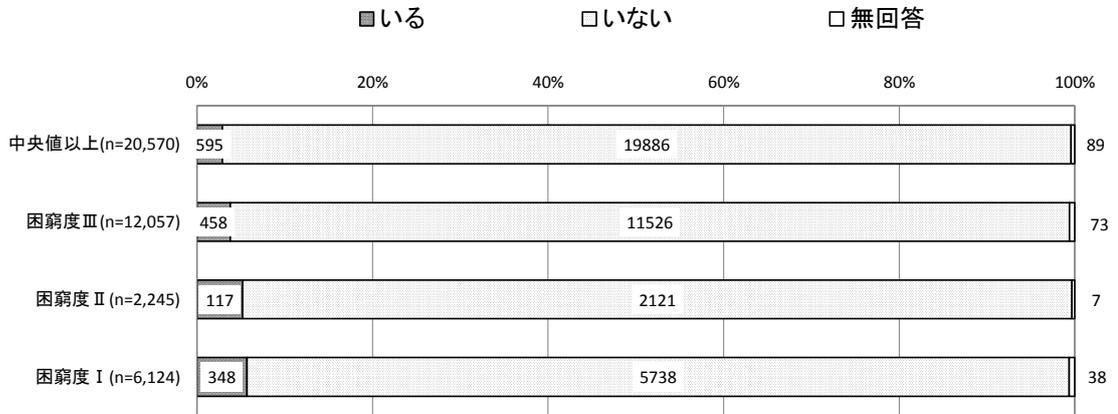


図 世帯構成別に見た家計状況

世帯構成別に見た家計状況を見ると、「貯蓄ができていない」と回答したのは、ふたり親世帯では45.2%であるのに対して、母子世帯では20.4%でした。また、「赤字である」と回答したのは、ふたり親世帯では19.9%であるのに対して、母子世帯では31.6%でした。

困窮度別に見た、介護または介助の必要な方（保護者票問 3-1-2）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

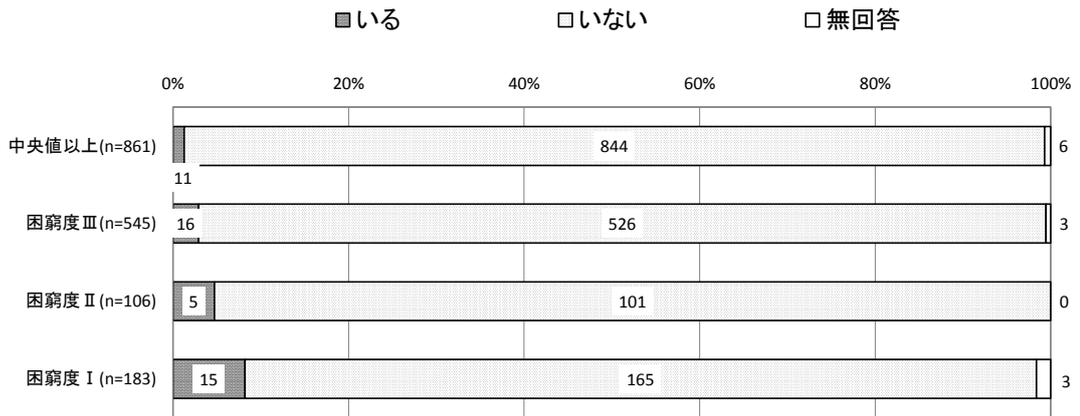
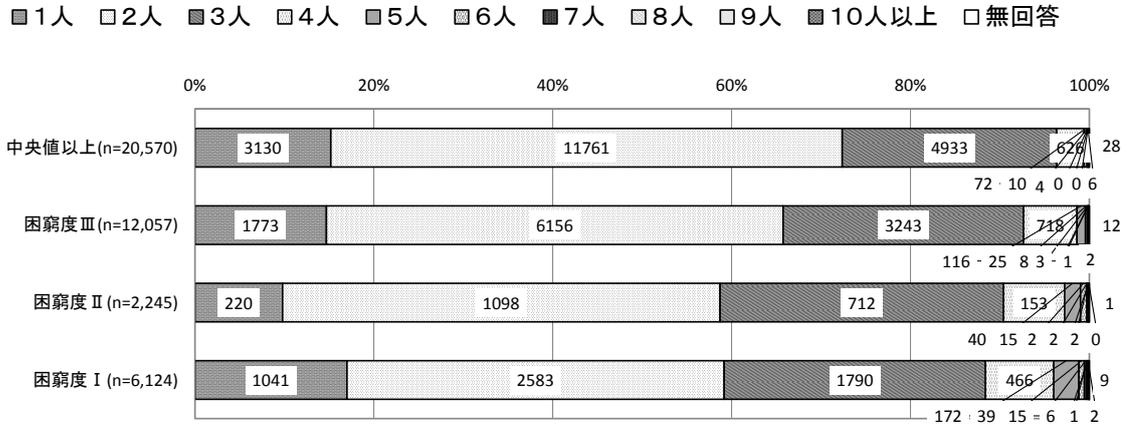


図 困窮度別に見た、介護または介助の必要な方

困窮度別に介護または介助の必要な方を見ると、困窮度が厳しいほど、介護・介助の必要な方がいる割合が高くなっています。

困窮度別に見た、子どもの人数（保護者票問 3-1-3）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

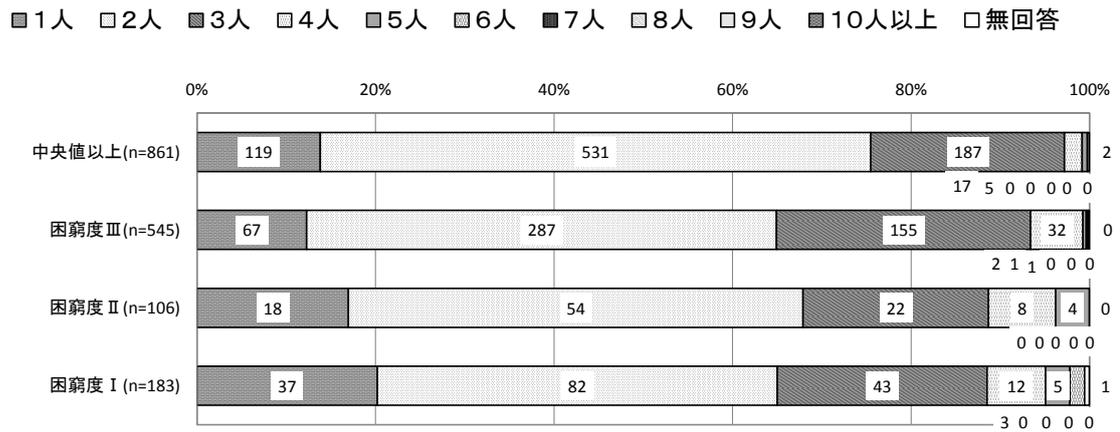
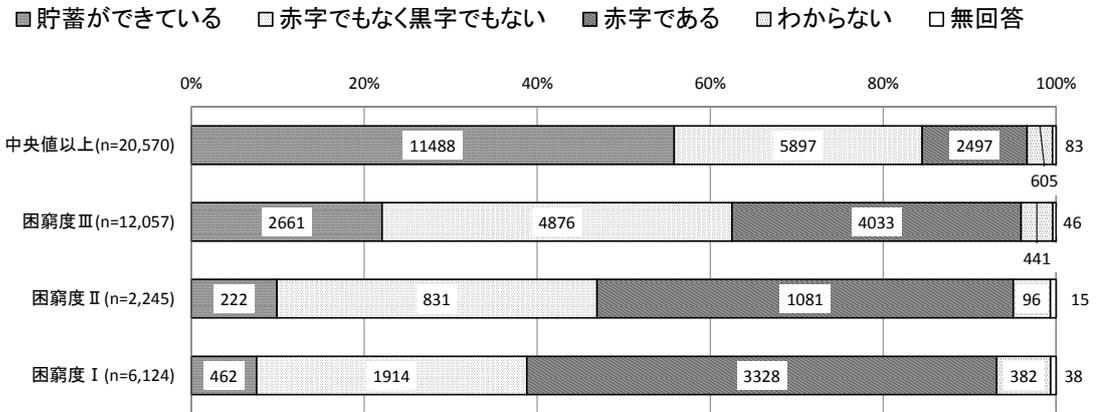


図 困窮度別に見た、子どもの人数

困窮度別に子どもの人数を見ると、中央値以上群において3人以上が24.3%であるのに対して、困窮度Ⅰ群では、34.4%と高くなっています。

困窮度別に見た家計状況（保護者票問 6-1）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

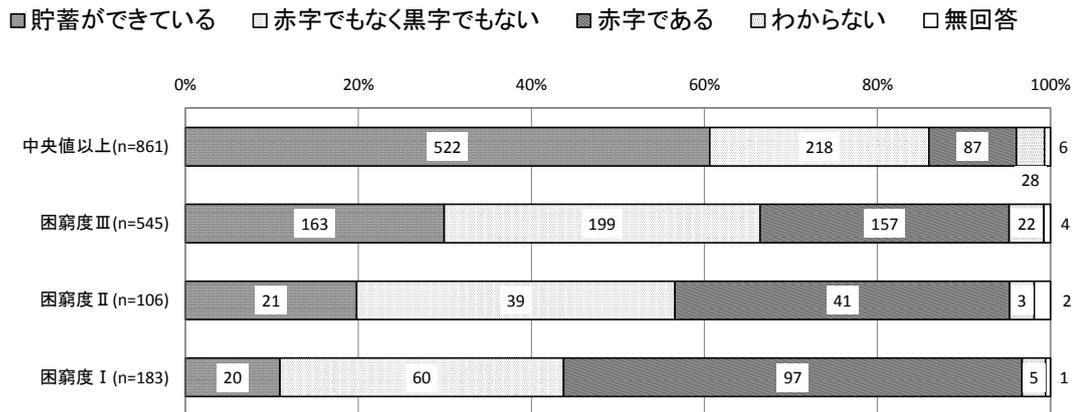
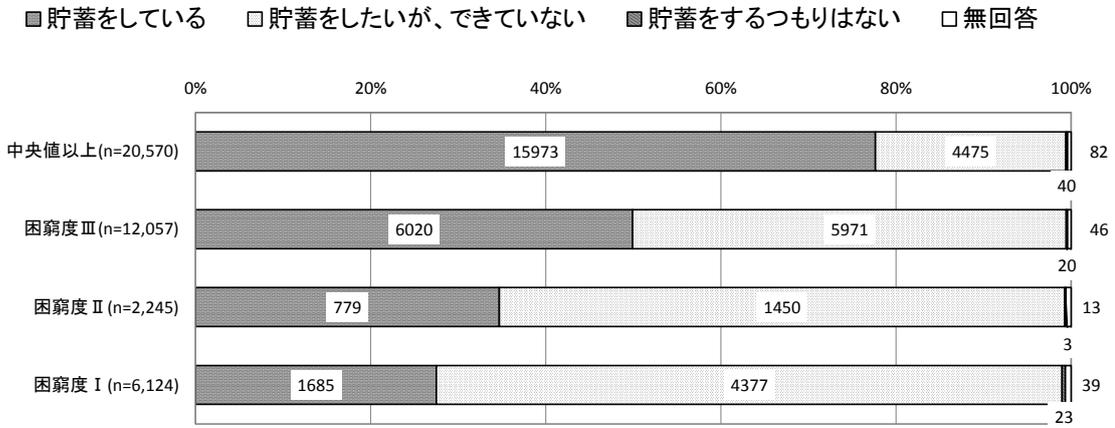


図 困窮度別に見た家計状況

困窮度別に見た家計の状況を見ると、困窮度が厳しいほど、「貯蓄ができている」と回答する割合が低くなり、逆に、「赤字である」と回答する割合が高くなっています。中央値以上群では、「赤字である」と回答した世帯の割合は、10.1%であるのに対して、困窮度Ⅰ群では、53.0%となり、5割強でした。

困窮度別に見た、子どものための貯蓄（保護者票問 6-3）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

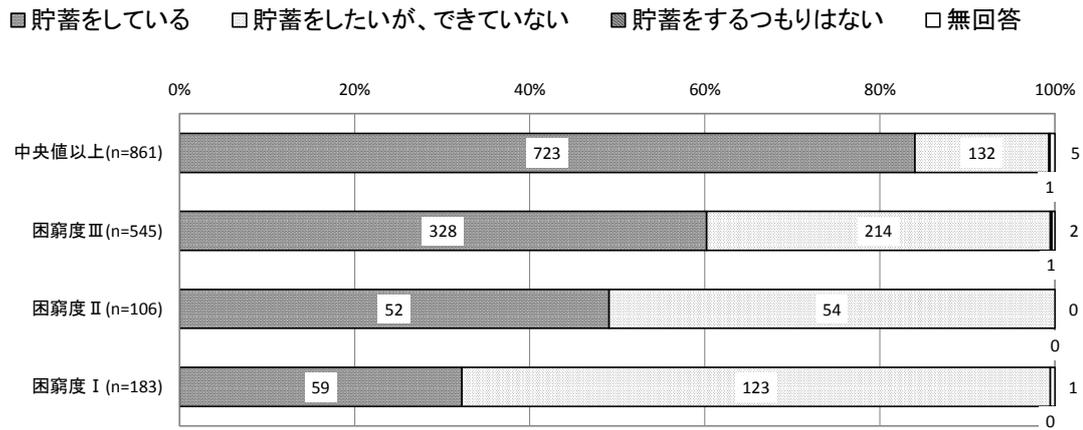


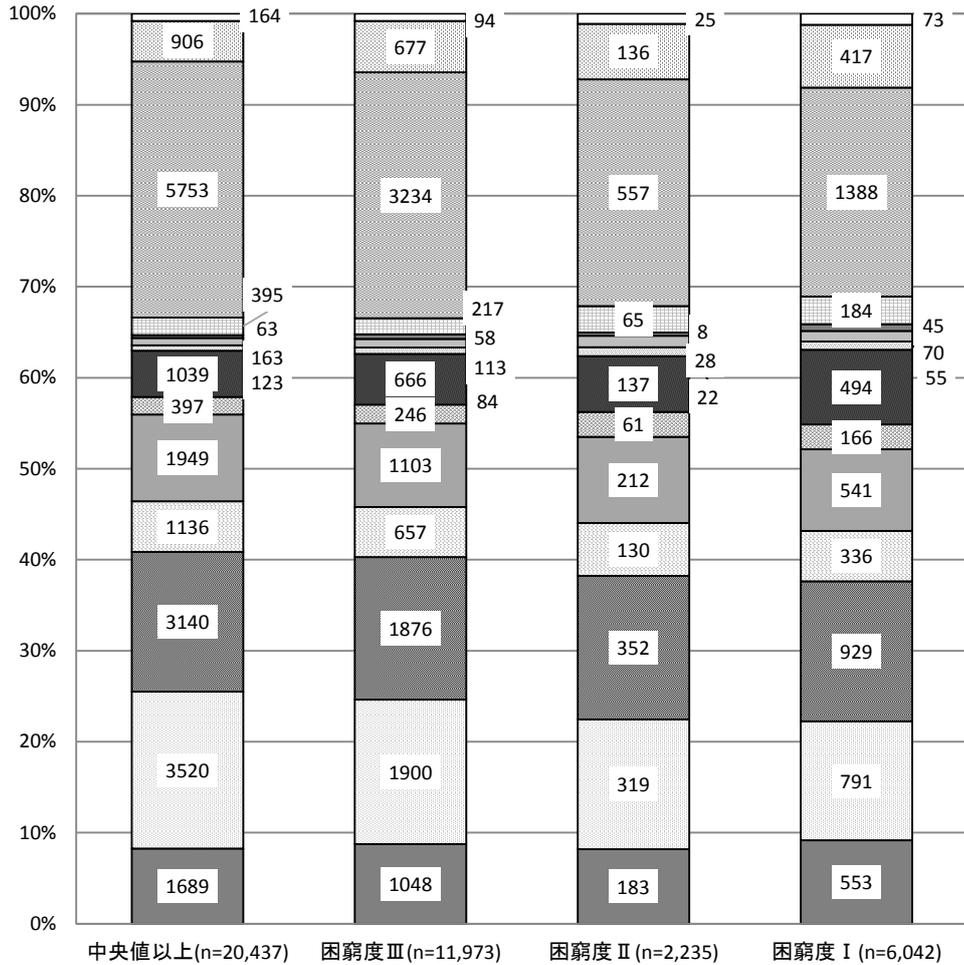
図 困窮度別に見た、子どものための貯蓄

困窮度別に子どものための貯蓄を見ると、困窮度が厳しいほど、「貯蓄をしたいが、できていない」という回答の割合が高くなっています。中央値以上群では、「貯蓄をしている」と回答する割合が84.0%を占めましたが、困窮度Ⅰ群では32.2%にとどまり、「貯蓄をしたいが、できていない」と回答する割合は7割弱でした。

困窮度別に見た、おこづかいの金額分布（子ども票問 17-1）

<大阪府内全自治体>

- 500円より少ない
- 1500～1999円
- 3000～3499円
- 4500～4999円
- わからない
- 500～999円
- 2000～2499円
- 3500～3999円
- 5000円以上
- 無回答
- 1000～1499円
- 2500～2999円
- 4000～4499円
- もらっていない



<枚方市>

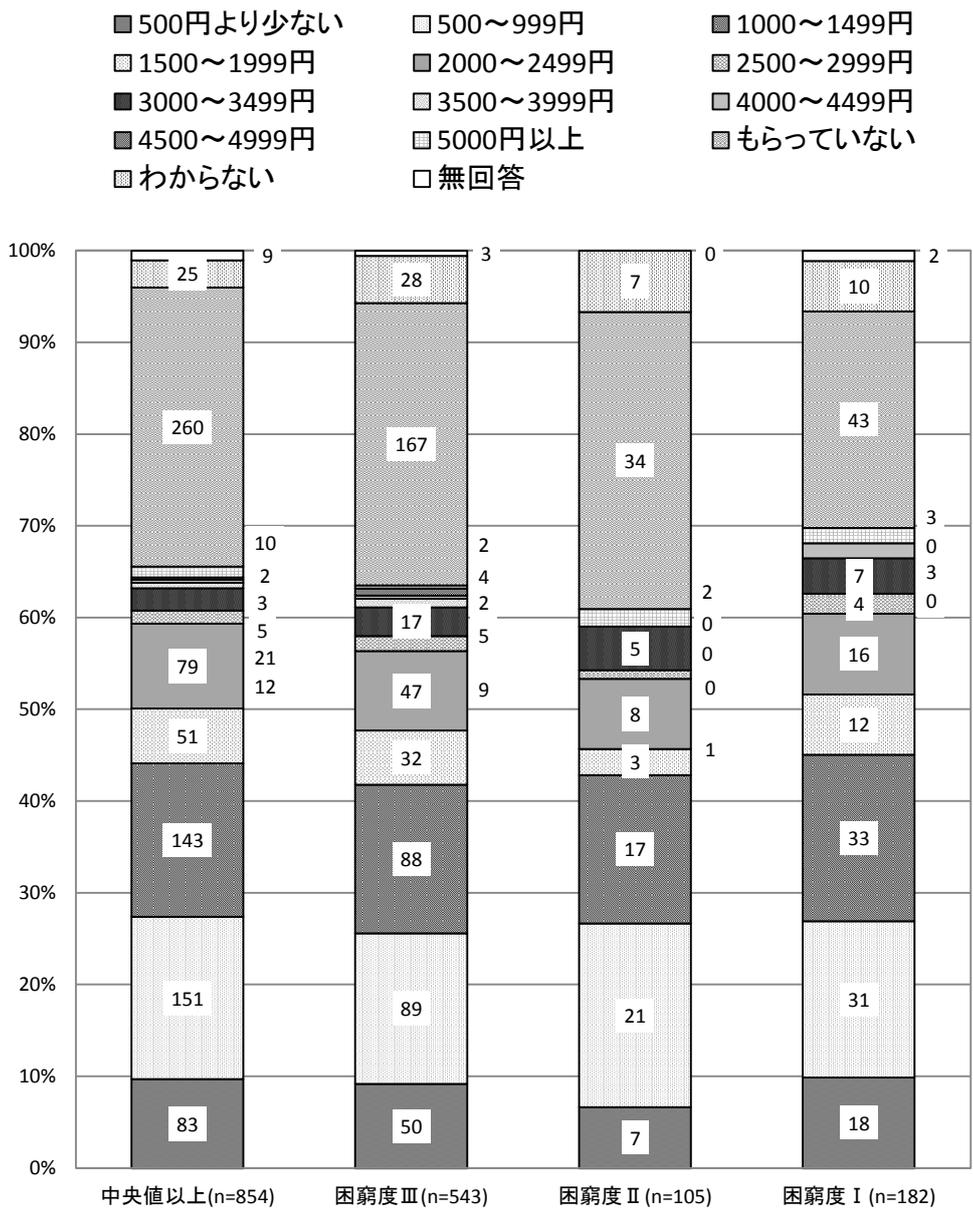
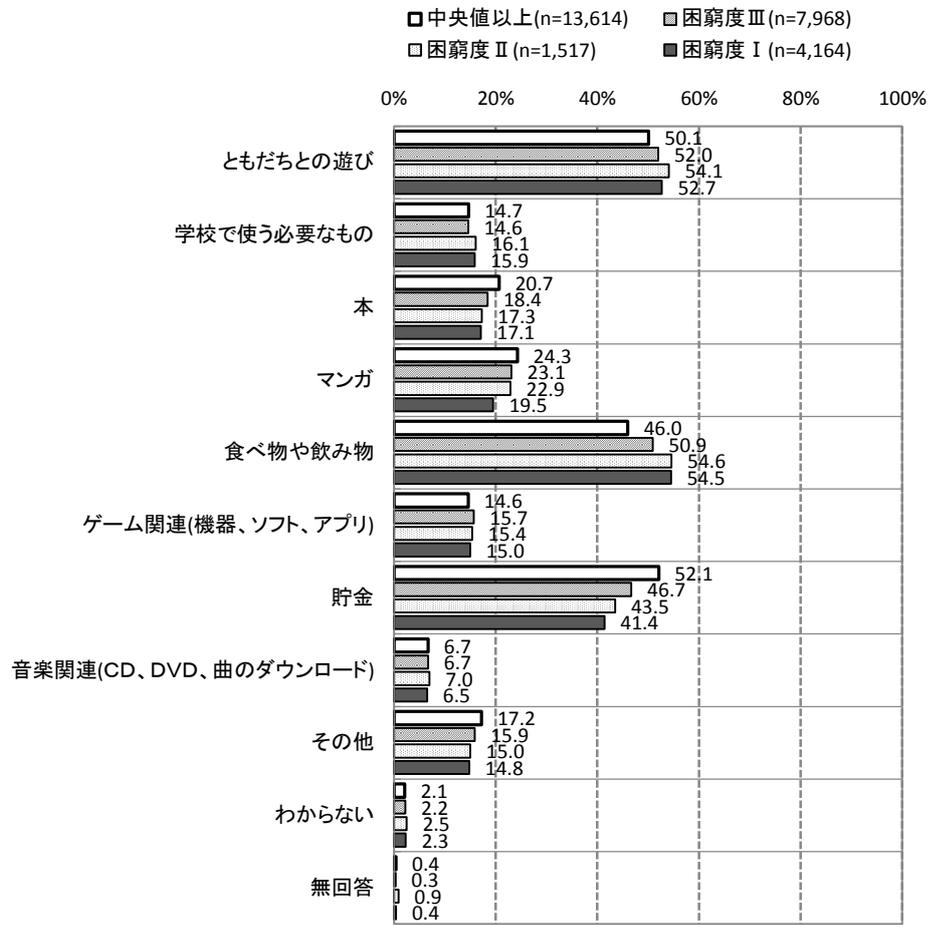


図 困窮度別に見た、おこづかいの金額分布

困窮度別におこづかいの金額分布を見ると、困窮度Ⅰ群において、「もらっていない」と回答した割合が低い結果となりました。おこづかいをもらってはいるが、その用途や必要な物は親に購入してもらっているか、など詳細をみる必要があります。

困窮度別に見た、おこづかいの使い方（子ども票問 17-3）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

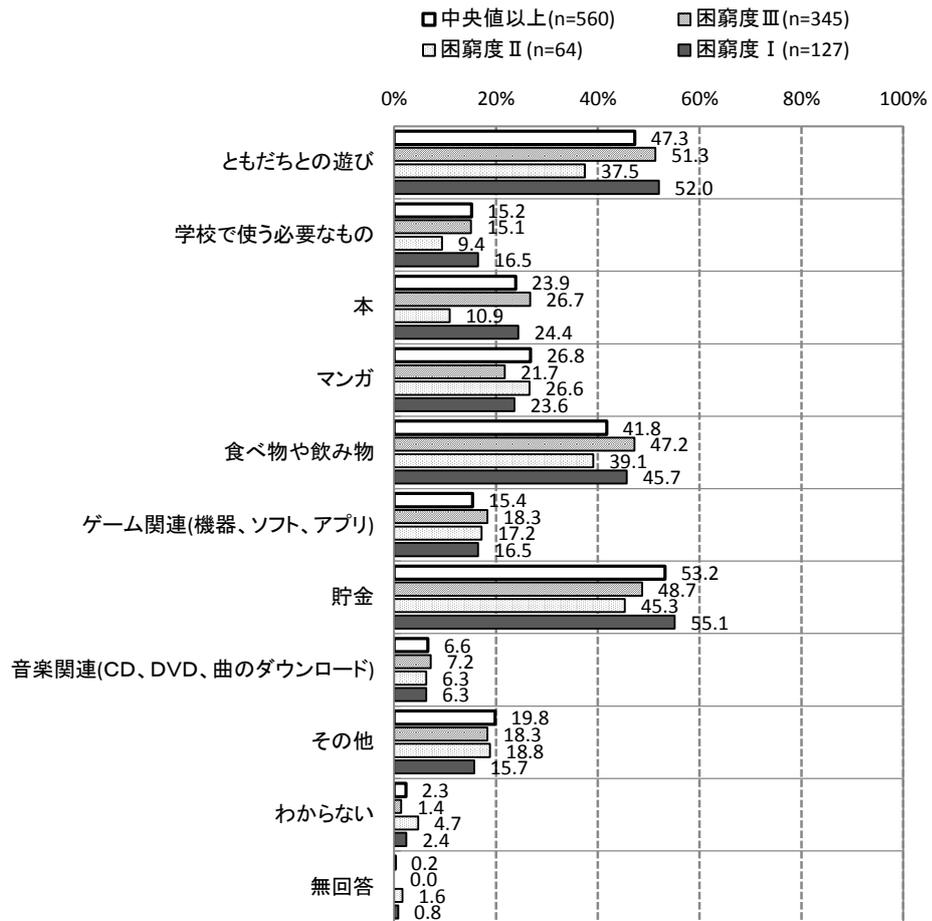


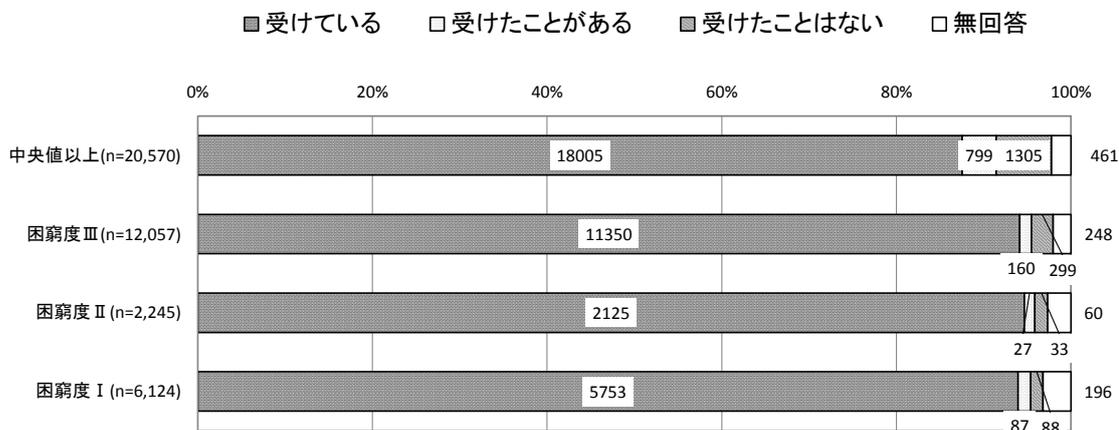
図 困窮度別に見た、おこづかいの使い方

困窮度別におこづかいの使い方を見ると、「貯金」は中央値以上群、困窮度Ⅲ群、困窮度Ⅱ群で順に53.2%、48.7%、45.3%と低くなっていますが、困窮度Ⅰ群では55.1%と高くなっています。

(2) 家庭状況 (制度等)

困窮度別に見た児童手当 (保護者票問 27-3-1)

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

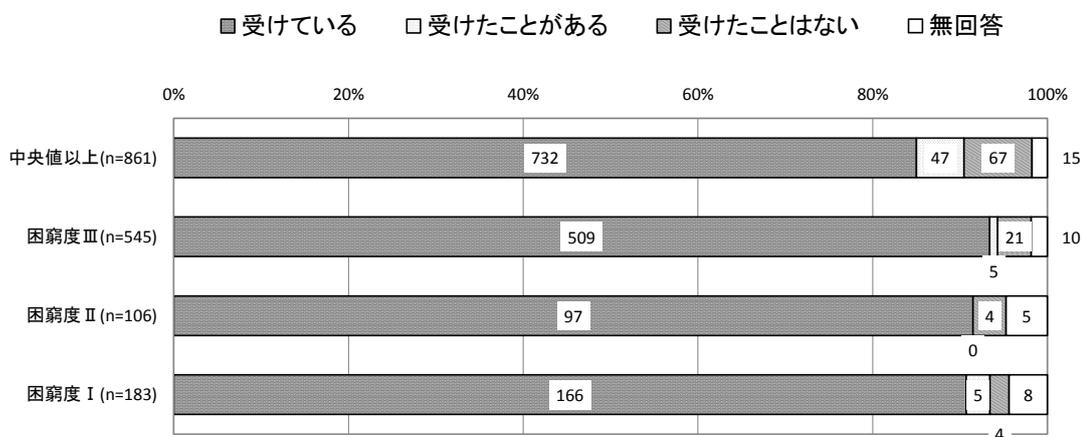
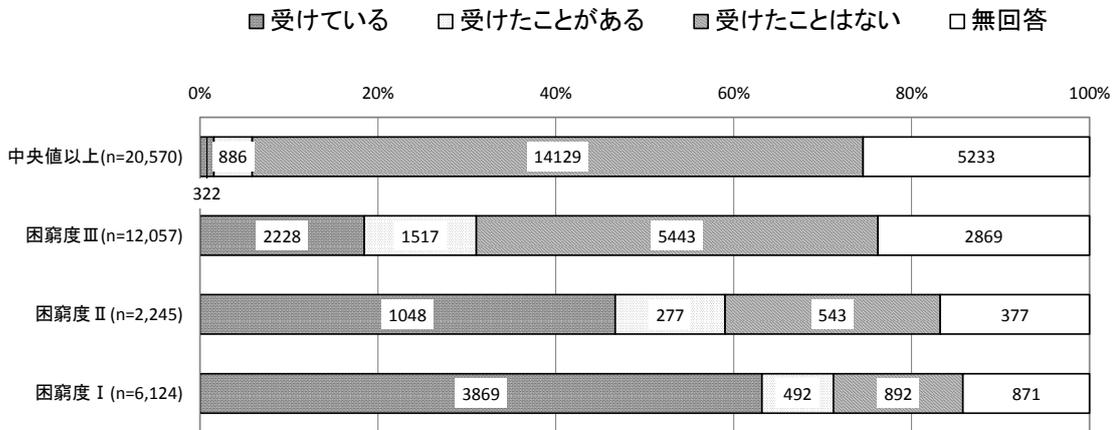


図 困窮度別に見た児童手当

児童手当は多くの世帯が受給していました。困窮度別に児童手当の受給率を見ると、困窮度Ⅰ～Ⅲ群において、とりわけ多くの世帯 (90.7%~93.4%) が「受けている」と回答しました。

困窮度別に見た就学援助費（保護者票問 27-3-2）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

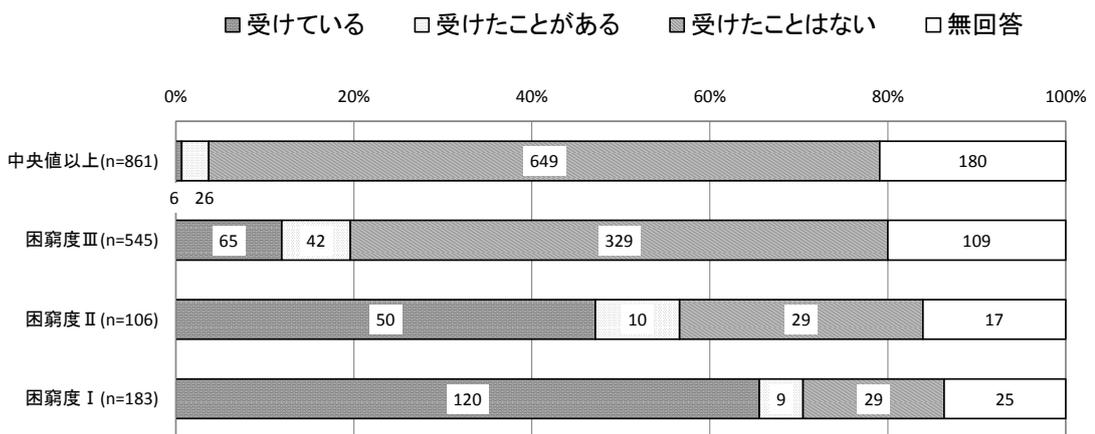
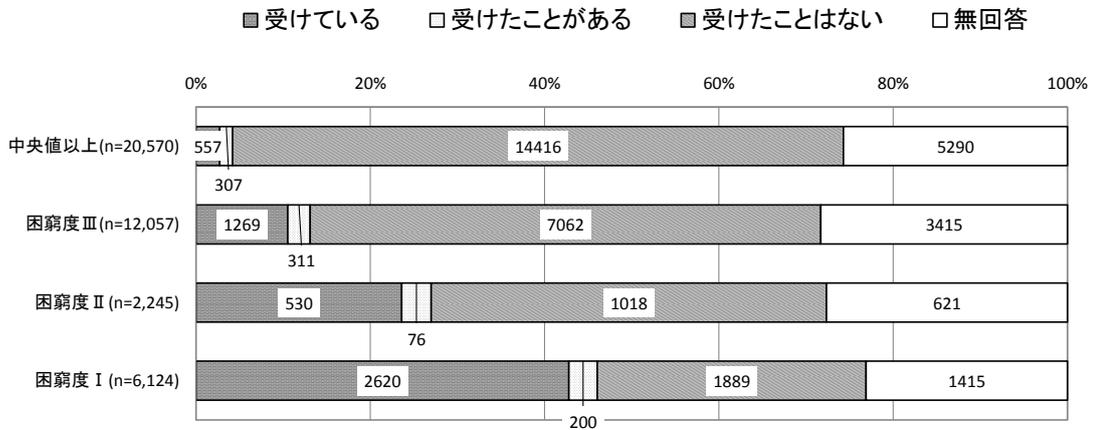


図 困窮度別に見た就学援助費

困窮度別に就学援助費の受給率を見ると、困窮度が厳しいほど、「受けている」の割合が高くなっています。

困窮度別に見た児童扶養手当（保護者票問 27-3-3）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

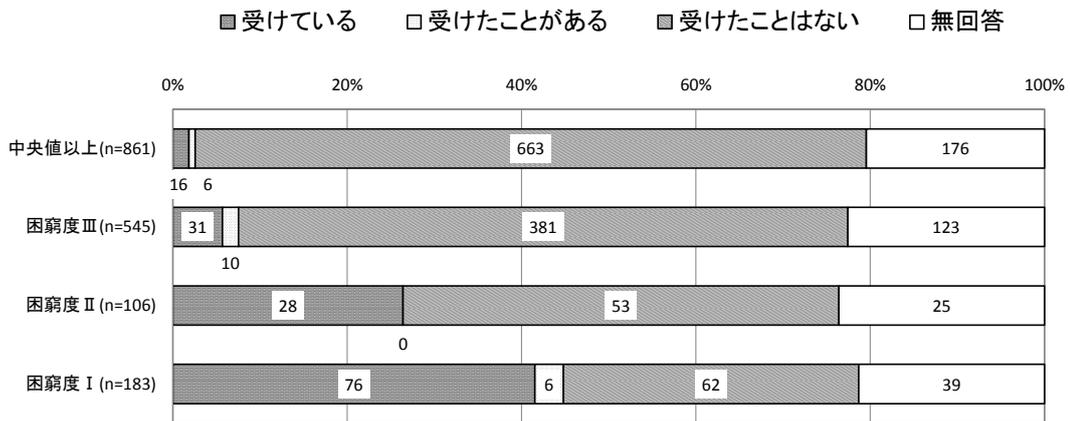
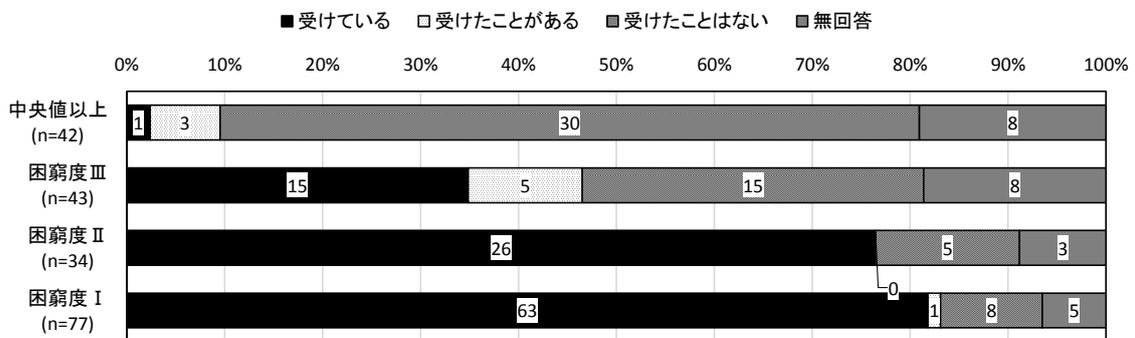


図 困窮度別に見た児童扶養手当

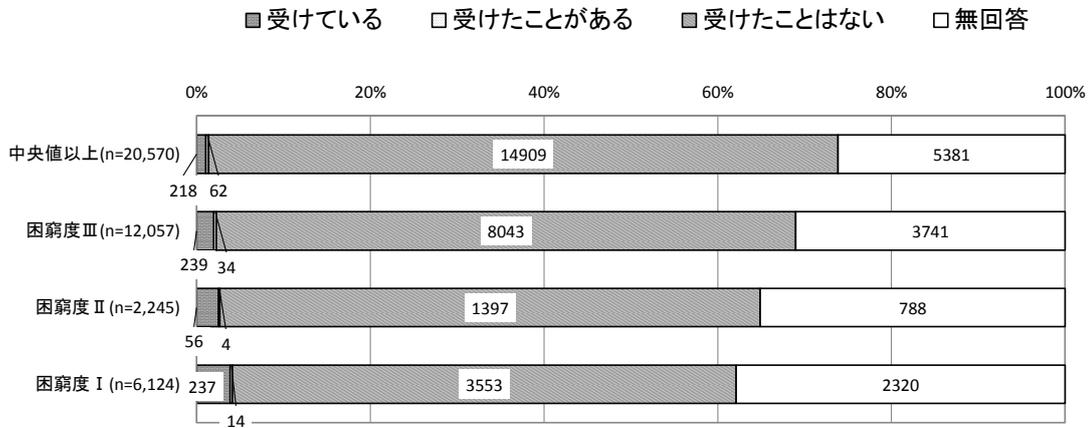
困窮度別に児童扶養手当の受給率を見ると、困窮度が厳しいほど、「受けている」の割合が高くなっています。



補足図 困窮度別に見た児童扶養手当（ひとり親）

困窮度別に見た公的年金（遺族年金、障がい年金）（保護者票問 27-3-7）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

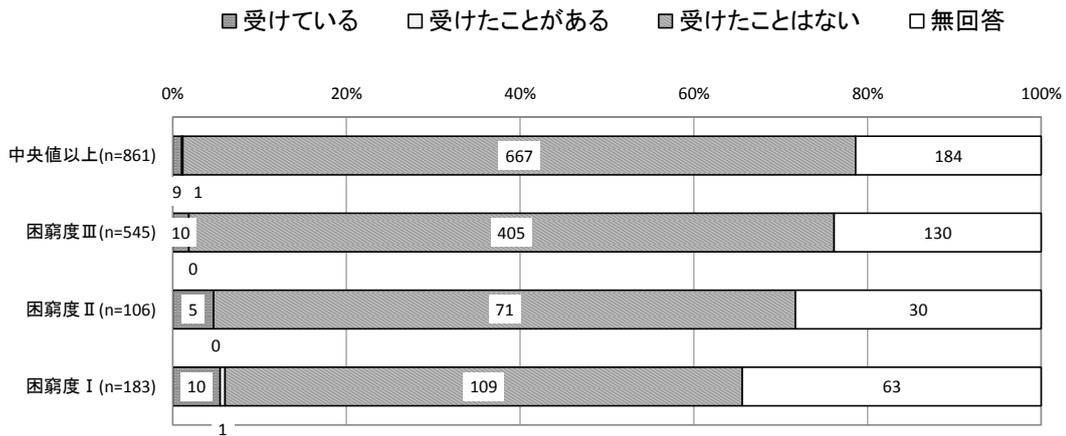
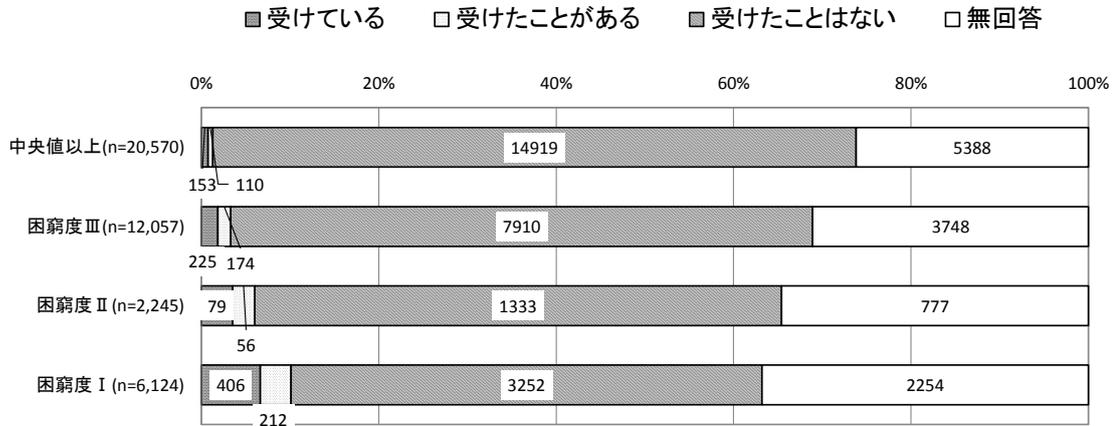


図 困窮度別に見た公的年金（遺族年金、障がい年金）

困窮度別に遺族年金や障がい年金といった公的年金の受給率を見ると、困窮度が厳しいほど、割合が高くなっており、困窮度Ⅰ群においては「受けている」と回答した人は5.5%でした。

困窮度別に見た養育費（保護者票問 27-3-9）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

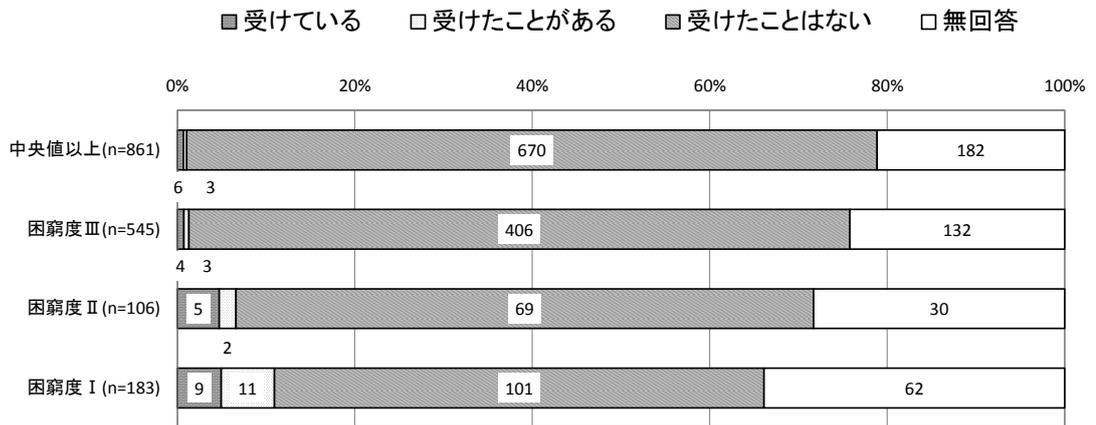
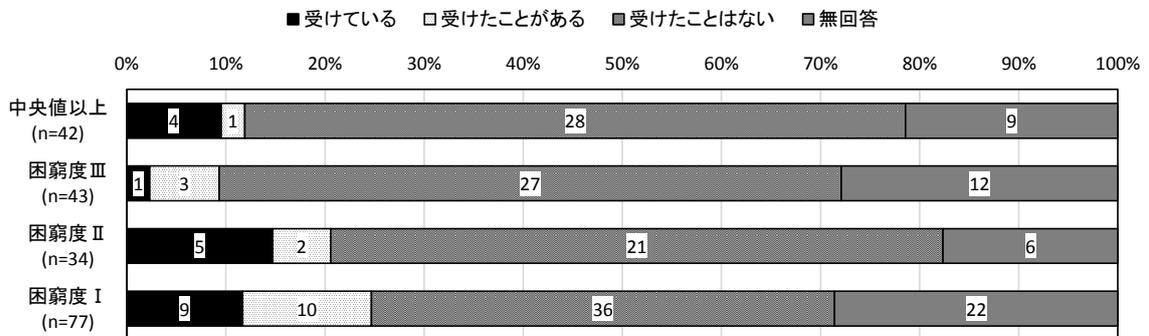


図 困窮度別に見た養育費

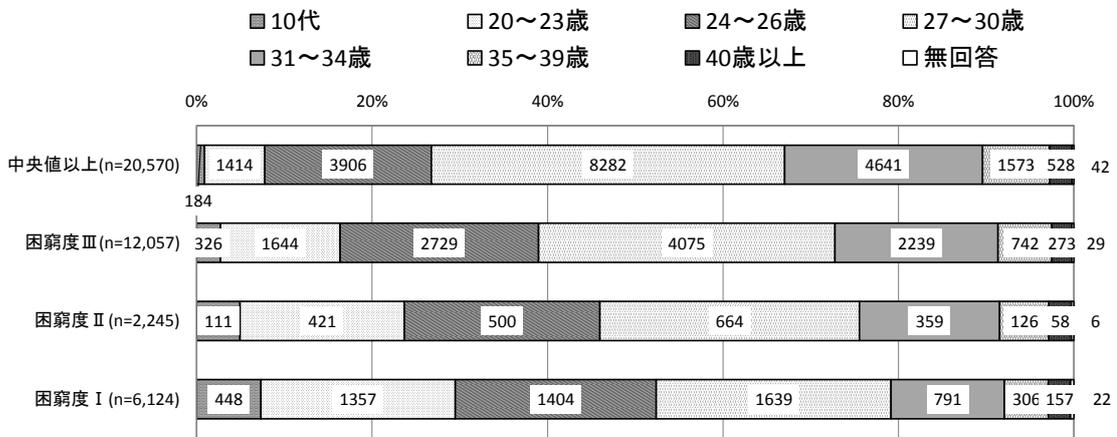
困窮度別に養育費の受給率を見ると、困窮度Ⅰ群においては「受けている」と回答した人は4.9%でした。



補足図 困窮度別に見た養育費（ひとり親）

困窮度別に見た、初めて親となった年齢（保護者票問 19）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

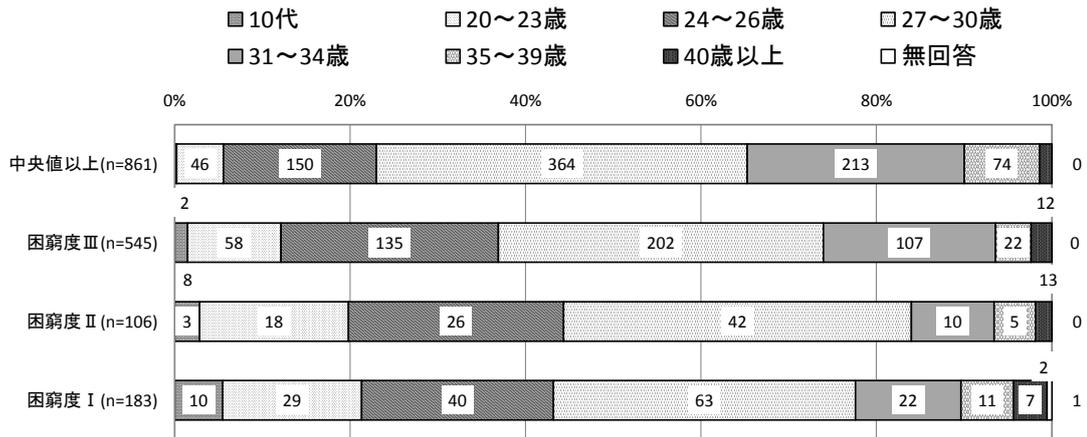
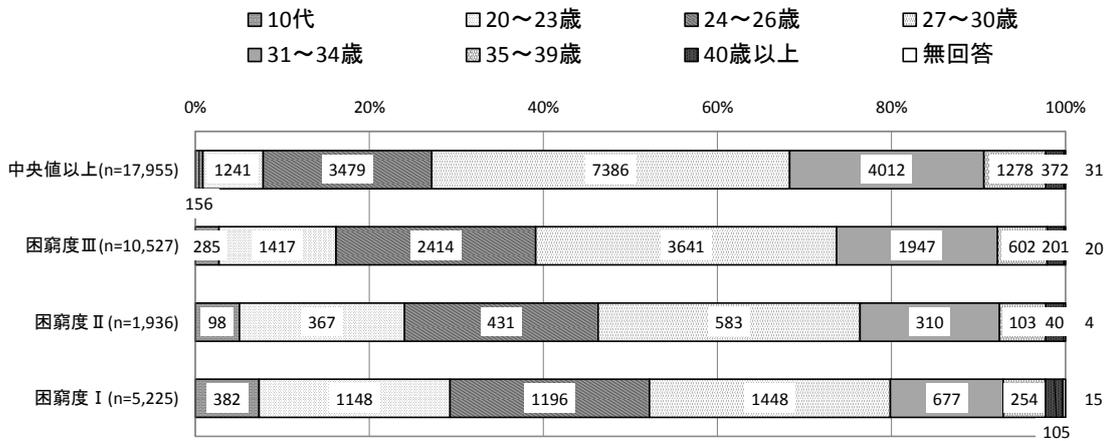


図 困窮度別に見た、初めて親となった年齢

全ての回答者を対象として、困窮度別に初めて親となった年齢を見ると、困窮度が厳しいほど、10代で初めて親となったと答えた割合が高くなっています。

困窮度別に見た、初めて親となった年齢（保護者票問 19）※母親が回答者の場合に限定

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

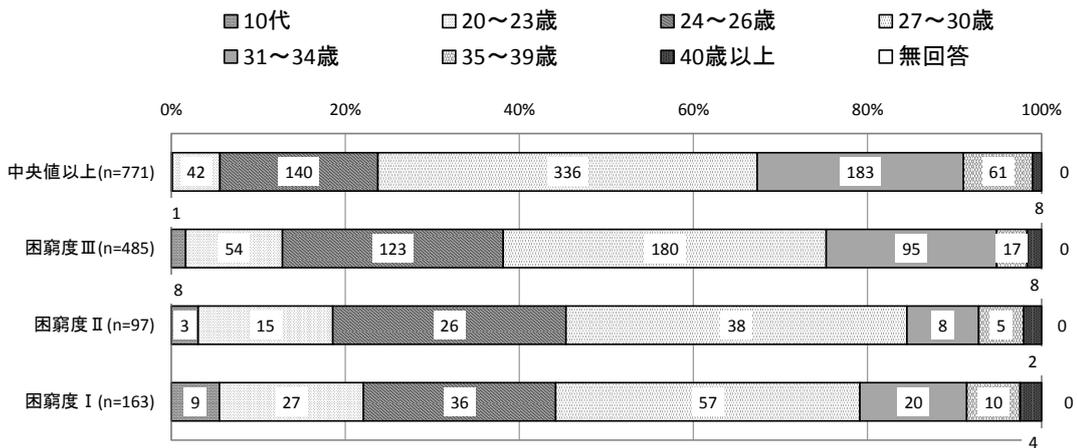
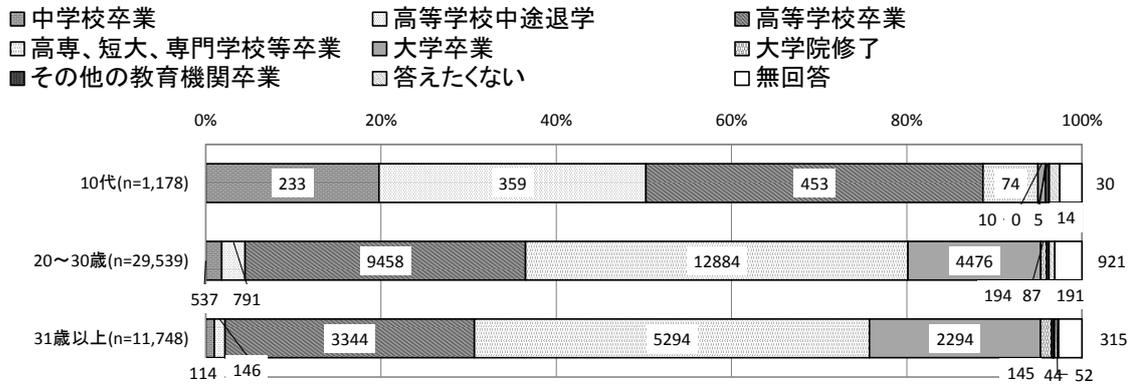


図 困窮度別に見た、初めて親となった年齢

母親回答者を対象として、困窮度別に初めて親となった年齢を見ると、困窮度が厳しいほど、10代で初めて親となったと答えた割合が高くなっています。若くして母親となった人ほど、経済的な問題を抱えている可能性が考えられます。

初めて親となった年齢別に見た、母親の最終学歴（保護者票問 19×保護者票問 8）
 ※母親が回答者の場合に限定

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

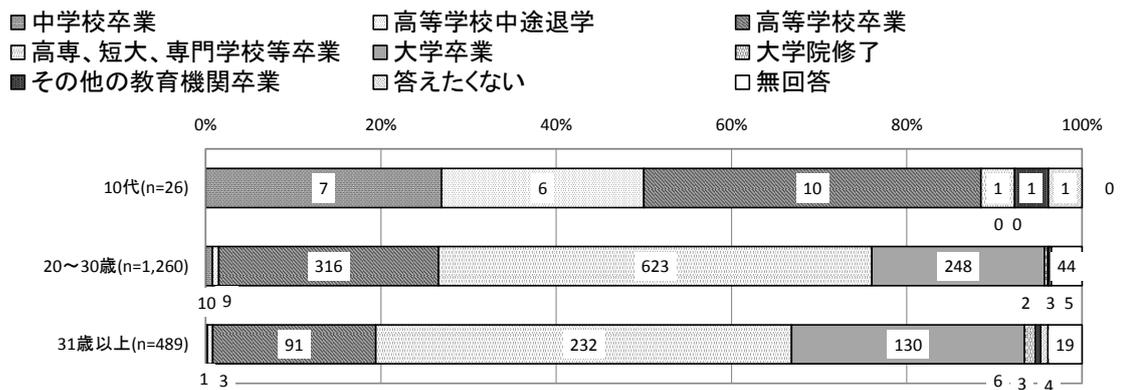


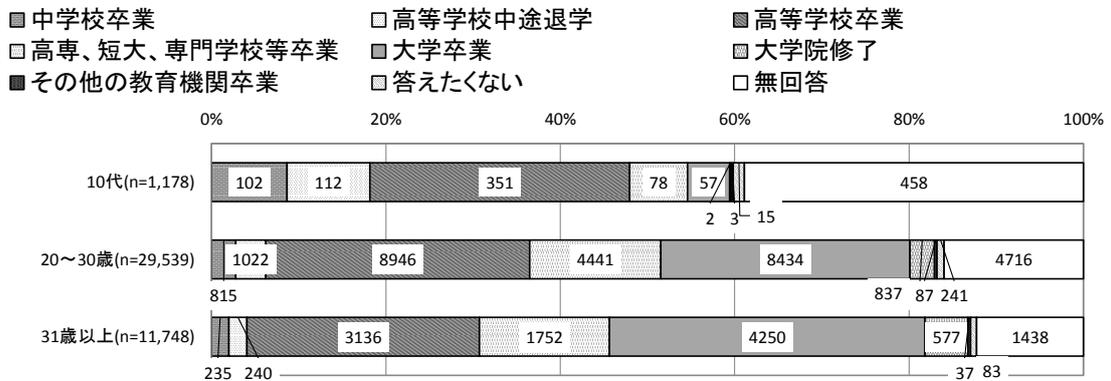
図 初めて親となった年齢別に見た、母親の最終学歴

「初めて親となった年齢」を基準に、10代で初めて親となった10代群、平均出産年齢以下の年齢で初めて親となった平均以下群（20～30歳）、平均出産年齢以上の年齢で初めて親となった平均以上群（30歳以上）を設けました。

母親回答者を対象として、初めて親となった年齢の各群別に母親自身の最終学歴を見ると、10代群において「中学校卒業」または「高等学校中途退学」と回答した割合が高い結果となりました。

初めて親となった年齢別に見た、父親の最終学歴（保護者票問 19×保護者票問 8）
 ※母親が回答者の場合に限定

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

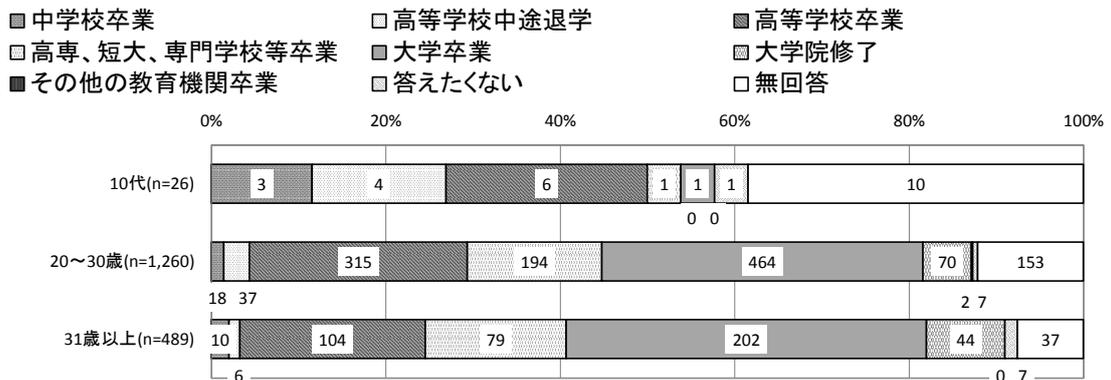
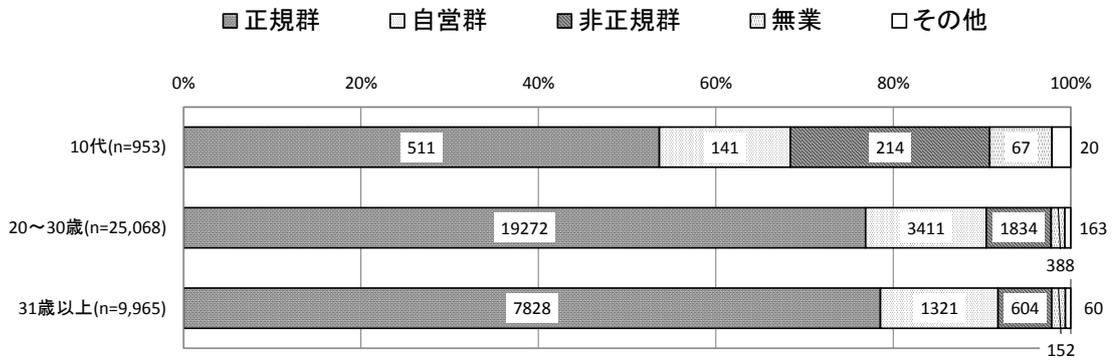


図 初めて親となった年齢別に見た、父親の最終学歴

母親回答者を対象として、初めて親となった年齢の各群別に父親の最終学歴を見ると、10代群において「中学校卒業」または「高等学校中途退学」と回答した割合が高い結果となりました。

初めて親となった年齢別に見た就労状況（保護者票問 19×保護者票問 9 より）
 ※母親が回答者の場合に限定

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

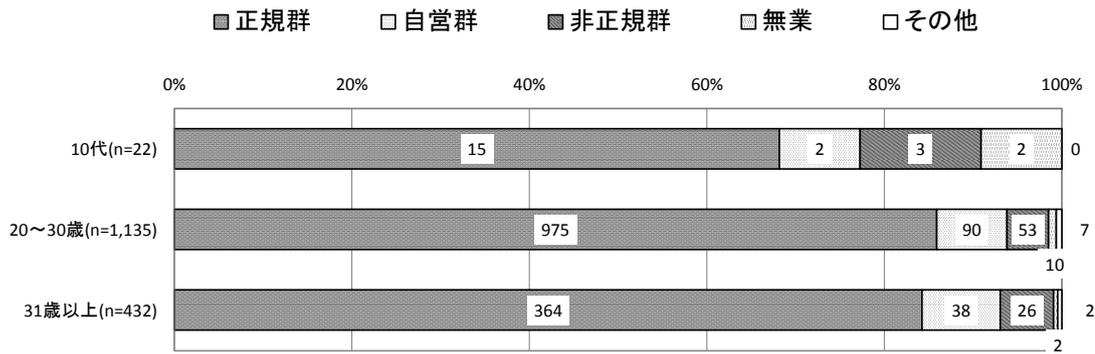
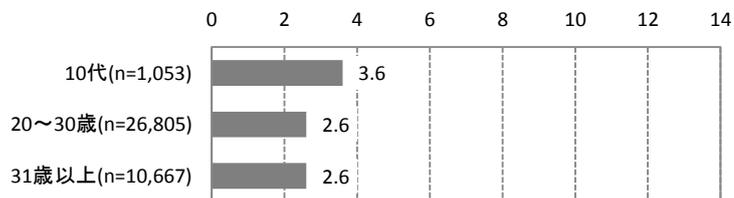


図 初めて親となった年齢別に見た就労状況

母親回答者を対象として、初めて親となった年齢の各群別に就労状況を見ると、10代群は他の群と比較して「正規群」の割合が低く、「非正規群」の割合がやや高い結果となりました。

初めて親となった年齢別に見た、自分の体や気持ちで気になること（保護者票問 19×保護者票問 23）
 ※母親が回答者の場合に限定

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

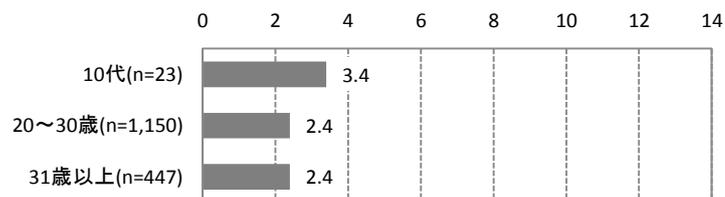
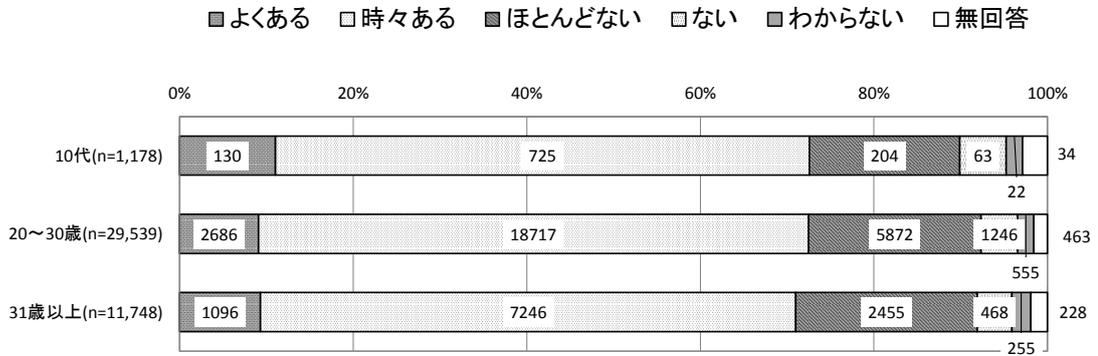


図 初めて親となった年齢別に見た、自分の体や気持ちで気になること

母親回答者を対象として、初めて親となった年齢の各群別に自分の体や気持ちで気になることの該当数を見ると、10代群は、他の群と比較して、自分の体や気持ちで気になると回答した項目の数が多い結果となりました。

初めて親となった年齢別に見た、不安やイライラなどの感情を子どもに向けてしまうこと
 (保護者票問 19×保護者票問 24) ※母親が回答者の場合に限定

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

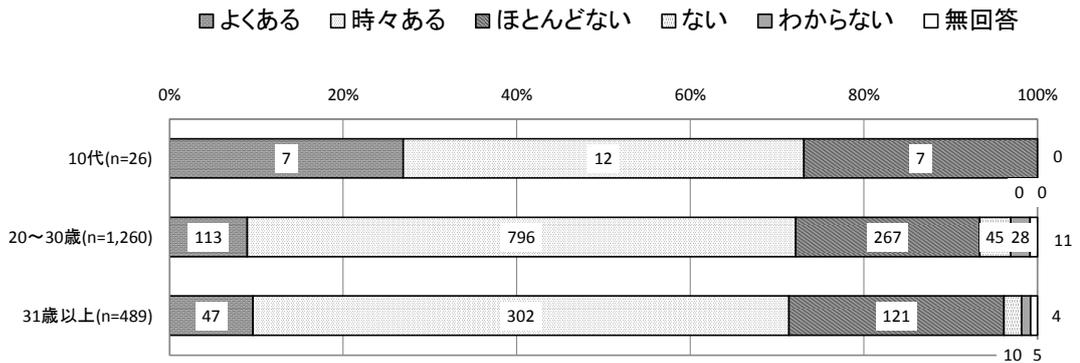
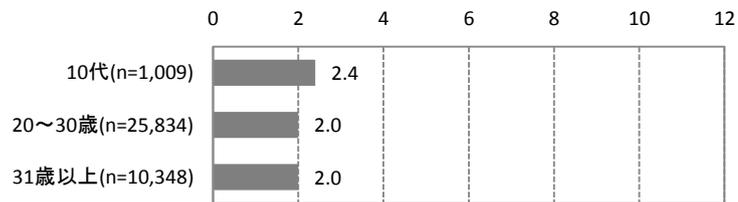


図 初めて親となった年齢別に見た、不安やイライラなどの感情を子どもに向けてしまうこと

母親回答者を対象として、初めて親となった年齢の各群別に不安やイライラなどの感情を子どもに向けてしまうことを見ると、10代群は、他の群と比較して、「よくある」と回答した割合が高い結果となりました。

初めて親となった年齢別に見た、子どもが自分の体や気持ちで気になること
 (保護者票問 19×子ども票問 21) ※母親が回答者の場合に限定

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

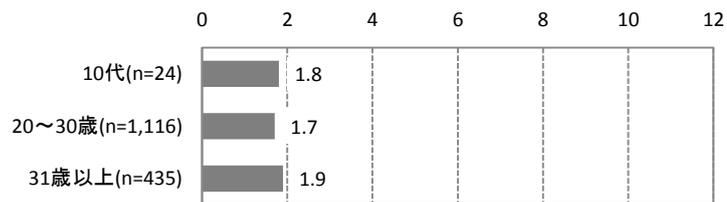


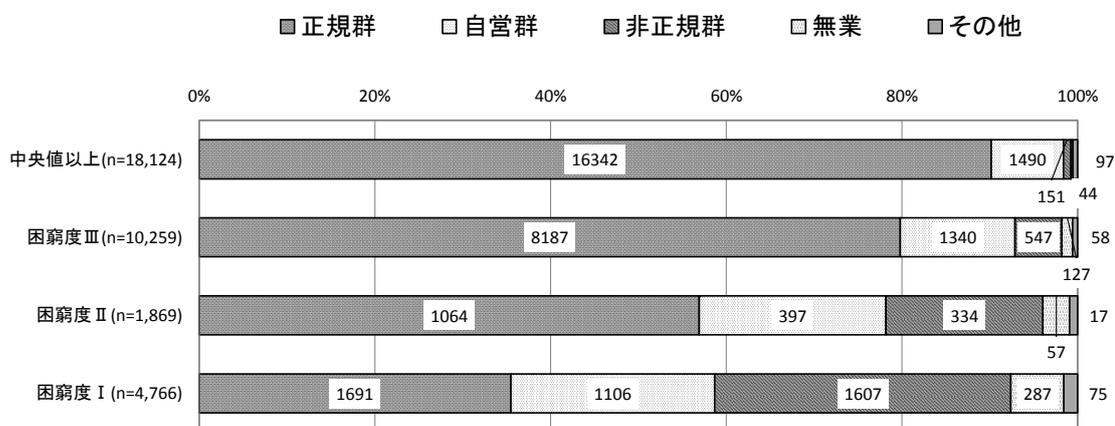
図 初めて親となった年齢別に見た、子どもが自分の体や気持ちで気になること

母親回答者を対象として、初めて親となった年齢の各群別に、その子どもが自分の体や気持ちで気になることの該当数を見ると、群間で大きな差は見られませんでした。

3-2. 雇用

困窮度別に見た就労状況（保護者票問9より）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

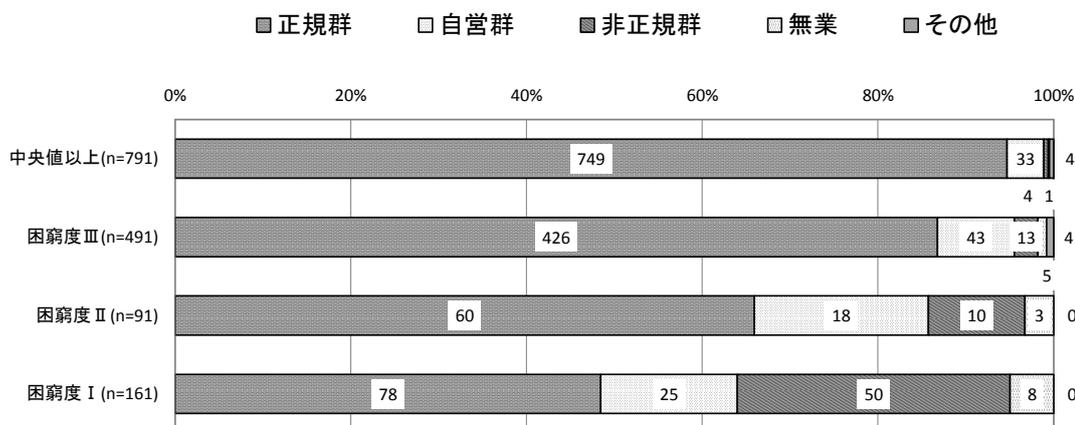


図 困窮度別に見た就労状況

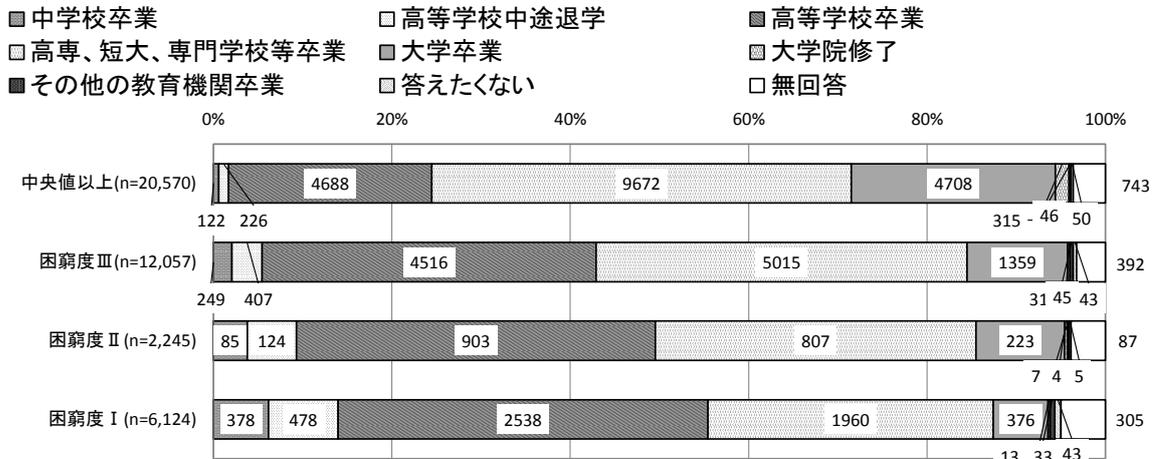
困窮度別に就労状況を見ると、困窮度が厳しいほど、「正規群」の割合が低くなり、「自営群」・「非正規群」の割合が高くなっています。困窮度Ⅰ群においては他と比べて「非正規群」・「無業」の割合がやや高く、それぞれ31.1%、5.0%となっています。

※就労形態は以下のように分類しています。

- ・ 父母あるいは主たる生計者に正規が含まれば「正規群」（問9選択肢1）
- ・ 上記以外で、父母あるいは主たる生計者に自営が含まれば「自営群」（問9選択肢4）
- ・ 上記以外で、父母あるいは主たる生計者に非正規が含まれば「非正規群」（問9選択肢2、3）
- ・ 上記以外で、誰も働いていなければ「無業」（問9選択肢6、7）
- ・ 上記以外がその他となります。

困窮度別に見た、母親の最終学歴（保護者票問 8）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

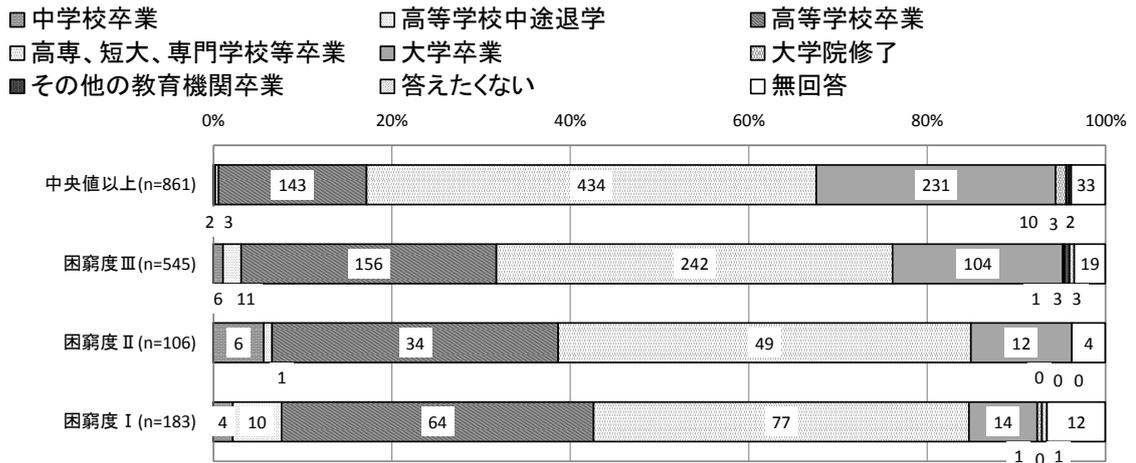
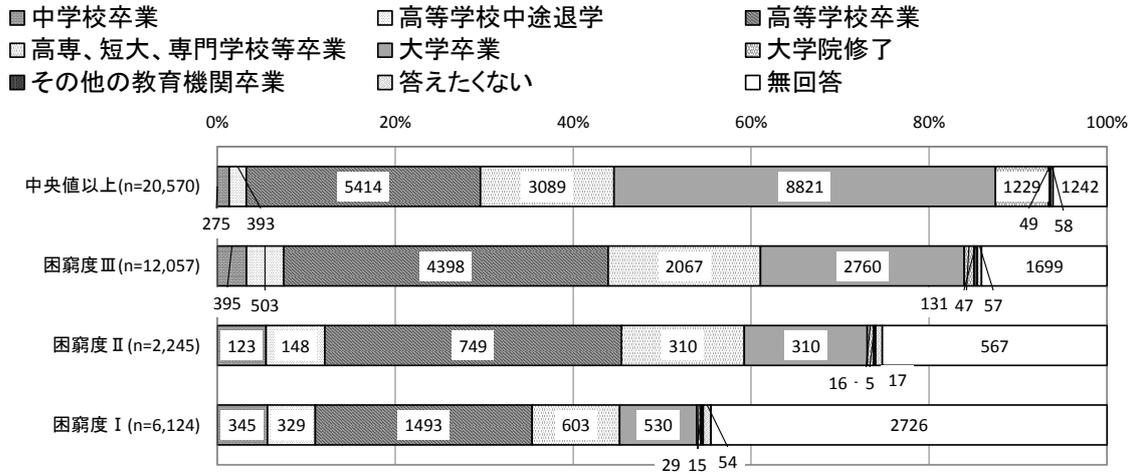


図 困窮度別に見た、母親の最終学歴

困窮度別に母親の最終学歴を見ると、困窮度が厳しいほど、「中学校卒業」と「高等学校中途退学」、「高等学校卒業」の割合が高くなっています。困窮度Ⅰ～Ⅲ群では中央値以上群に比べ、「大学卒業」の割合が低い結果となりました。

困窮度別に見た、父親の最終学歴（保護者票問 8）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

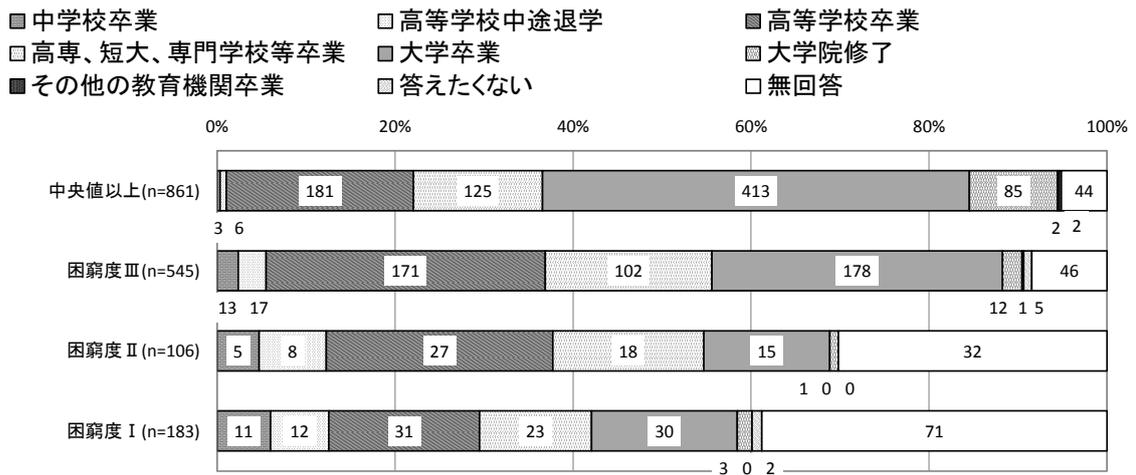
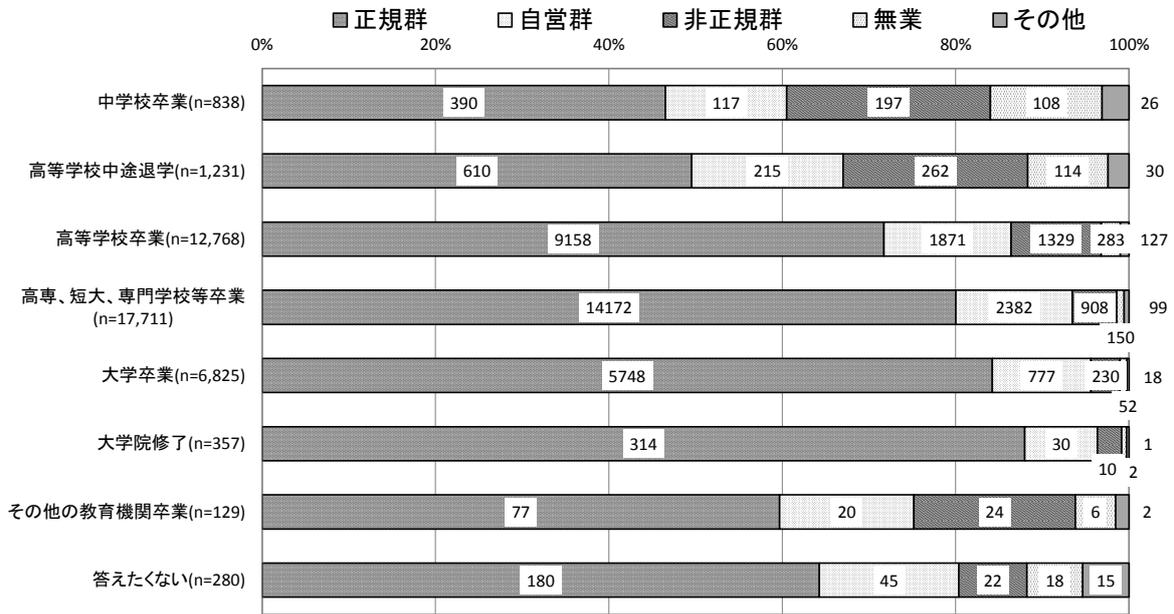


図 困窮度別に見た、父親の最終学歴

困窮度別に父親の最終学歴を見ると、困窮度が厳しいほど、「中学校卒業」と「高等学校中途退学」の割合が高くなっています。困窮度Ⅰ群において、「中学校卒業」と「高等学校中途退学」の割合はそれぞれ6.0%、6.6%でした。また、困窮度Ⅰ群では無回答の割合も高くなりました（38.8%）。

母親の最終学歴別に見た就労状況（保護者票問8×保護者票問9より）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

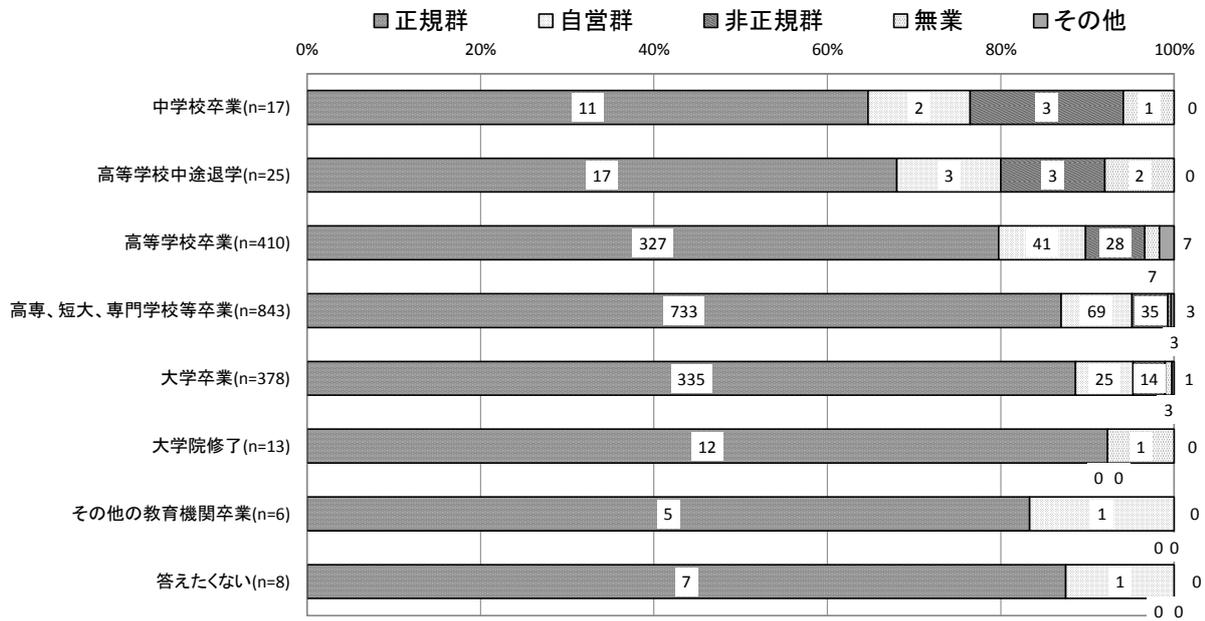
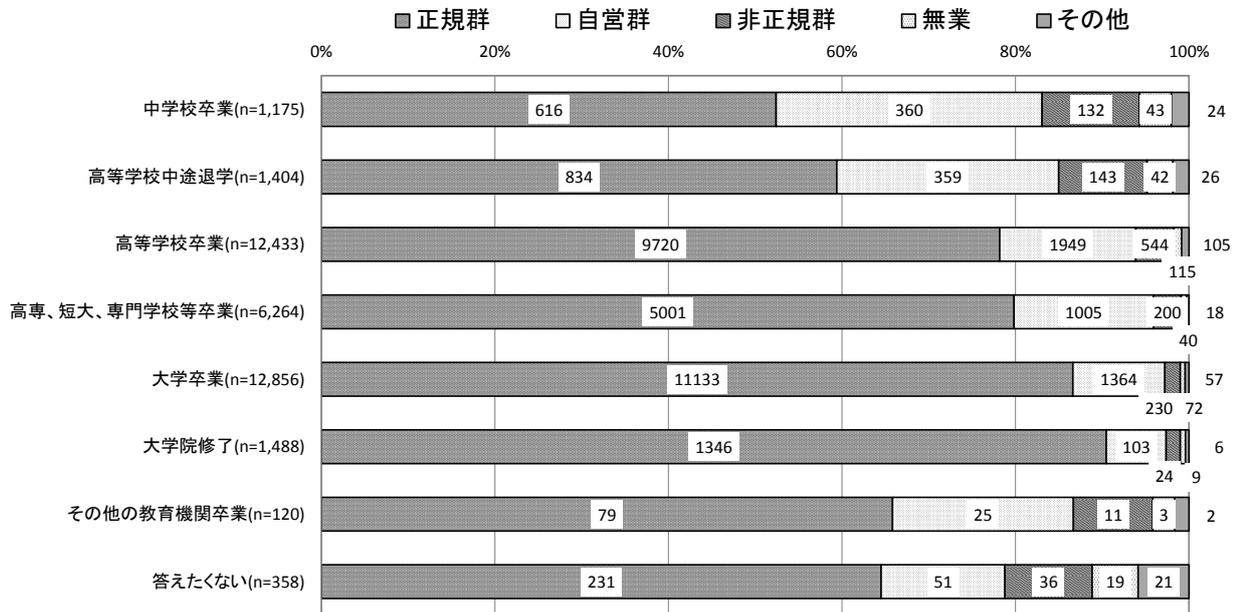


図 母親の最終学歴別に見た就労状況

母親の最終学歴別に就労状況を見ると、概ね、「母親の最終学歴」が高くなるにつれて「正規群」の割合が高くなりました。

父親の最終学歴別に見た就労状況（保護者票問8×保護者票問9より）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

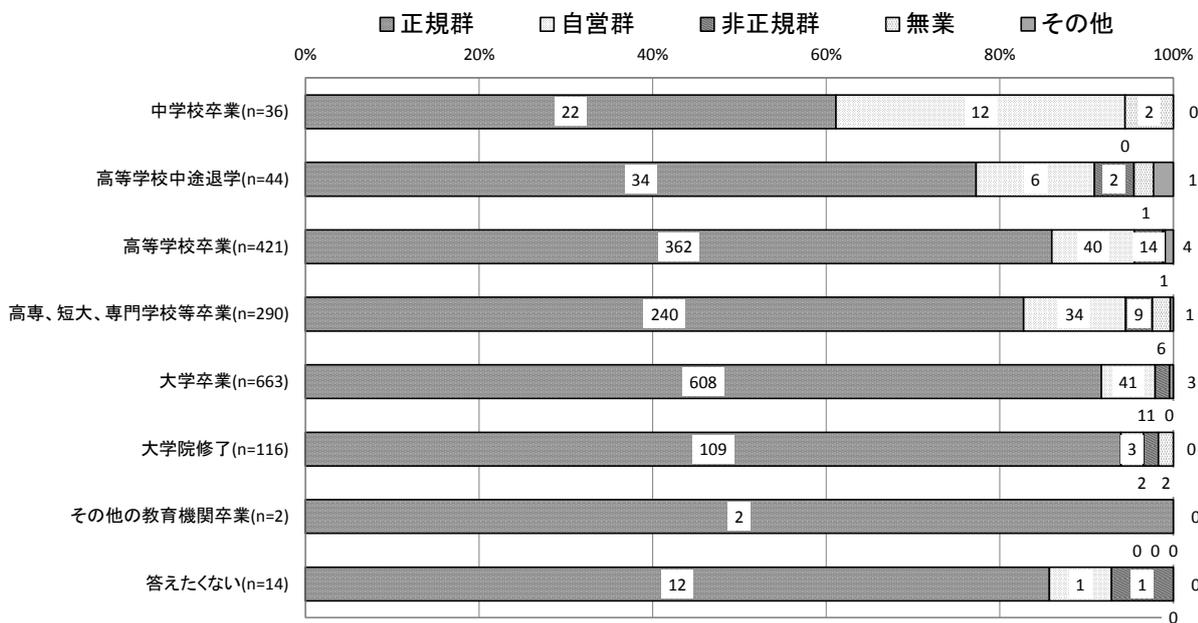
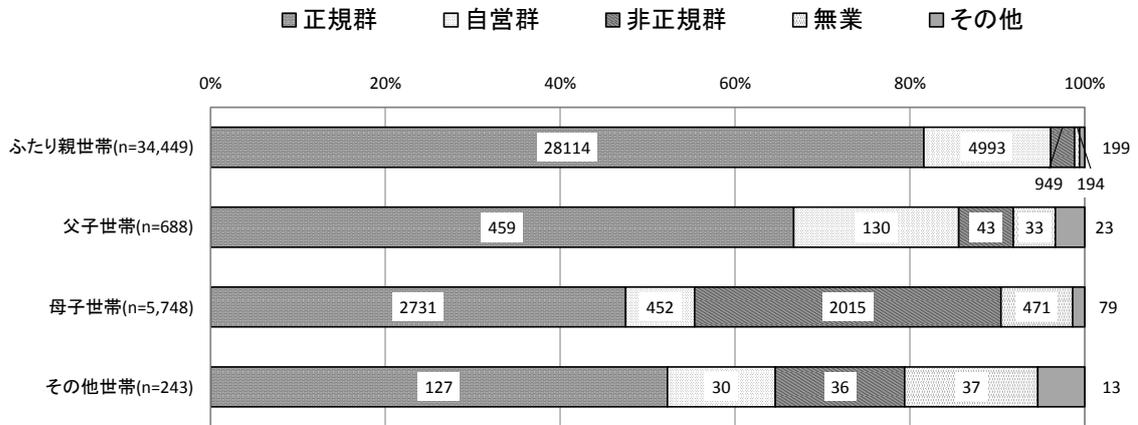


図 父親の最終学歴別に見た就労状況

父親の最終学歴別に就労状況を見ると、概ね、「父親の最終学歴」が高くなるにつれて「正規群」の割合が高くなりました。

世帯構成別に見た就労状況（保護者票問9より）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

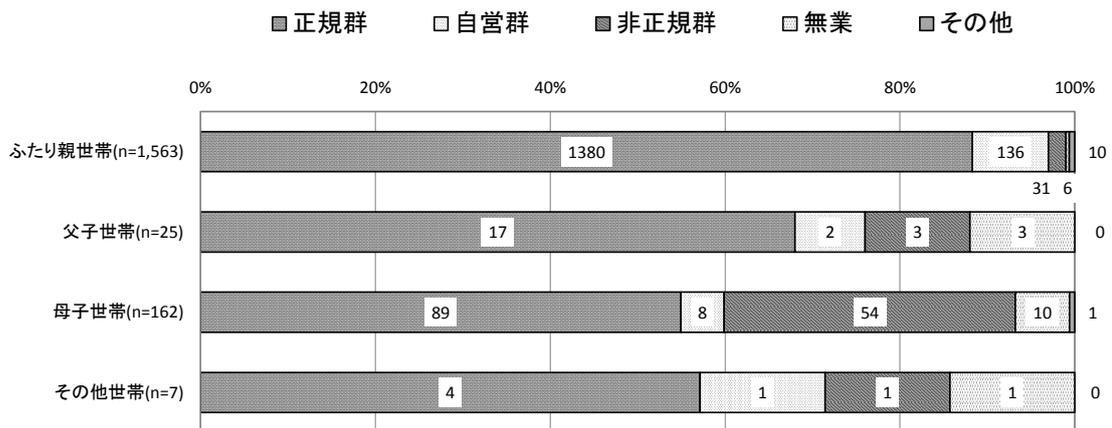
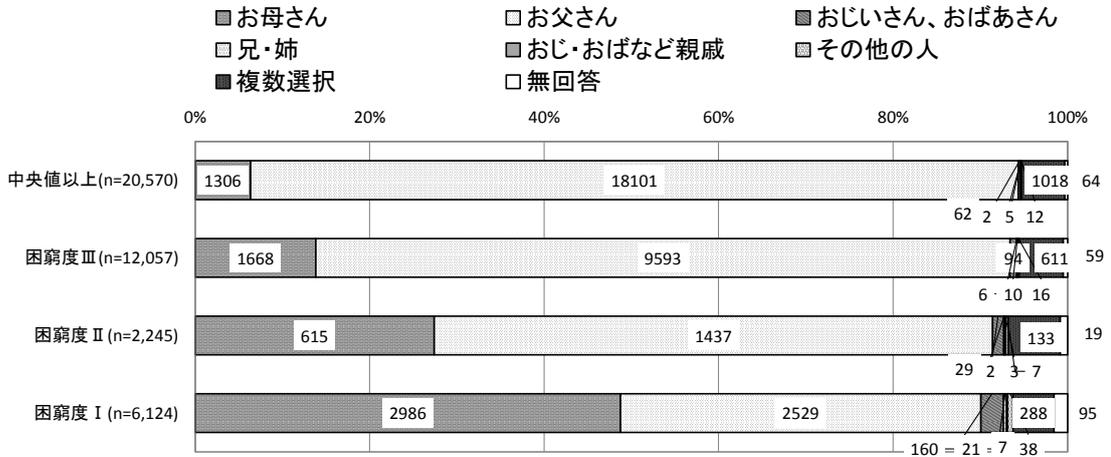


図 世帯構成別に見た就労状況

世帯構成別に就労状況を見ると、「ふたり親世帯」では「正規群」の割合が88.3%ですが、「父子世帯」では68.0%、「母子世帯」では54.9%と低くなりました。「非正規群」は、「父子世帯」では12.0%、「母子世帯」では33.3%となりました。

困窮度別に見た、生計の支えとなる人（保護者票問 27-2）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

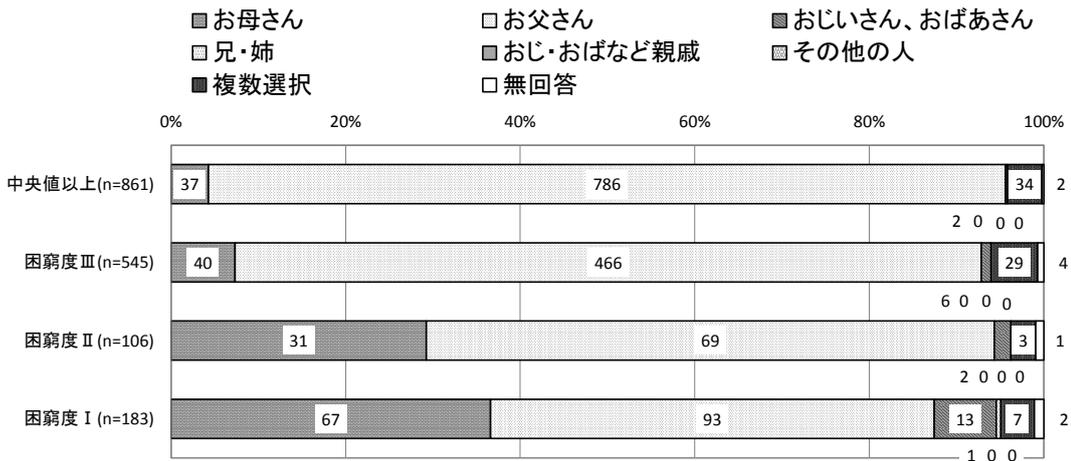
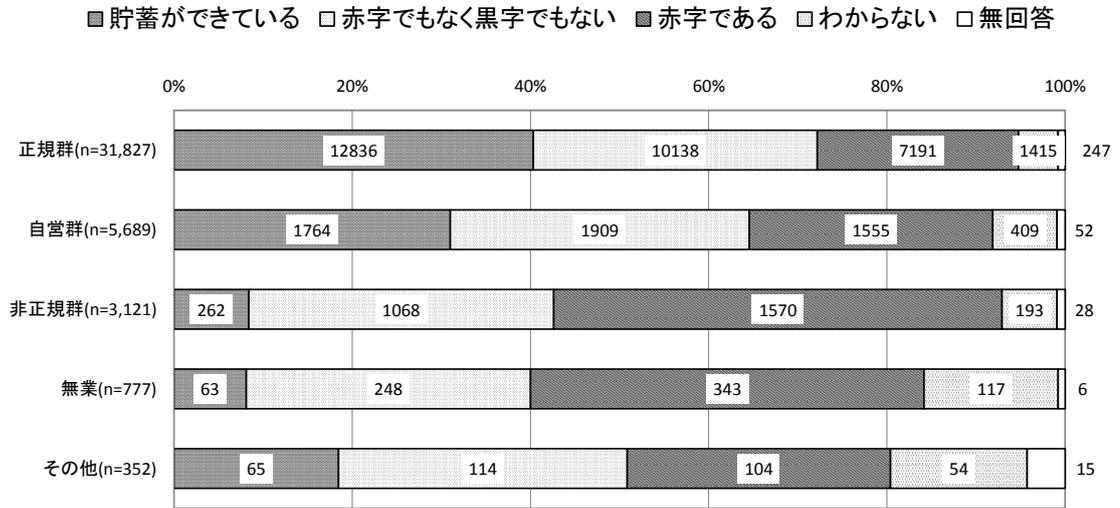


図 困窮度別に見た、生計の支えとなる人

困窮度別に生計の支えとなる人を見ると、中央値以上群では「お父さん」という回答が多く、91.3%でした。困窮度が厳しいほど、「お母さん」という回答が多くなっています。困窮度Ⅱ群では「お母さん」という回答は29.2%、困窮度Ⅰ群では36.6%でした。

就労状況別に見た家計状況（保護者票問 6-1）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

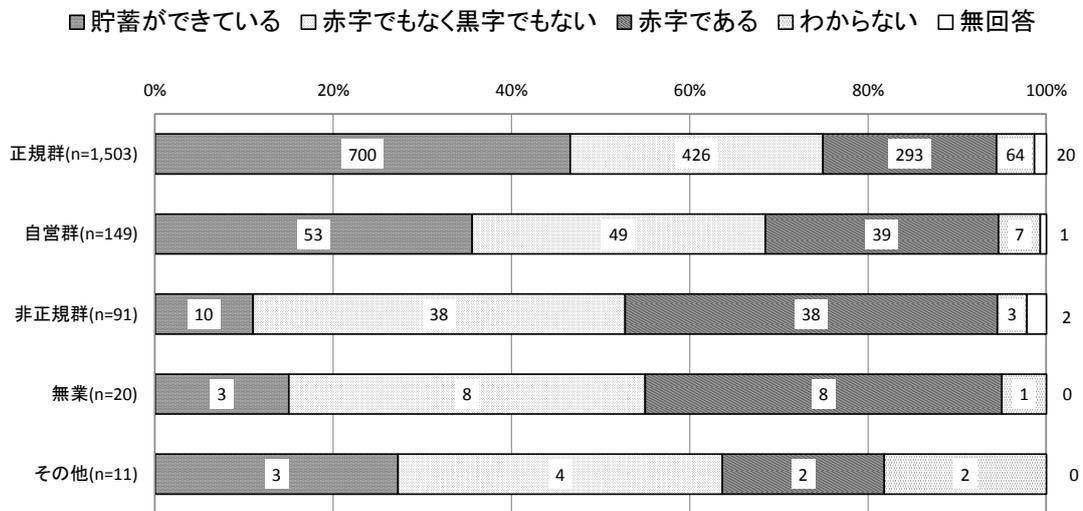


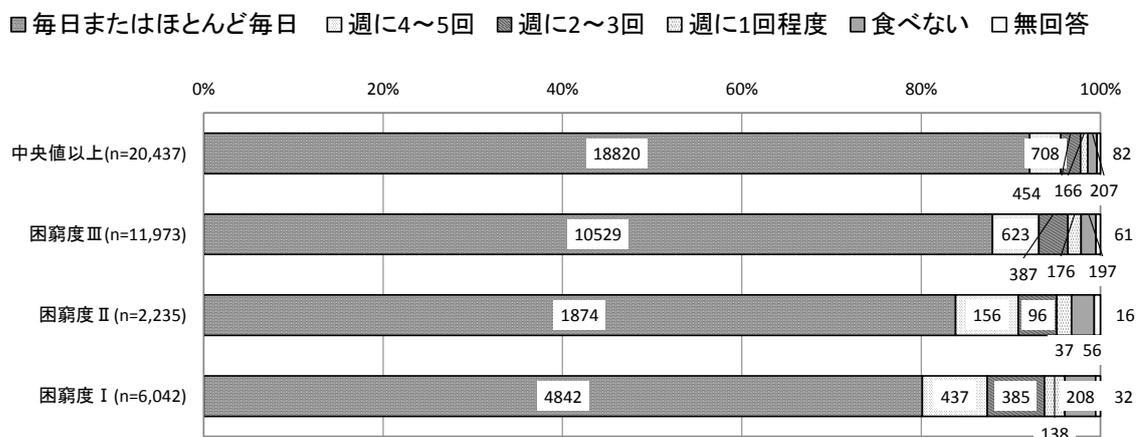
図 就労状況別に見た家計状況

就労状況別に家計状況を見ると、「正規群」・「自営群」では貯蓄ができている割合がそれぞれ、46.6%、35.6%でした。「非正規群」では「赤字である」と回答した人が41.8%にのぼっています。「赤字でもなく黒字でもない」の割合は「非正規群」で41.8%と高い結果となりました。

3-3. 健康

困窮度別に見た、朝食の頻度（子ども票問 5-1）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

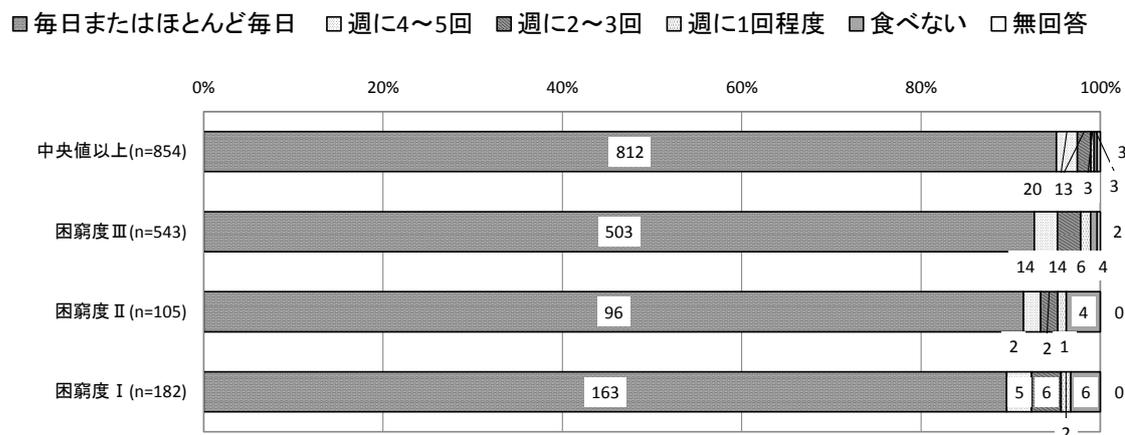
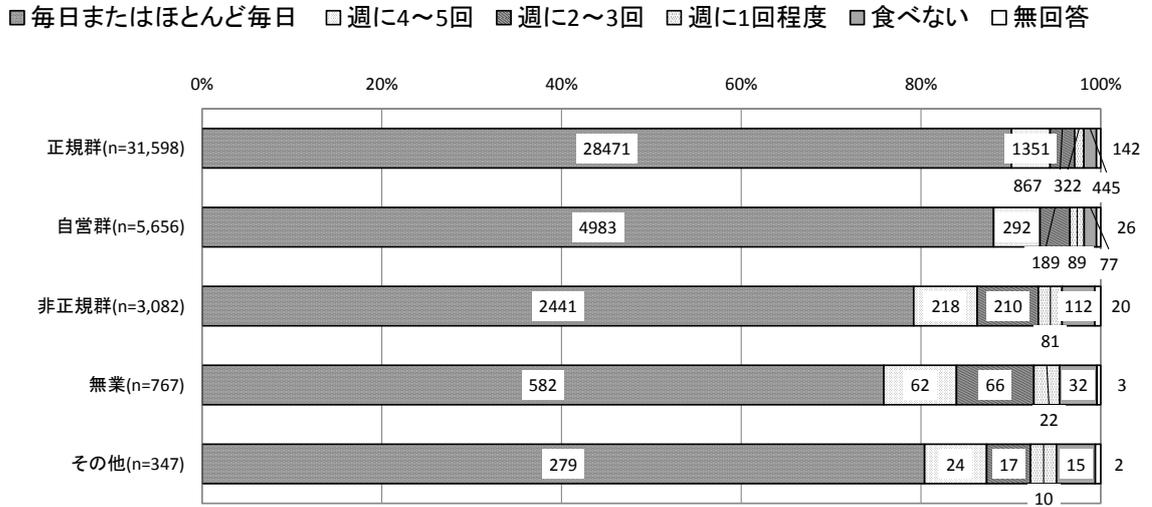


図 困窮度別に見た、朝食の頻度

困窮度別に朝食の頻度を見ると、困窮度が厳しいほど、「毎日またはほとんど毎日」朝食を食べる頻度がやや低くなる傾向が見られました。困窮度Ⅰ群では、10.4%が「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていないと回答しました。

就労状況別に見た、朝食の頻度（子ども票問 5-1）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

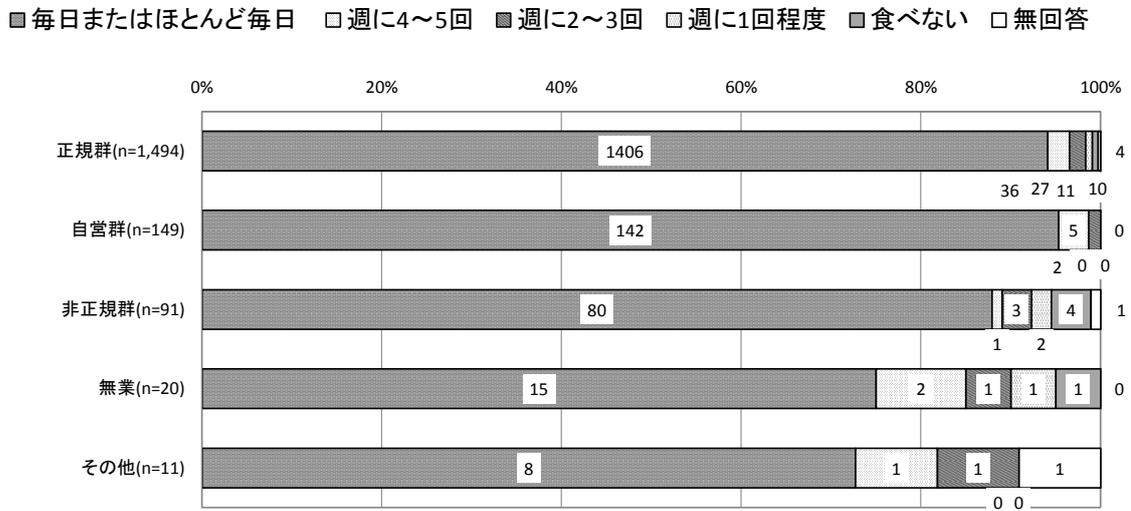


図 就労状況別に見た、朝食の頻度

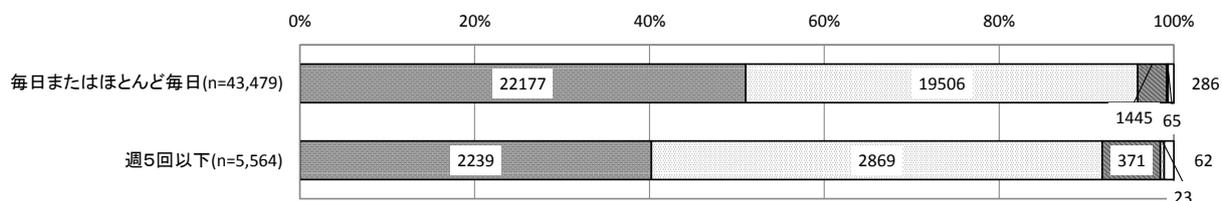
就労状況別に朝食の頻度を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとる割合は、「自営群」が最も高く、次いで、「正規群」、「非正規群」、「無業」の順で低くなりました。

朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの信頼度）

（子ども票 5-1×保護者票問 14-1）

<大阪府内全自治体>

■とても信頼している □信頼している ■あまり信頼していない □信頼していない □無回答



<枚方市>

■とても信頼している □信頼している ■あまり信頼していない □信頼していない □無回答

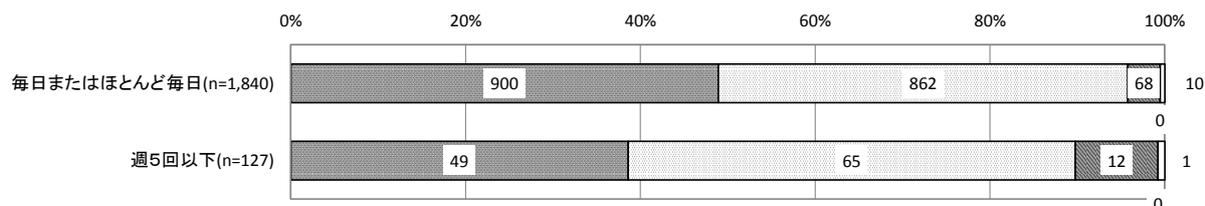
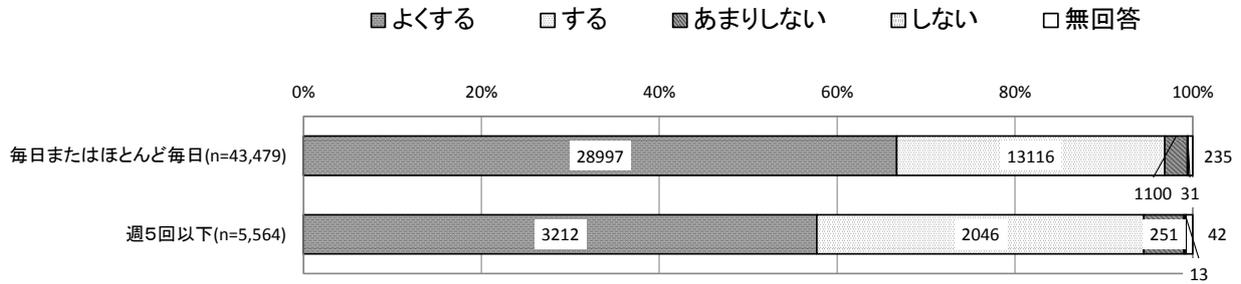


図 朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの信頼度）

朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもへの信頼度）を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていると回答した人では、子どもを「とても信頼している」との回答が 48.9%であるのに対し、「週5回以下」では、「とても信頼している」と回答した人は 38.6%と低い結果となりました。

朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと会話）
 （子ども票 5-1×保護者票問 14-2）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

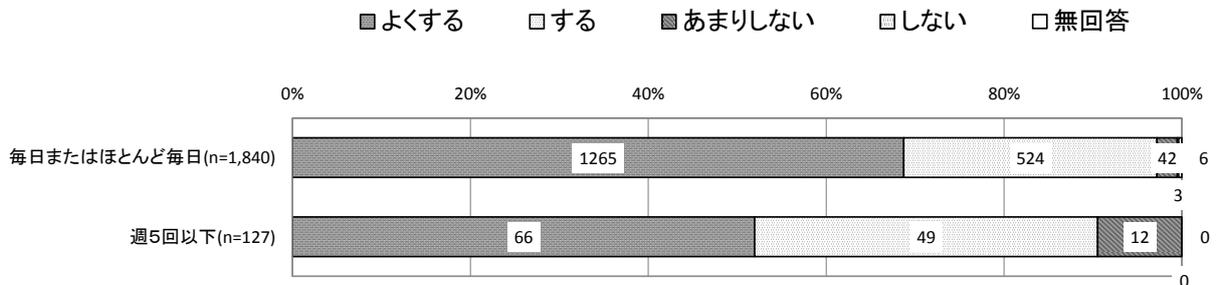
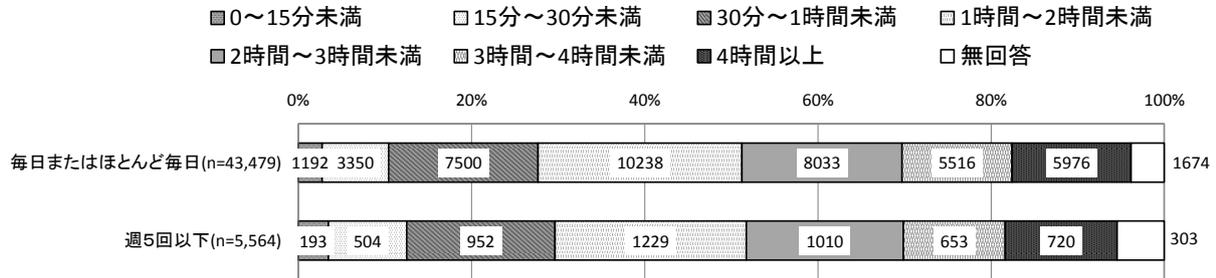


図 朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと会話）

朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもと会話）を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていると回答した人では、子どもと「よく会話をする」との回答が68.8%であり、「週5回以下」では、「よく会話をする」と回答した人は52.0%と、「毎日またはほとんど毎日」の人のほうがよく会話をする割合が高くなっています。

朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（平日））
 （子ども票 5-1×保護者票問 14-3）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

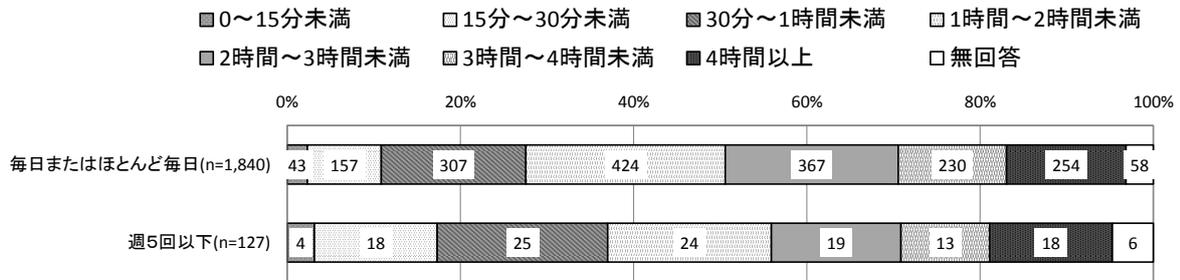


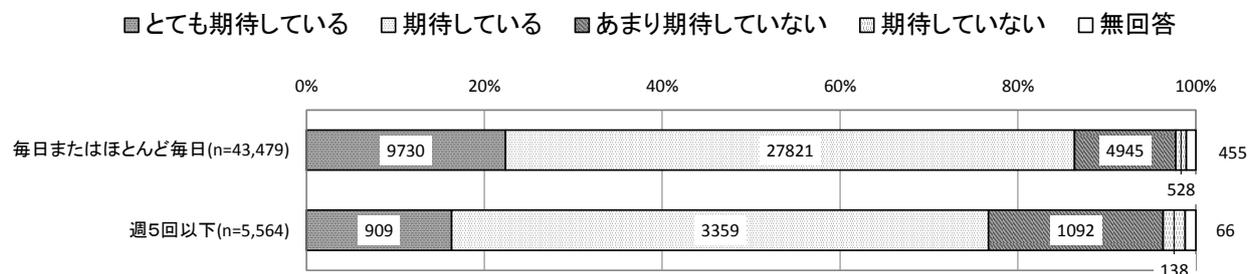
図 朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（平日））

朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（平日））を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっている人では「1時間～2時間未満」と回答した割合が最も高く、「週5回以下」の人では「30分～1時間未満」と回答した割合が最も高い結果となりました。

朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの将来の期待）

（子ども票 5-1×保護者票問 14-4）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

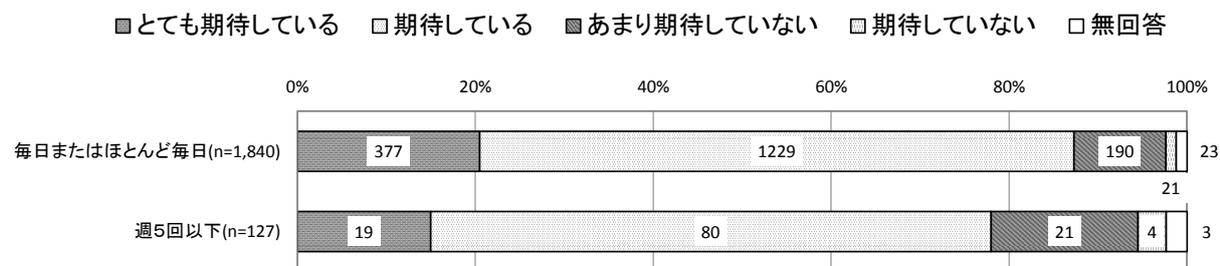


図 朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの将来の期待）

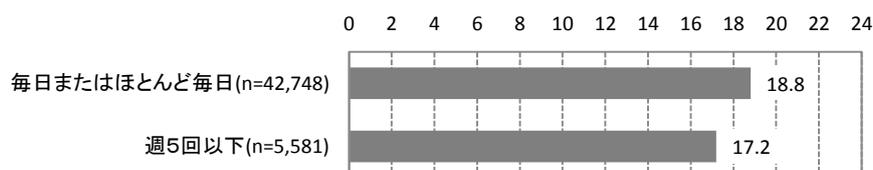
朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもへの将来の期待）を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっている人では、「とても期待している」「期待している」をあわせて、87.3%であるのに対して、「週5回以下」の人では、「とても期待している」「期待している」と回答した人をあわせて78.0%と、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっている人のほうが「週5回以下」の人より、子どもの将来に対する期待が高い結果となりました。

朝食の頻度別に見た、子どもの自己効力感（セルフエフィカシー）

（子ども票 5-1×子ども票問 23）

※「自分に自信がある」「自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」「大人は信用できる」「自分の将来の夢や目標を持っている」「将来のためにも、今、頑張りたいと思う」「将来、働きたいと思う」の6項目について、それぞれ4段階で評価し、その値を合計した得点を、自己効力感（セルフ・エフィカシー）得点としました。得点が高いほど、セルフ・エフィカシーが高いことを表しています。

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

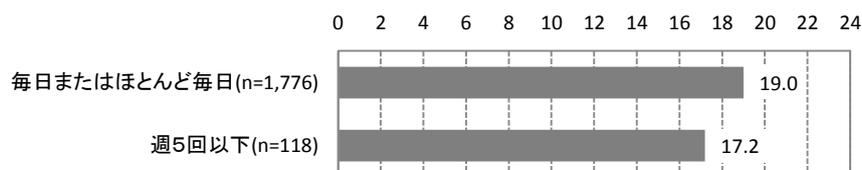


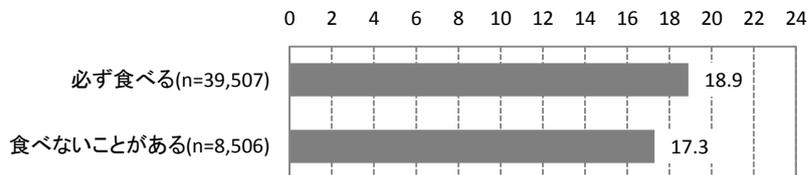
図 朝食の頻度別に見た、子どもの自己効力感（セルフエフィカシー）

朝食の頻度別に子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）の得点を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていると回答した人では、19.0点であるのに対して、「週5回以下」では、17.2点と、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていると回答した人のほうが「週5回以下」の人よりも子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）が高い結果となりました。

昼食の頻度別に見た、子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）

（子ども票 7×子ども票問 23）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

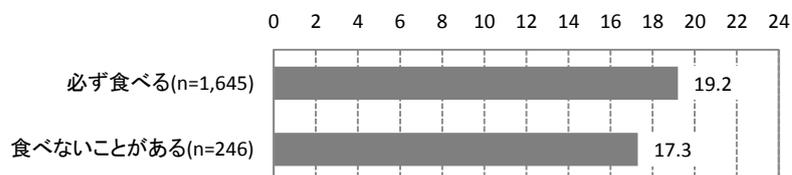


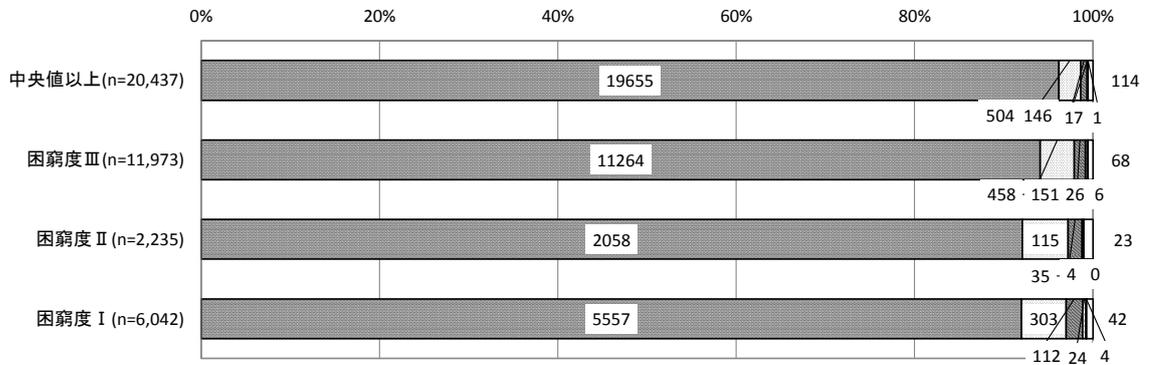
図 昼食の頻度別に見た、子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）

休日の昼食の頻度別に子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）の得点を見ると、「必ず食べる」と回答した人の得点が 19.2 点であるのに対して、「食べないことがある」と回答した人は 17.3 点と、昼食を「必ず食べる」と回答した人のほうが、子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）が高い結果となりました。

困窮度別に見た入浴頻度（子ども票問 8）

<大阪府内全自治体>

■ 毎日またはほとんど毎日 □ 週に4~5回 ■ 週に2~3回 □ 週に1回程度 ■ 入らない □ 無回答



<枚方市>

■ 毎日またはほとんど毎日 □ 週に4~5回 ■ 週に2~3回 □ 週に1回程度 ■ 入らない □ 無回答

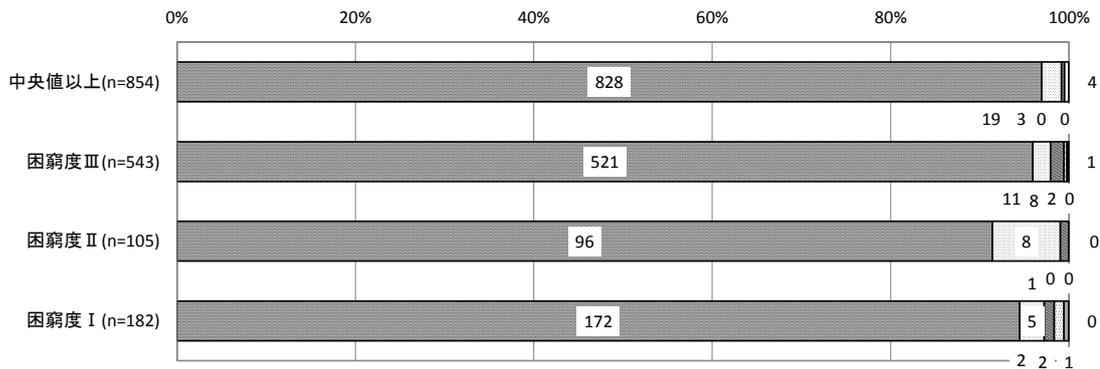
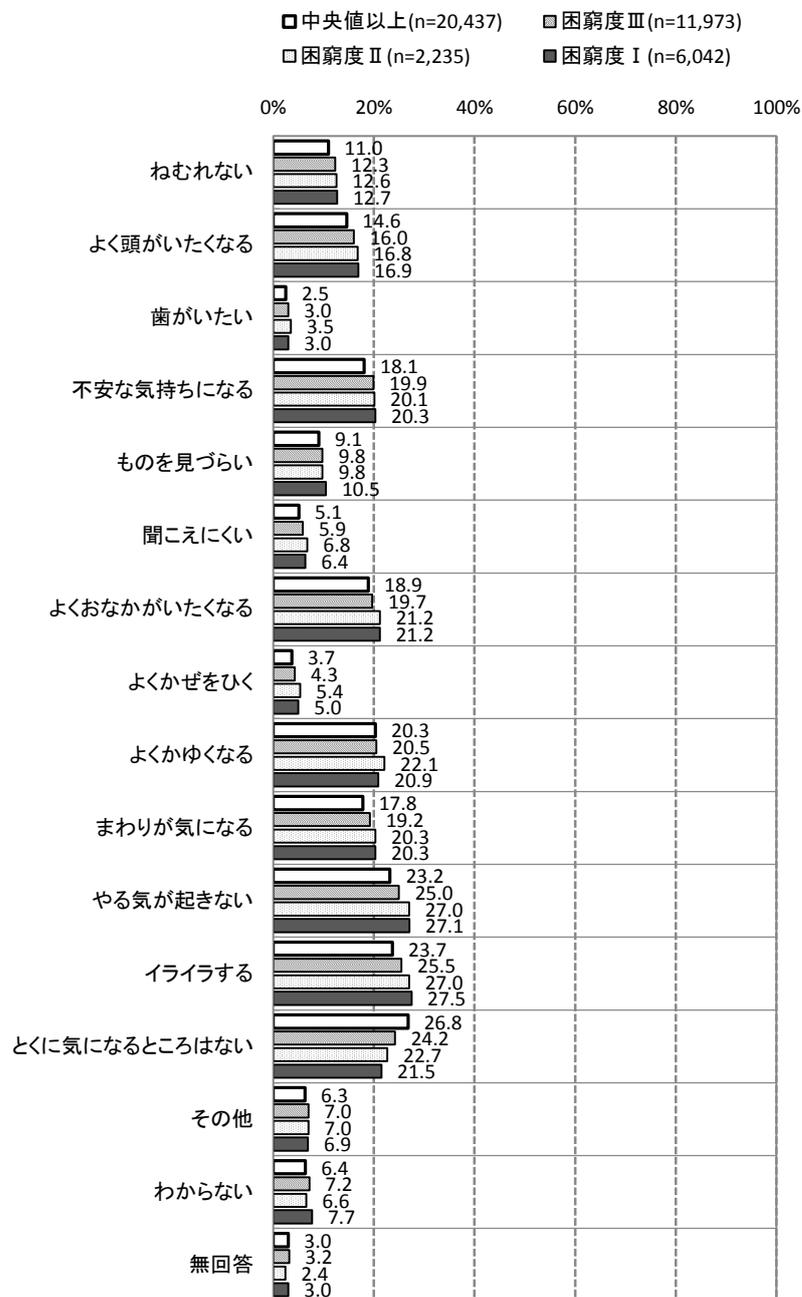


図 困窮度別に見た入浴頻度

困窮度別に入浴頻度を見ると、困窮度が厳しいほど、「毎日またはほとんど毎日」と回答する割合がやや低くなる傾向にあります。

困窮度別に見た、子どもが自分の体や気持ちで気になること（子ども票問 21）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

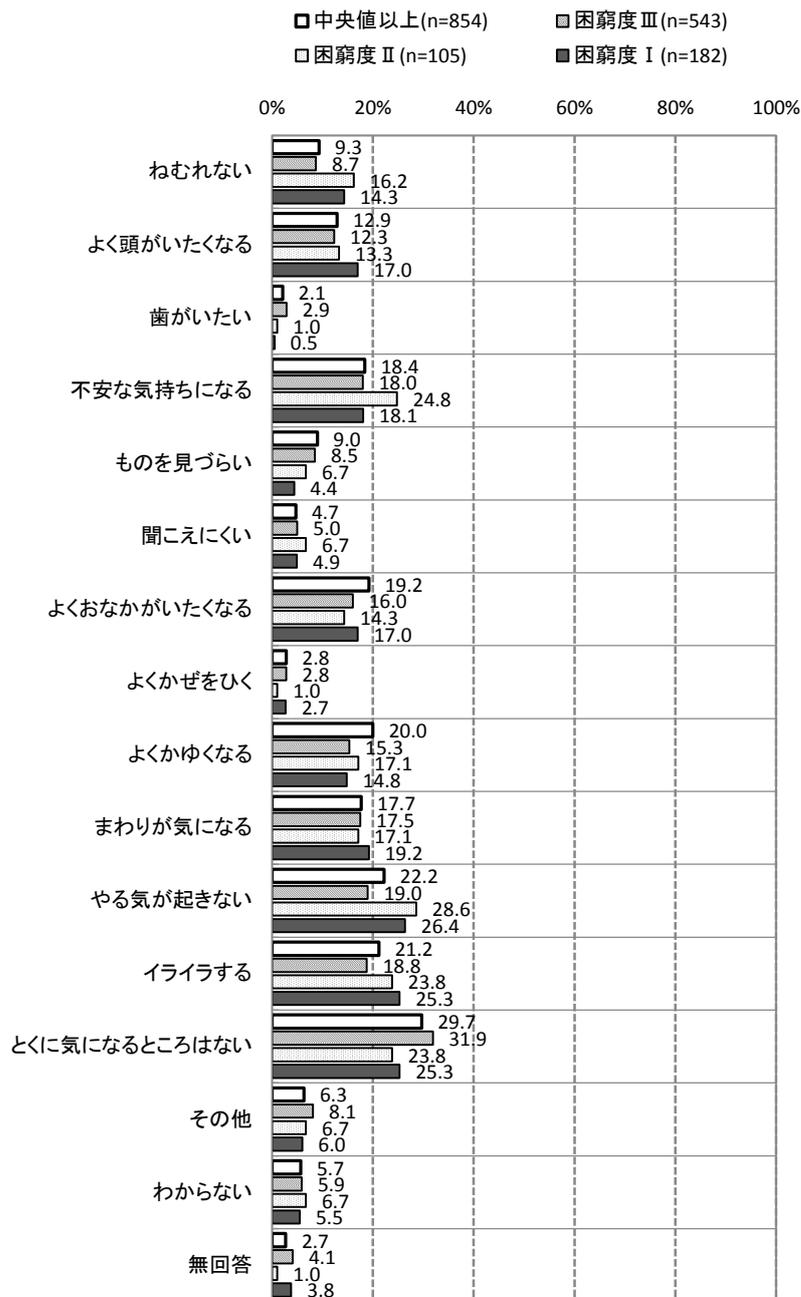


図 困窮度別に見た、子どもが自分の体や気持ちで気になること

困窮度別に子どもが自分の体や気持ちで気になることについて、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で差が大きい項目に着目しながら、困窮度Ⅰ群の数値を挙げると、「ねむれない」14.3%（中央値以上群に対して、1.5倍）など、困窮度Ⅰ群において高い項目が複数みられました。「イライラする」、「やる気が起きない」、「まわりが気になる」など心理的・精神的症状を示す項目での割合の高さも無視できない状況です。

<枚方市>

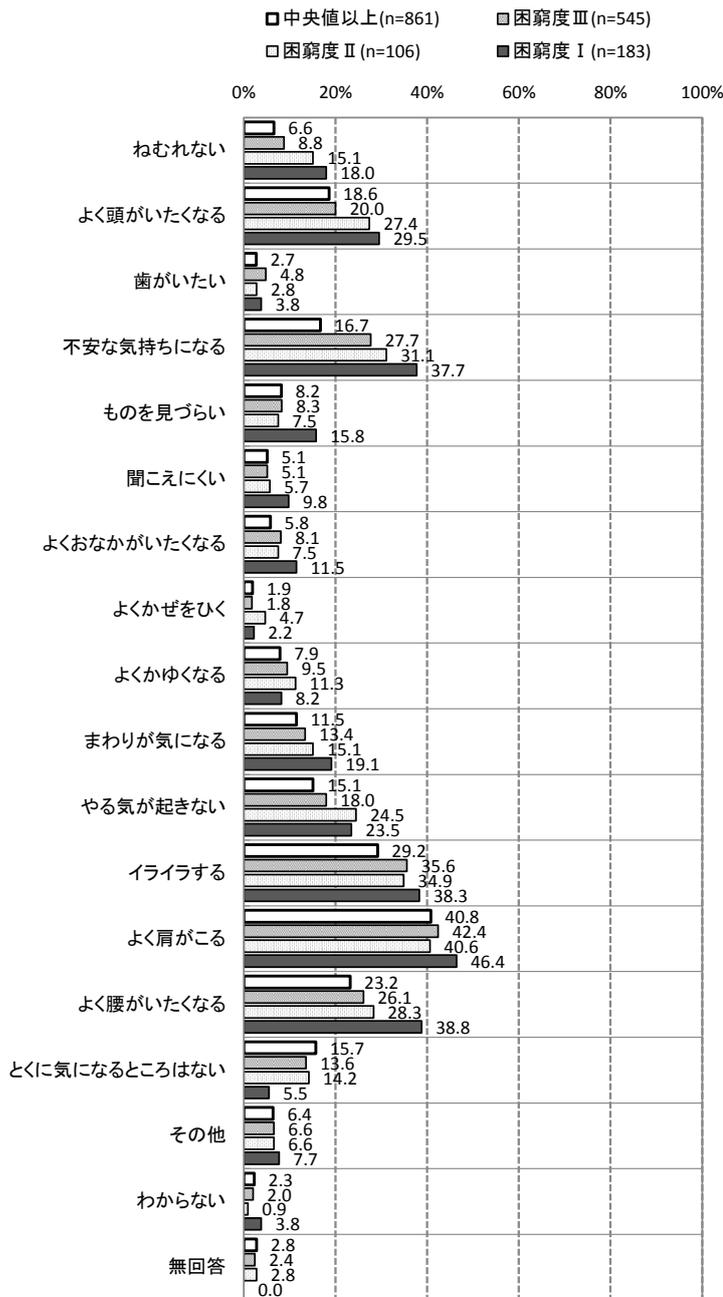
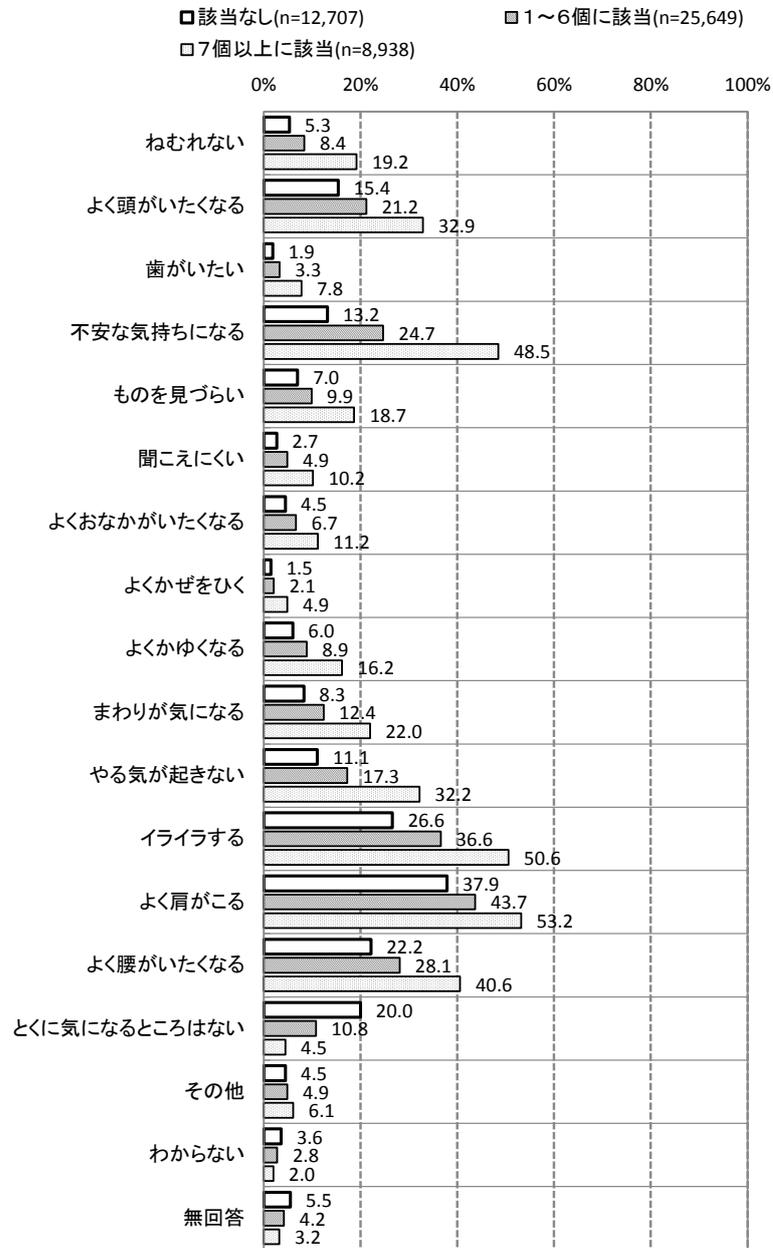


図 困窮度別に見た、保護者が自分の体や気持ちで気になること

困窮度別に自分の体や気持ちで気になること（保護者）を見ると、多くの項目において、困窮度が厳しいほど、自分の体や気持ちで気になることのそれぞれの項目が高くなっています。特に、困窮度Ⅰ群に着目して、中央値以上群との差が大きい順に挙げると、「ねむれない」18.0%（中央値以上群に対し2.7倍）、「不安な気持ちになる」37.7%（2.3倍）、「よくおなかがいたくなる」11.5%（2.0倍）、「聞こえにくい」9.8%（1.9倍）、「ものを見づらい」15.8%（1.9倍）となっています。また、「不安な気持ちになる」に加え「まわりが気になる」19.1%（1.7倍）、「やる気が起きない」23.5%（1.6倍）など、心理的・精神的状況への影響もみられました。

経済的な理由による経験該当数別に見た、保護者が自分の体や気持ちで気になること
 (保護者票問 7 × 保護者票問 23)

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

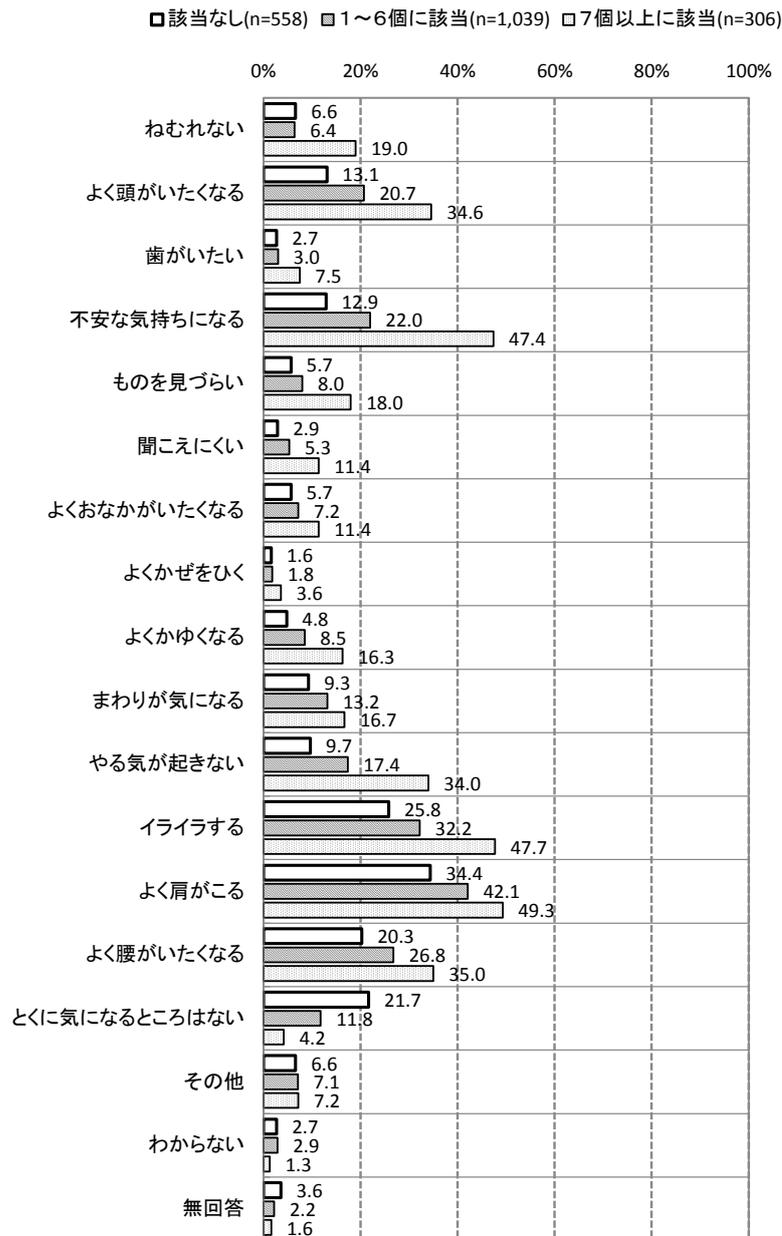
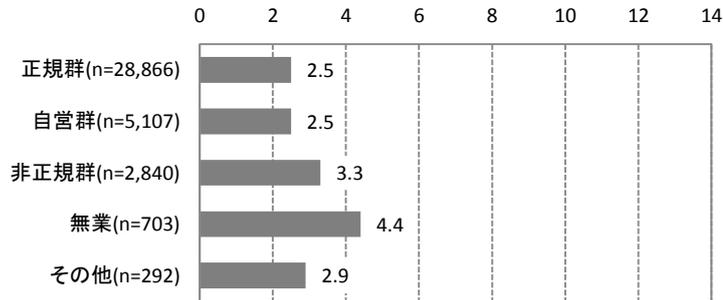


図 経済的な理由による経験該当数別に見た、保護者が自分の体や気持ちで気になること

経済的な理由による経験（保護者）の該当数別に、自分の体や気持ちで気になることを見ると、すべての項目において、経済的な理由による経験の該当数が多くなるにつれて、自分の体や気持ちで気になることのそれぞれの項目が高くなっています。特に、「7個以上に該当」した人と「該当なし」と回答した人との差が大きく開いています。「7個以上に該当」群について、「該当なし」との差が大きい順に挙げると、「聞こえにくい」11.4%（「該当なし」に対して4.0倍）、「不安な気持ちになる」47.4%（3.7倍）、「やる気が起きない」34.0%（3.5倍）、「よくかゆくなる」16.3%（3.4倍）、「ものを見づらい」18.0%（3.1倍）となっています。特に、「不安な気持ちになる」や「やる気がおきない」に加えて、「まわりが気になる」16.7%（1.8倍）、「イライラする」47.7%（1.8倍）といった心理的・精神的症状も見過ごせません。

就労状況別に見た、保護者が自分の体や気持ちで気になることの該当数（保護者票問 23）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

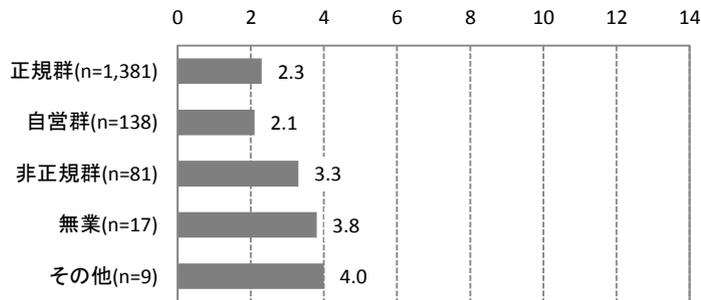


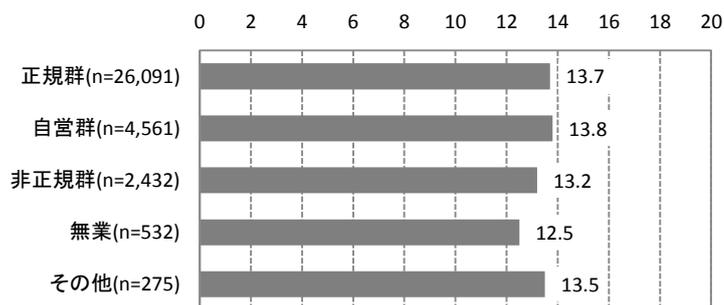
図 就労状況別に見た、保護者が自分の体や気持ちで気になることの該当数

就労状況別に、保護者が自分の体や気持ちで気になることの該当数を見ると、「正規群」、「自営群」に対して、「非正規群」、「無業」、「その他」群において、自分の体や気持ちで気になることの該当数が多い結果となりました。

就労状況別に見た、保護者のセルフ・エフィカシー（保護者票問 26）

※「自分が建てた目標や計画はうまくできる自信がある」、「はじめはうまくいかない事でも、できるまでやり続ける」、「人の集まりの中では、うまくふるまえない」、「私は自分から友達を作るのがうまい」、「人生で起きる問題の多くは自分では解決できない」の5項目について、「そう思う」～「思わない」までの4段階で評価し、5項目の合計得点を大人の自己効力感（セルフ・エフィカシー）得点としました。得点が高いほど、セルフ・エフィカシーが高いことを表します。

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

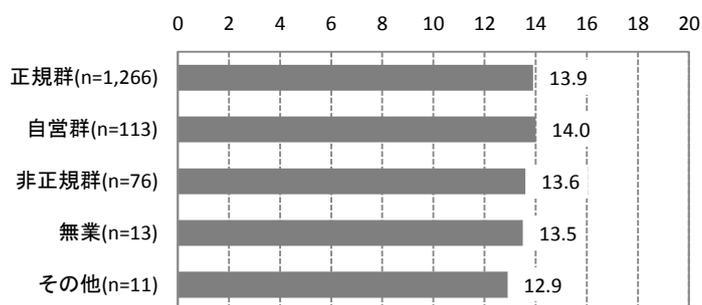


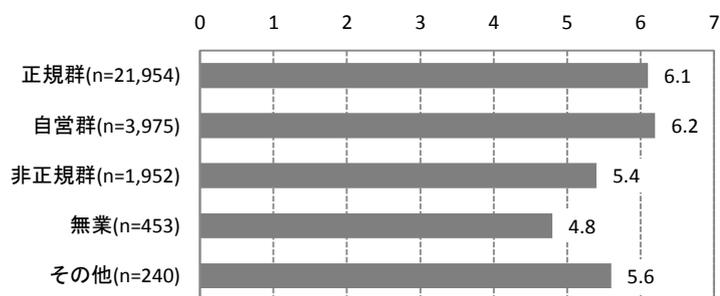
図 就労状況別に見た、保護者のセルフ・エフィカシー

就労状況別に保護者のセルフ・エフィカシーを見ると、「正規群」、「自営群」に対して、「非正規群」、「無業」、「その他」群がやや低い結果となりました。

就労状況別に見た、支えてくれる人得点（保護者票問 20）

※「あなたを支え、手伝ってくれる人はいますか」という質問について、「心配ごとや悩みごとを親身になって聞いてくれる人」「あなたの気持ちを察して思いやってくれる人」「趣味や興味のあることを一緒に話して、気分転換させてくれる人」「子どもとの関わりについて、適切な助言をしてくれる人」「子どもの学びや遊びを豊かにする情報を教えてくれる人（運動や文化活動）」「子どもの体調が悪いとき、医療機関に連れて行ってくれる人」「留守を頼める人」の7項目を提示しました。それぞれの人物が「いる」か「いない」かで評定したうえで、「いない」を0点、「いる」を1点とし、7項目の合計得点を「支えてくれる人得点」としました。得点が高いほど、身近に支えてくれる人が多く存在することを表します。

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

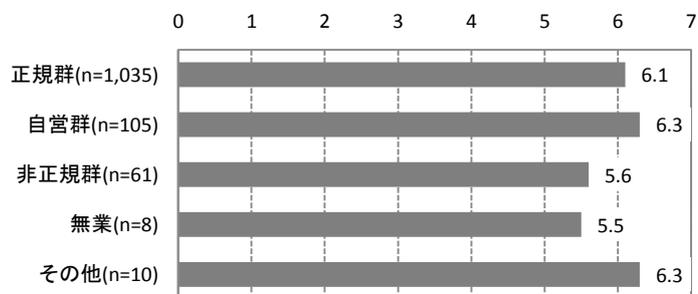


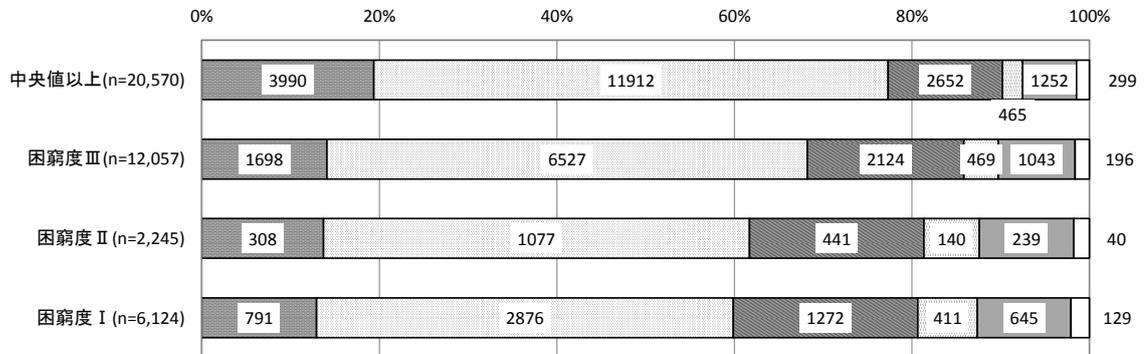
図 就労状況別に見た、支えてくれる人得点

就労状況別に「支えてくれる人」の有無を得点化し、その平均値を見ると、「正規群」(6.1)、「自営群」(6.3)が高く、「非正規群」で、5.6とわずかに低下し、「無業」で5.5ともっとも低い結果となりました。

困窮度別に見た、心の状態（生活を楽しんでいるか）（保護者票問 22-1）

<大阪府内全自治体>

■とても楽しんでいる □楽しんでいる ■あまり楽しんでいない □楽しんでいない ■わからない □無回答



<枚方市>

■とても楽しんでいる □楽しんでいる ■あまり楽しんでいない □楽しんでいない ■わからない □無回答

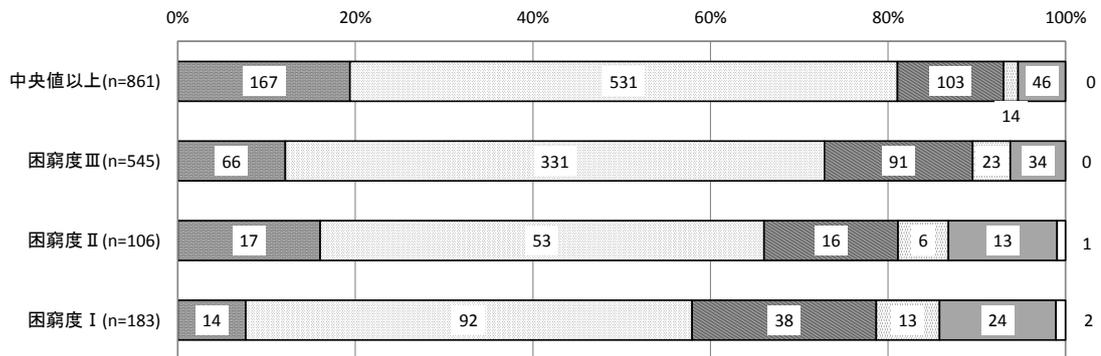
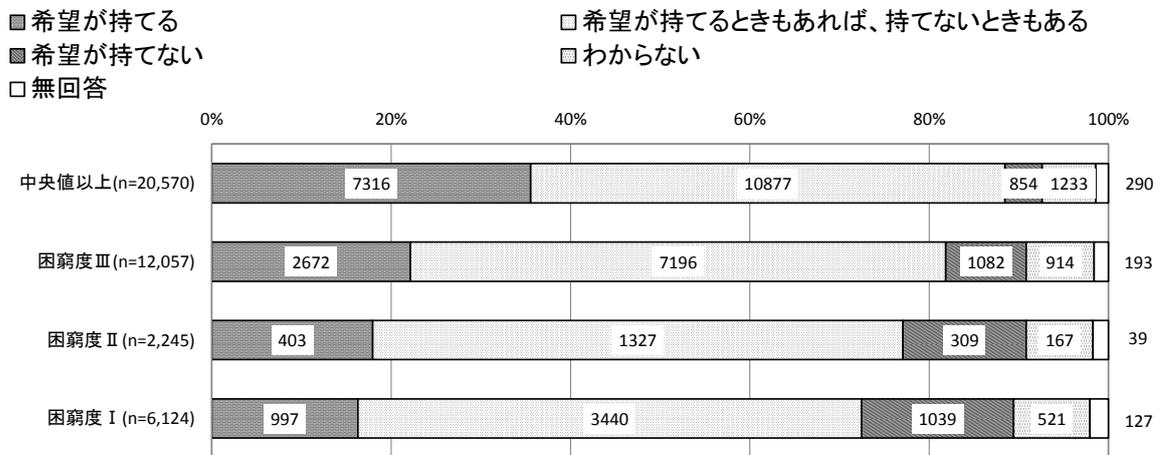


図 困窮度別に見た、心の状態（生活を楽しんでいるか）

困窮度別に生活を楽しんでいるかを見ると、「とても楽しんでいる」「楽しんでいる」をあわせた割合では、中央値以上群で81.1%ともっとも高く、それ以外の群では低くなりました。困窮度Ⅲ群で72.8%、困窮度Ⅱ群で66.0%、困窮度Ⅰ群が57.9%ともっとも低くなりました。逆に、「楽しんでいない」と回答した割合は、困窮度が厳しいほど、多くなっています。中央値以上群が1.6%ともっとも低く、次いで、困窮度Ⅲ群で4.2%、困窮度Ⅱ群で5.7%、困窮度Ⅰ群で7.1%となりました。

困窮度別に見た、心の状態（将来への希望）（保護者票問 22-2）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

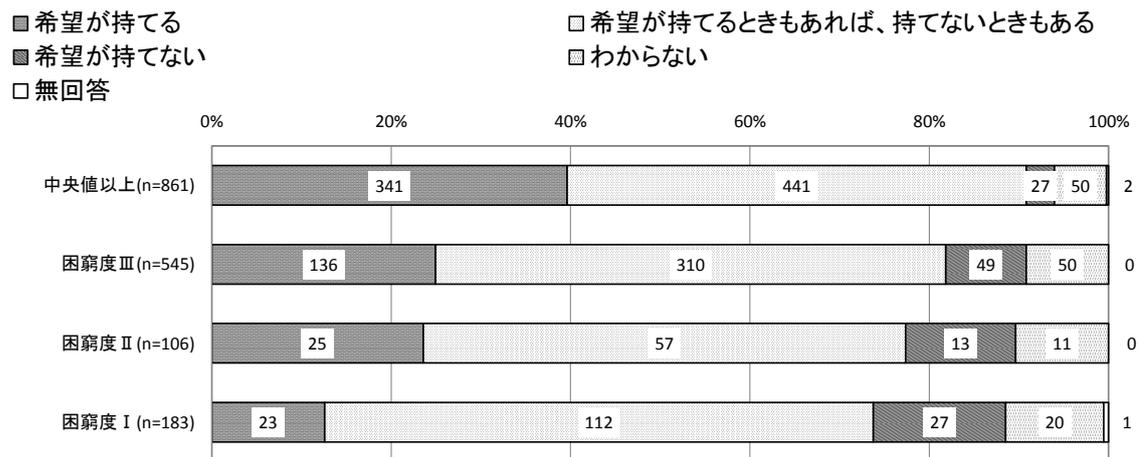
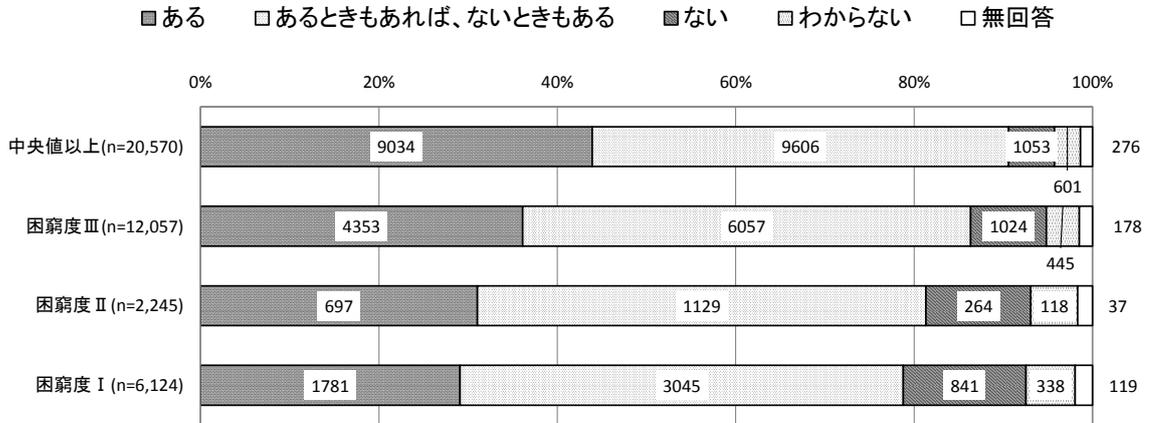


図 困窮度別に見た、心の状態（将来への希望）

困窮度別に将来への希望を見ると、困窮度が厳しいほど、「希望が持てる」と回答する割合が低くなっています。中央値以上群では、39.6%であるのに対し、困窮度Ⅲ群では、25.0%、困窮度Ⅱ群では23.6%、困窮度Ⅰ群では、12.6%という結果となりました。

困窮度別に見た、心の状態（ストレス発散できるもの）（保護者票問 22-3）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

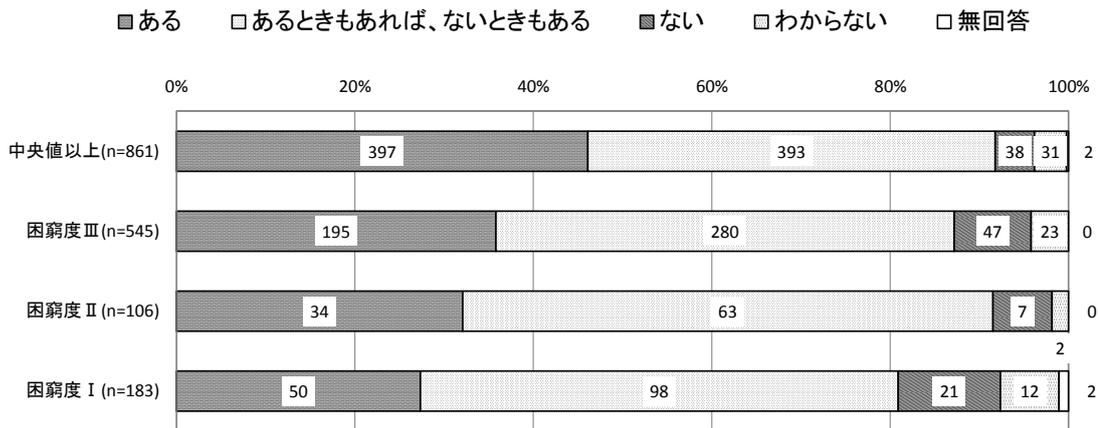
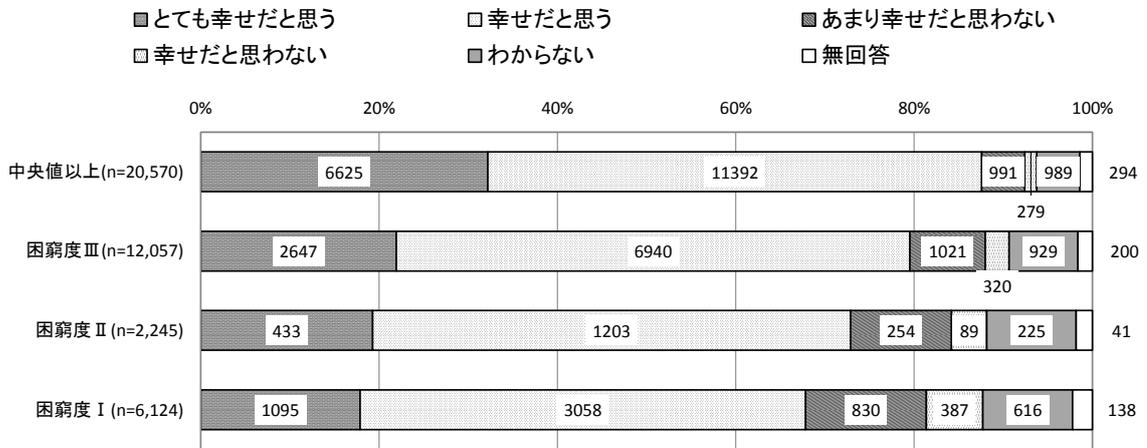


図 困窮度別に見た、心の状態（ストレス発散できるもの）

困窮度別にストレスを発散できるものについて、ストレスが発散できるものが「ない」という回答に着目すると、中央値以上群では4.4%でもっとも低く、次いで、困窮度Ⅱ群6.6%、困窮度Ⅲ群8.6%、困窮度Ⅰ群11.5%となっています。

困窮度別に見た、心の状態（幸せだと思うか）（保護者票問 22-4）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

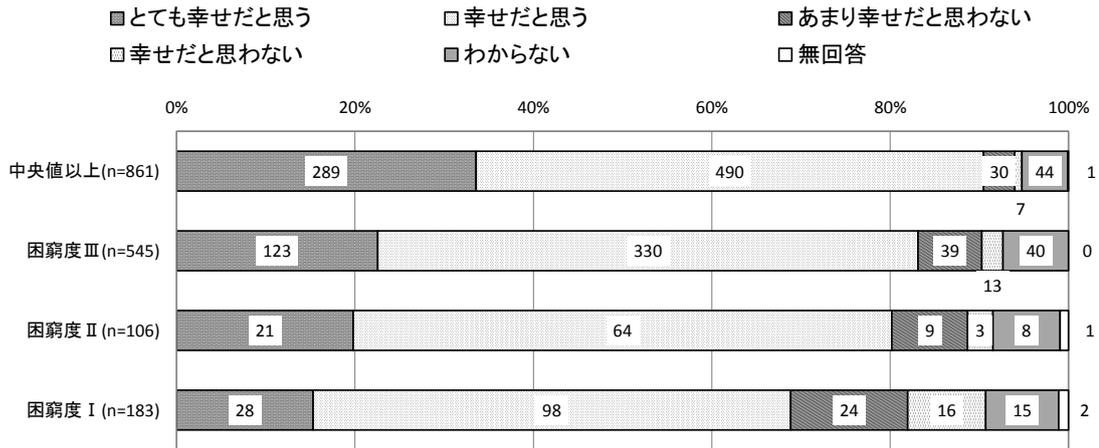
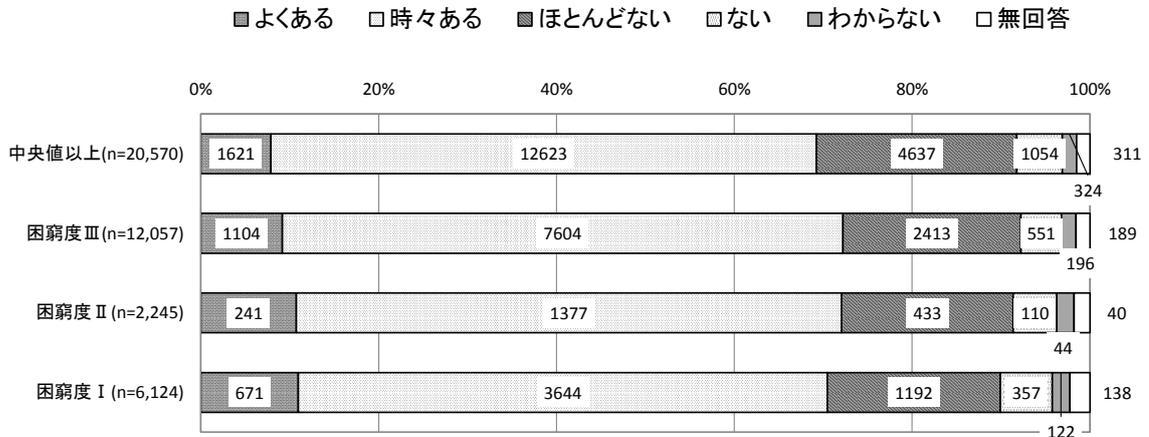


図 困窮度別に見た、心の状態（幸せだと思うか）

困窮度別に幸せだと思うかを見ると、「とても幸せと思う」「幸せだと思う」あわせた割合は、困窮度が厳しいほど、低くなっています。逆に、「あまり幸せだと思わない」「幸せだと思わない」をあわせた割合が高くなり、中央値以上群で 4.3%にとどまるのに対して、困窮度Ⅲ群で 9.5%、困窮度Ⅱ群で 11.3%、困窮度Ⅰ群で 21.9%となっています。

困窮度別に見た、不安やイライラなどの感情を子どもに向けてしまうこと（保護者票問 24）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

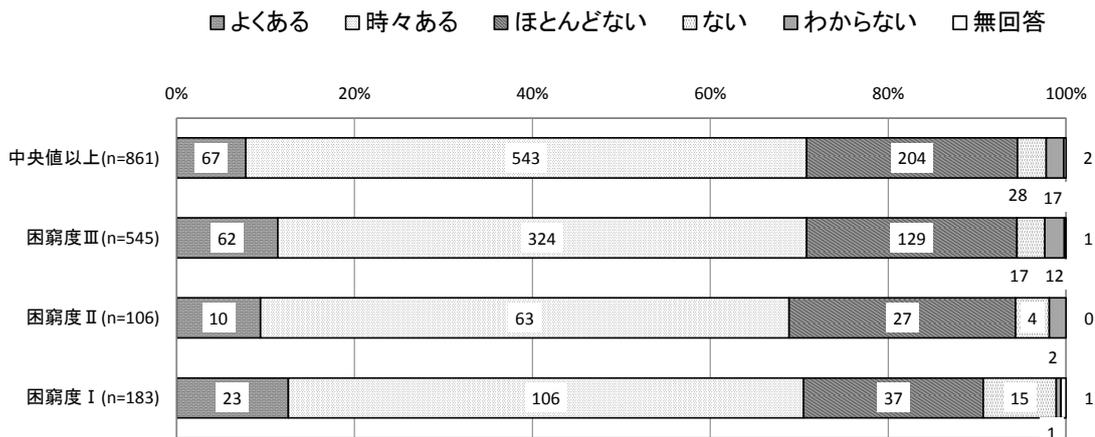
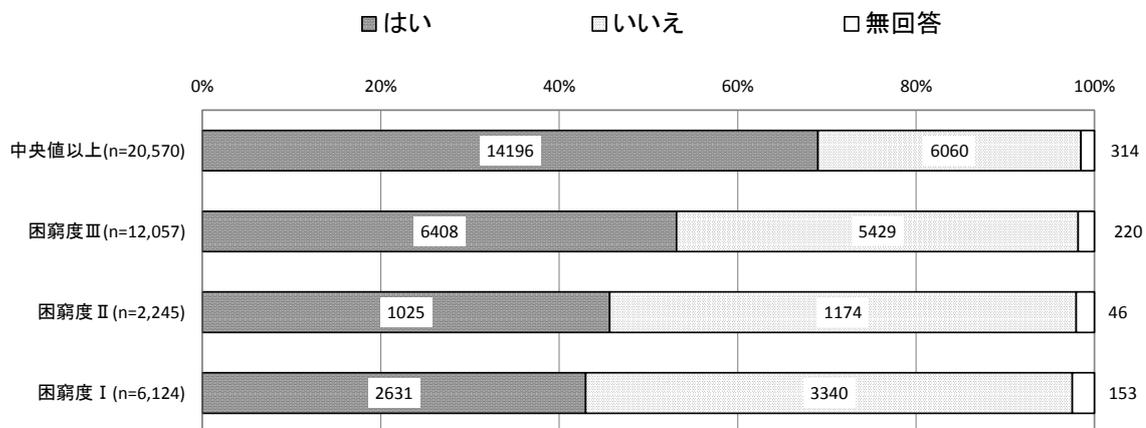


図 困窮度別に見た、不安やイライラなどの感情を子どもに向けてしまうこと

困窮度別に不安やイライラなどの感情を子どもに向けてしまうことを見ると、困窮度による大きな差は見られないものの、中央値以上群では、「よくある」の割合が 7.8%であるのに対し、困窮度Ⅰ群では 12.6%と困窮度Ⅰ群のほうが高くなりました。

困窮度別に見た、定期的な健康診断の受診（保護者票問 25）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

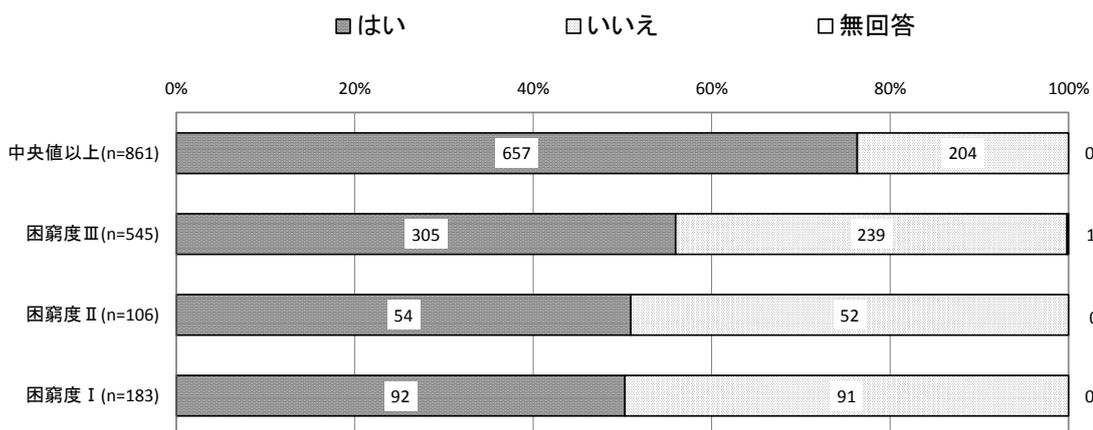


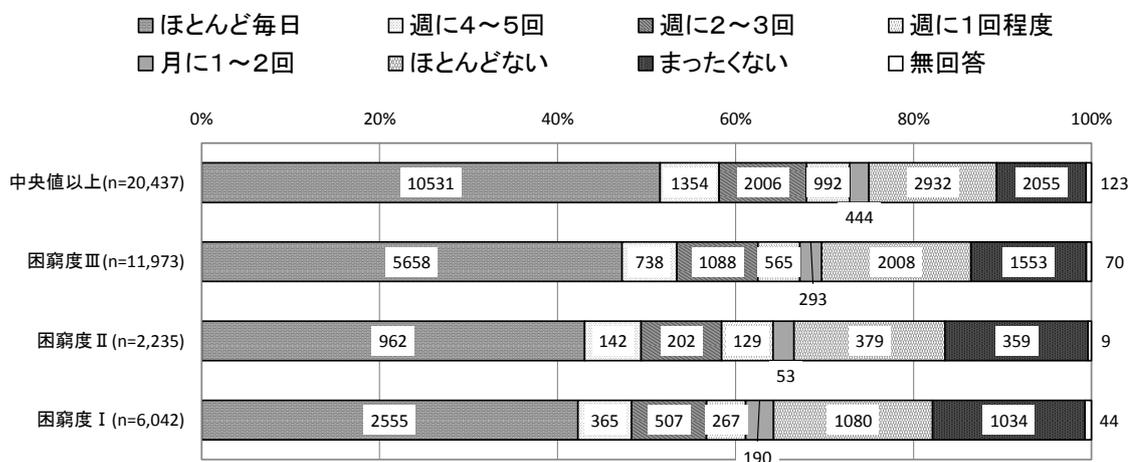
図 困窮度別に見た、定期的な健康診断の受診

困窮度別に保護者の定期的な健康診断の受診を見ると、受診している割合は中央値以上群がもっとも高く、それ以外では低くなっています。

3-4. 家庭生活、学習

困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と朝食を食べるか）（子ども票問 10-1）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

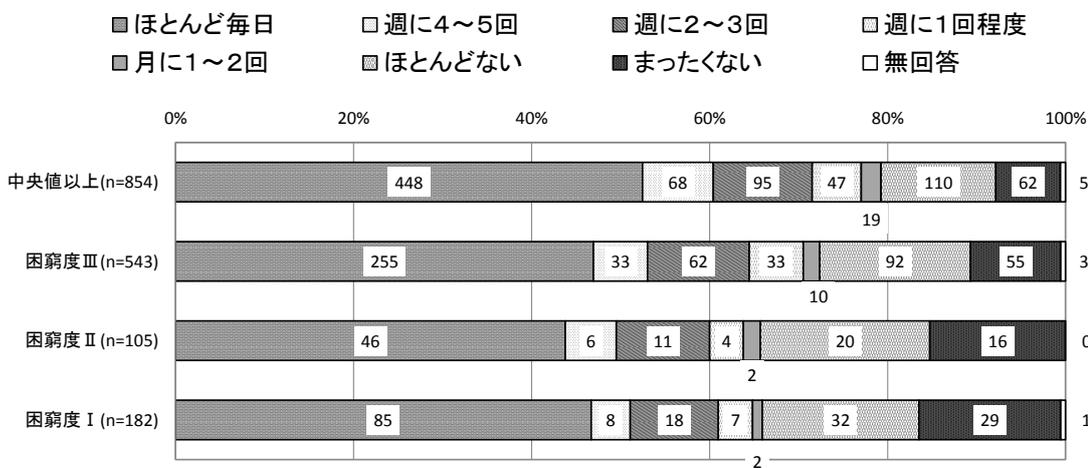
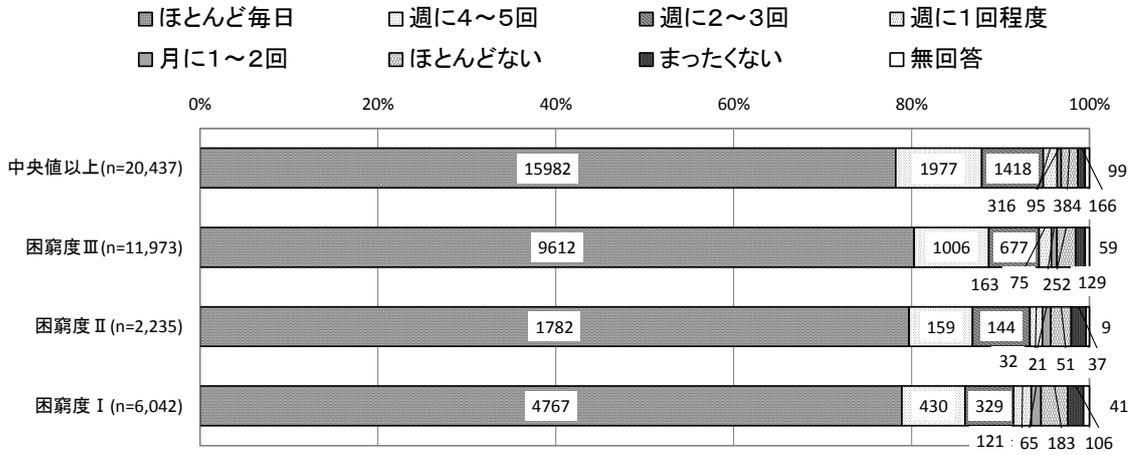


図 困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と朝食を食べるか）

困窮度別に保護者と子どもの関わり（おうちの大人と朝食を食べるか）を見ると、困窮度が厳しいほど、「まったくない」と回答した人の割合が高くなっています。困窮度Ⅰ群では、「まったくない」が15.9%、「ほとんどない」が17.6%となりました。

困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と夕食を食べるか）（子ども票問 10-2）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

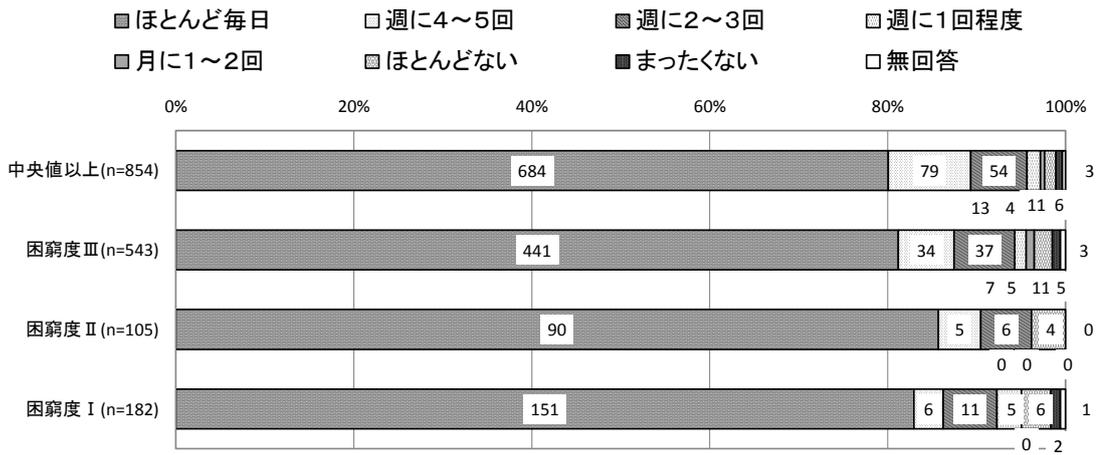
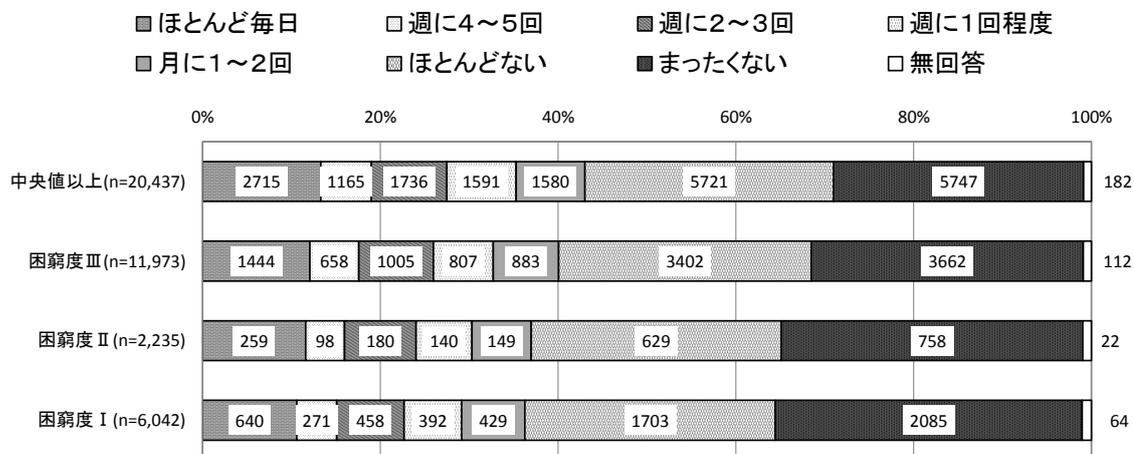


図 困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と夕食を食べるか）

困窮度別に保護者と子どもの関わり（おうちの大人と夕食を食べるか）を見ると、困窮度Ⅱ群において、「ほとんど毎日」の割合が85.7%と高くなっています。

困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人に宿題をみてもらうか）
（子ども票問 10-5）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

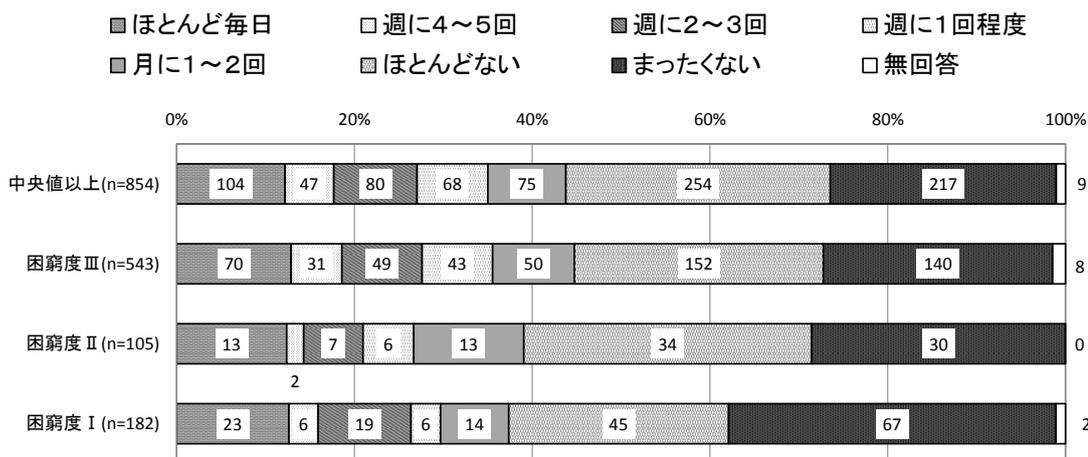
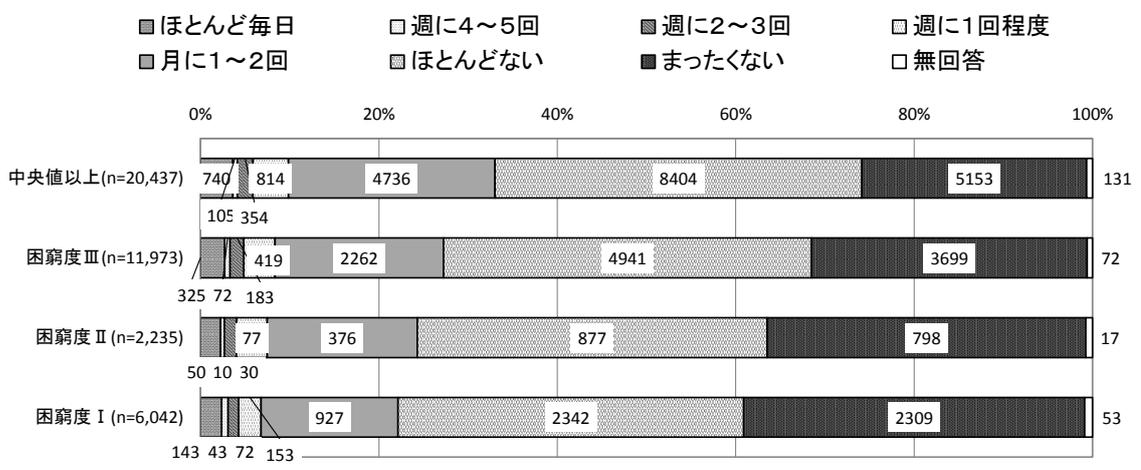


図 困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人に宿題をみてもらうか）

困窮度別に保護者と子どもの関わり（おうちの大人に宿題をみてもらうか）を見ると、困窮度が厳しいほど、「まったくない」と回答した人の割合が高くなっています。困窮度Ⅰ群では、「まったくない」と回答した人は36.8%でした。

困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と文化活動をするか）（子ども票問 10-9）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

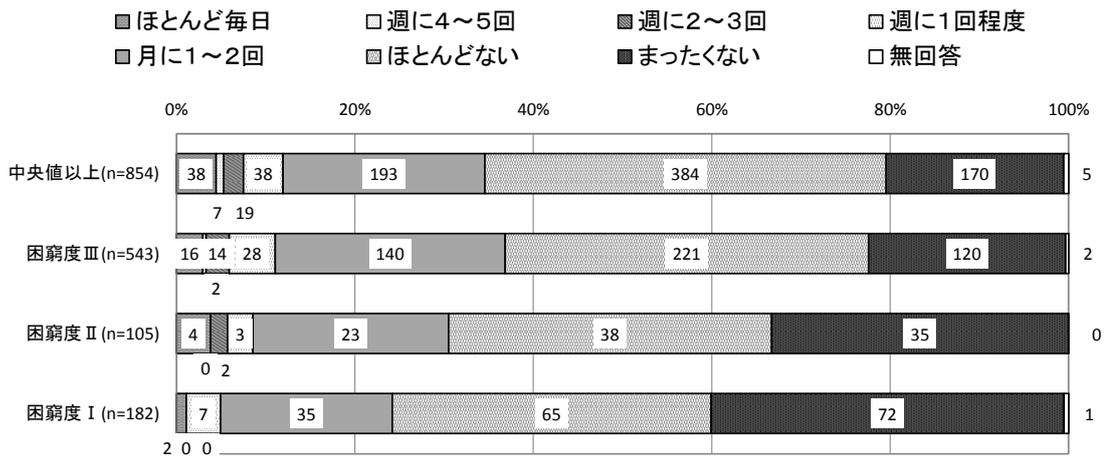
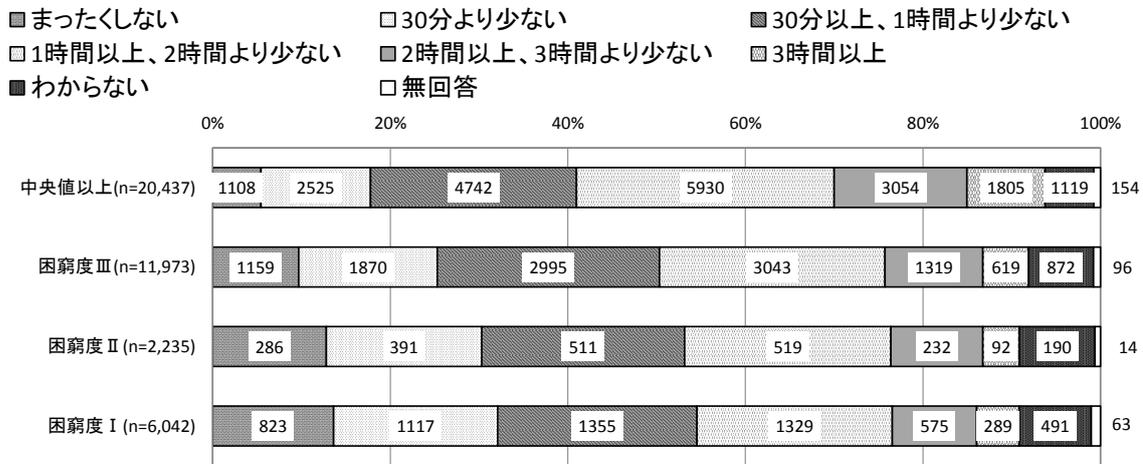


図 困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と文化活動をするか）

困窮度別に保護者と子どもの関わり（おうちの大人と文化活動をするか）を見ると、困窮度が厳しいほど、「ほとんどない」・「まったくない」と回答した人の割合が高くなっています。困窮度Ⅰ群では、「ほとんどない」と回答した人は35.7%、「まったくない」と回答した人は39.6%でした。

困窮度別に見た、授業以外の勉強時間（子ども票問 14）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

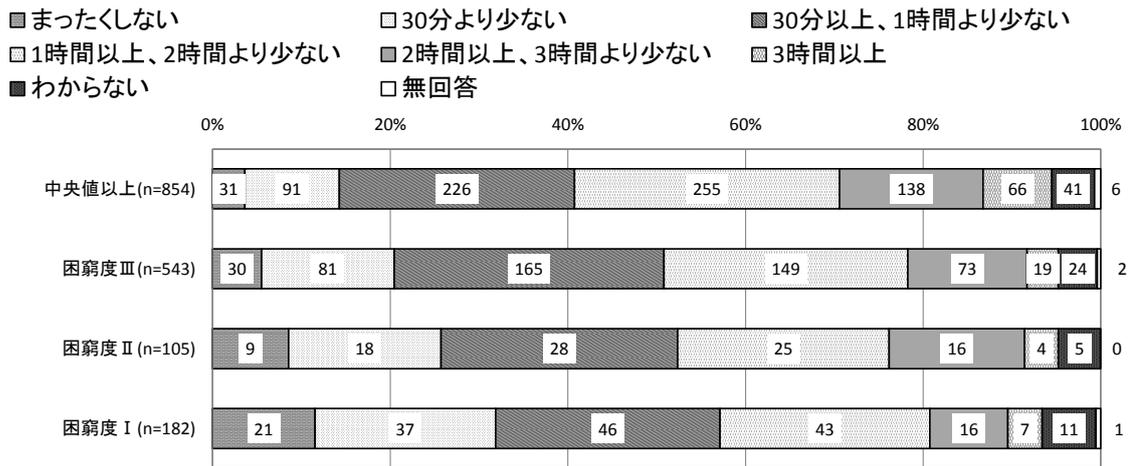
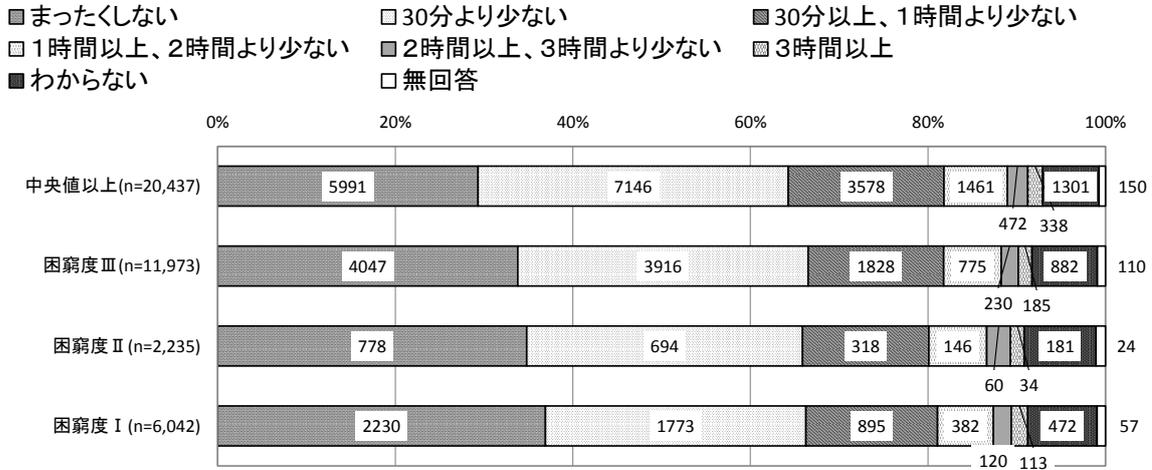


図 困窮度別に見た、授業以外の勉強時間

困窮度別の授業以外の勉強時間を見ると、困窮度が厳しいほど、「まったくしない」・「30分より少ない」と回答した人の割合が高くなっています。困窮度Ⅰ群では、「まったくしない」と回答した人は11.5%でした。

困窮度別に見た、授業以外の読書時間（子ども票問 16）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

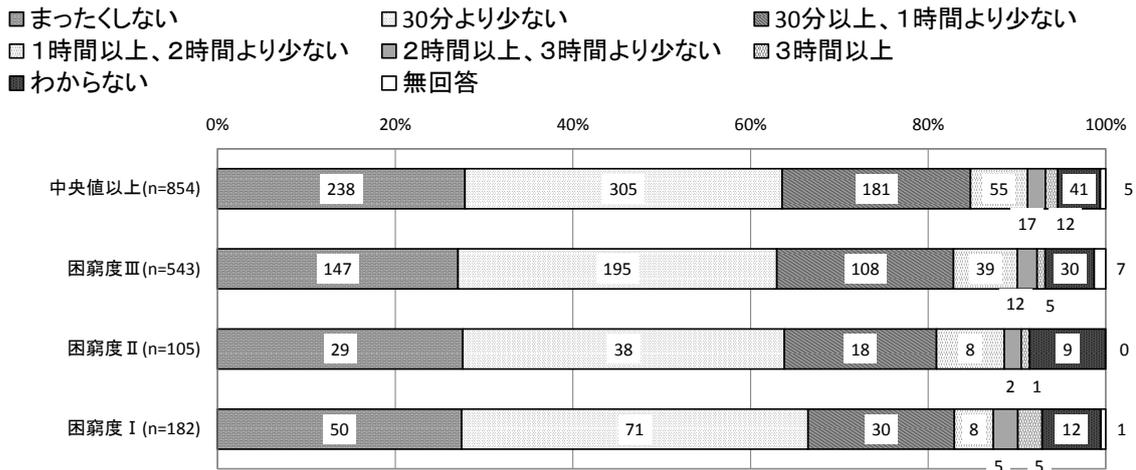
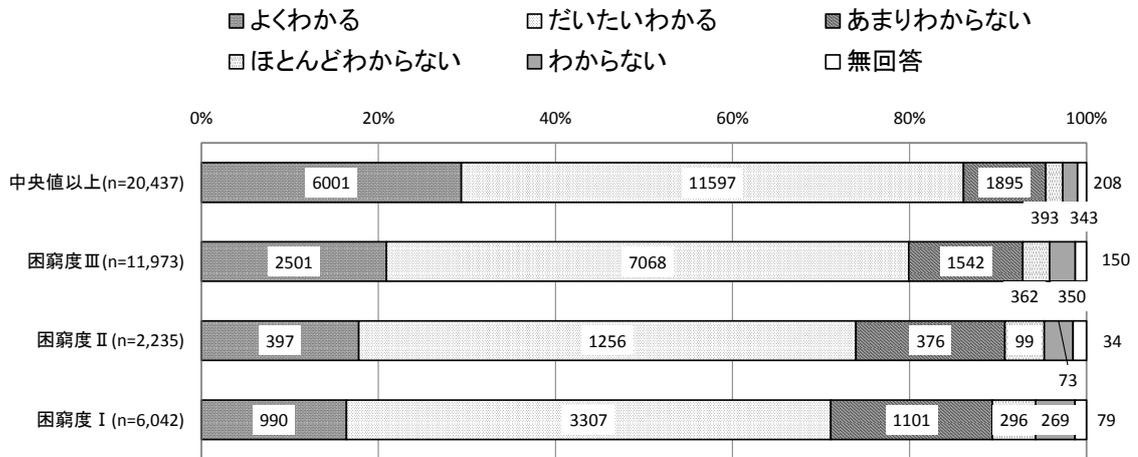


図 困窮度別に見た、授業以外の読書時間

困窮度別の授業以外の読書時間を見ると、困窮度により、「まったくしない」と回答した人の割合には大きな差はありませんが、困窮度が厳しいほど、「30分以上、1時間より少ない」と回答した人の割合がやや低くなっています。

困窮度別に見た、学習理解度（子ども票問 15）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

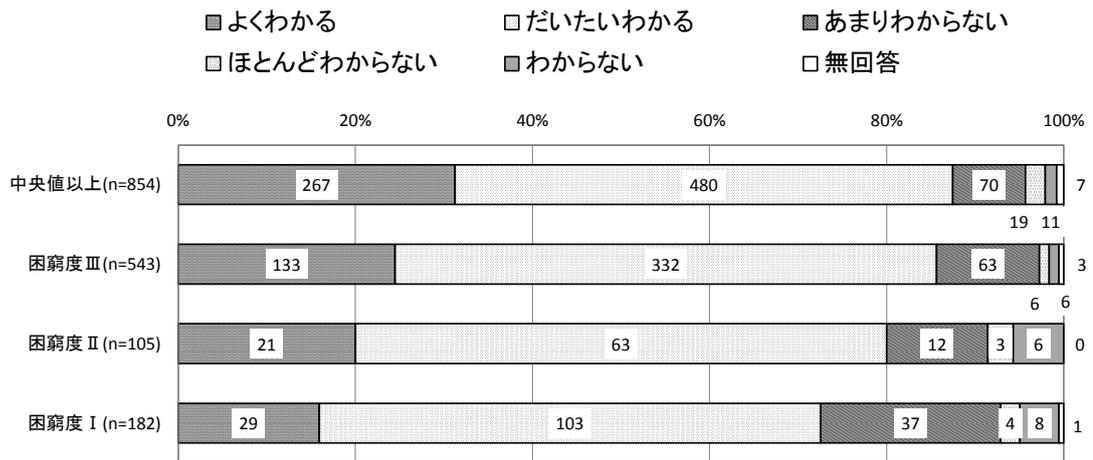
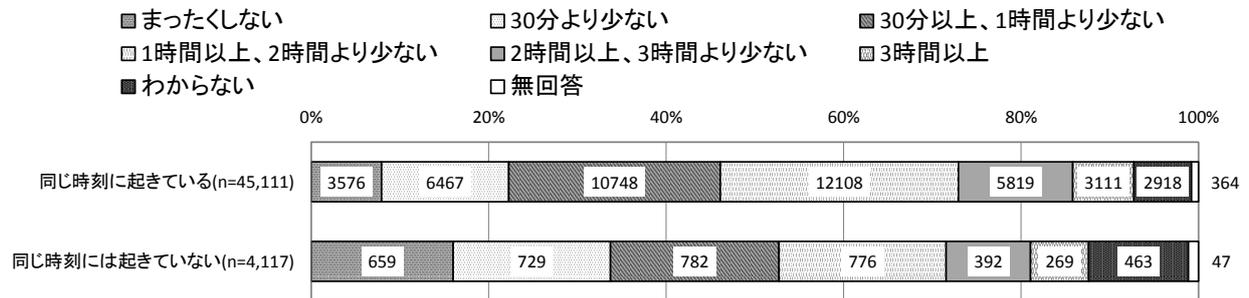


図 困窮度別に見た、学習理解度

困窮度別の学習理解度を見ると、困窮度が厳しいほど、「あまりわからない」と回答した人の割合が高くなっています。困窮度Ⅰ群では、「あまりわからない」と回答した人は 20.3%でした。また、「よくわかる」と回答した人は中央値以上群で最も高く、31.3%でした。

起床時間の規則性別に見た、授業以外の勉強時間（子ども票問2×子ども票問14）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

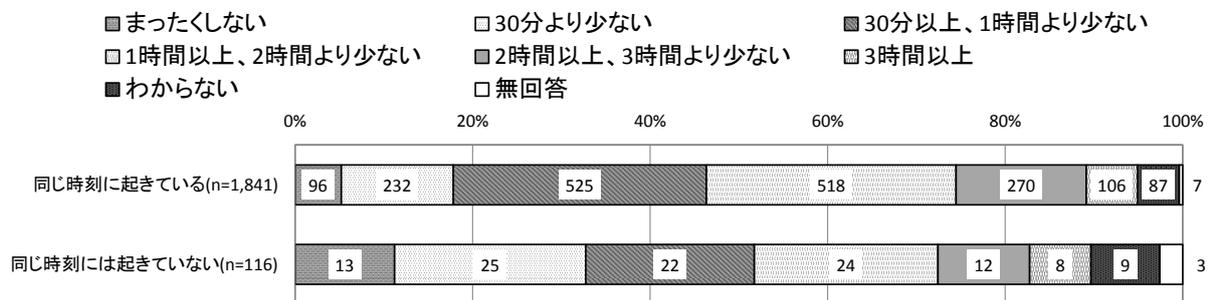


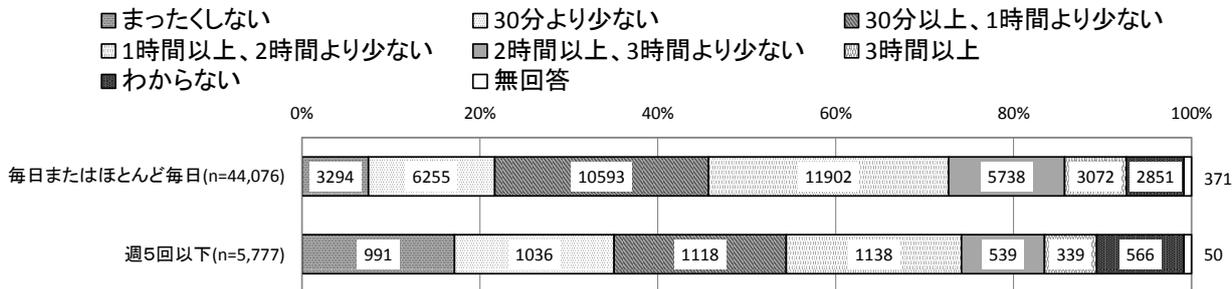
図 起床時間の規則性別に見た、授業以外の勉強時間

ここでは、子ども票問2において「起きている」「どちらかと言えば、起きている」と回答した子どもを「同じ時刻に起きている」、「あまり、起きていない」「起きていない」と回答した子どもを「同じ時刻には起きていない」としています。

起床時間の規則性別に授業以外の勉強時間を見ると、「同じ時刻に起きている」子どもの方が、「30分以上、1時間より少ない」、「1時間以上、2時間より少ない」、「2時間以上、3時間より少ない」と回答した人の割合が高い結果となりました。「同じ時刻には起きていない」子どもでは、「まったくしない」と回答した人は11.2%となっています。

朝食の頻度別に見た、授業以外の勉強時間（子ども票問 5-1×子ども票問 14）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

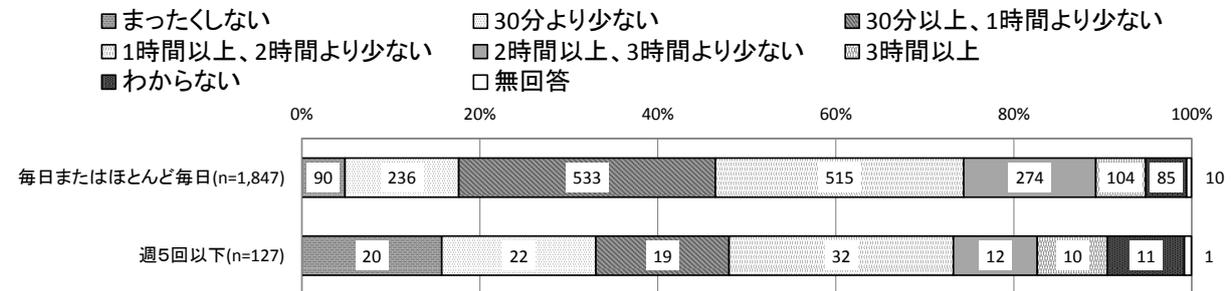


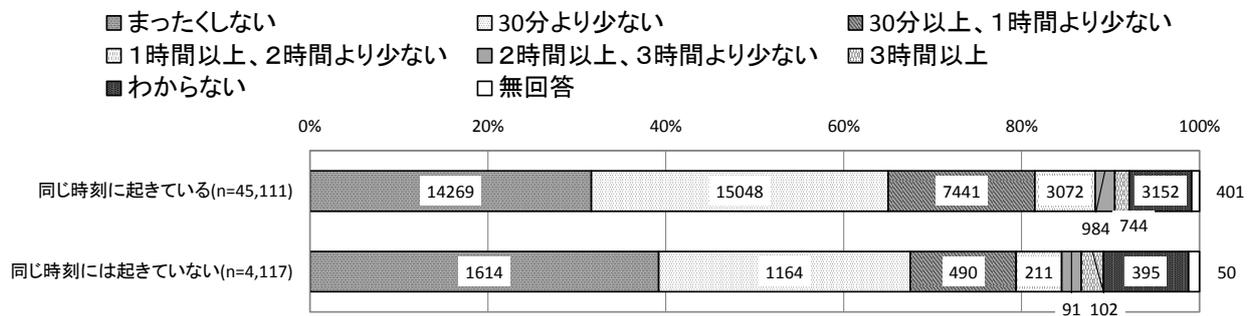
図 朝食の頻度別に見た、授業以外の勉強時間

ここでは、子ども票問 5 において「毎日またはほとんど毎日」と回答した子どもを「毎日またはほとんど毎日」朝食をとる、それ以外を選択した子ども（無回答除く）を「週 5 回以下」としています。

朝食の頻度別に授業以外の勉強時間を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとる子どもでは、「まったくしない」と回答したのは 4.9%であり「週 5 回以下」の子どもよりもその割合は低くなりました。また、同じく「毎日またはほとんど毎日」朝食をとる子どもでは、「30 分以上、1 時間より少ない」「1 時間以上、2 時間より少ない」「2 時間以上、3 時間より少ない」と回答した子どもはそれぞれ 28.9%、27.9%、14.8%であり、「週 5 回以下」朝食をとる子どもよりも割合が高くなりました。

起床時間の規則性別に見た、授業以外の読書時間（子ども票問2×子ども票問16）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

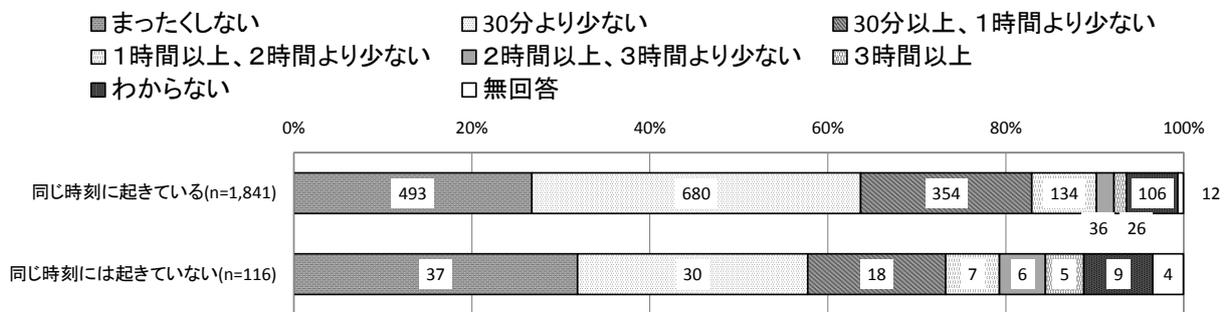


図 起床時間の規則性別に見た、授業以外の読書時間

起床時間の規則性別に授業以外の読書時間を見ると、「同じ時刻に起きています」子どもの方が、「30分より少ない」、「30分以上、1時間より少ない」、「1時間以上、2時間より少ない」と回答した人の割合が高くなりました。「同じ時刻には起きていない」子どもでは、「まったくしない」と回答した人は31.9%と割合が高い結果となりました。

朝食の頻度別に見た、授業以外の読書時間（子ども票問 5-1×子ども票問 16）

<大阪府内全自治体>

- まったくしない
- 30分より少ない
- 30分以上、1時間より少ない
- 1時間以上、2時間より少ない
- 2時間以上、3時間より少ない
- 3時間以上
- わからない
- 無回答



<枚方市>

- まったくしない
- 30分より少ない
- 30分以上、1時間より少ない
- 1時間以上、2時間より少ない
- 2時間以上、3時間より少ない
- 3時間以上
- わからない
- 無回答

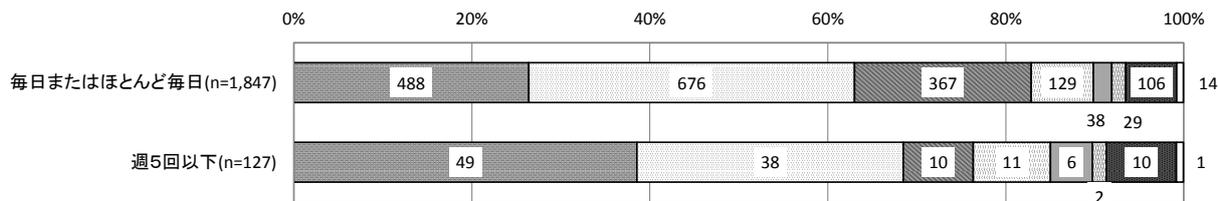


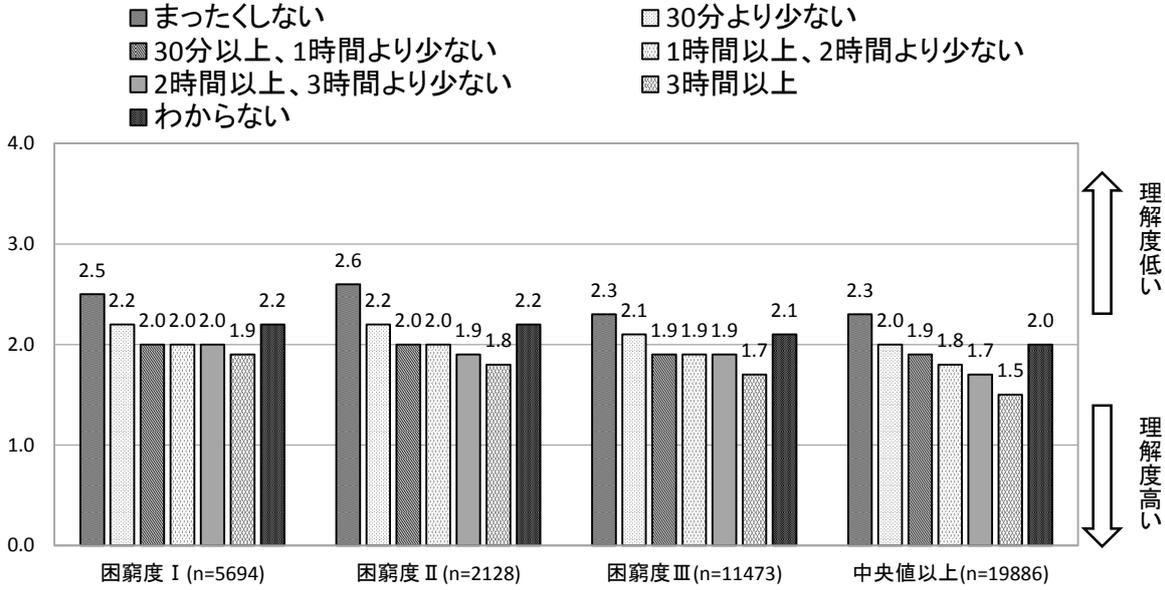
図 朝食の頻度別に見た、授業以外の読書時間

朝食の頻度別に授業以外の読書時間を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとる子どもでは、「まったくしない」と回答したのは26.4%であり「週5回以下」の子どもよりもその割合は低くなりました。また、同じく「毎日またはほとんど毎日」朝食をとる子どもでは、「30分より少ない」「30分以上、1時間より少ない」と回答した子どもはそれぞれ36.6%、19.9%であり、「週5回以下」朝食をとる子どもよりも割合が高い結果となりました。

困窮度別に見た、授業以外の勉強時間と学習理解度の関連（子ども票問 14&子ども票問 15）

※学習理解度について、「1. よくわかる」～「4. ほとんどわからない」まで 4 項目で評定しました。
 数値が低いほど、学習理解度が高いことを表します。

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

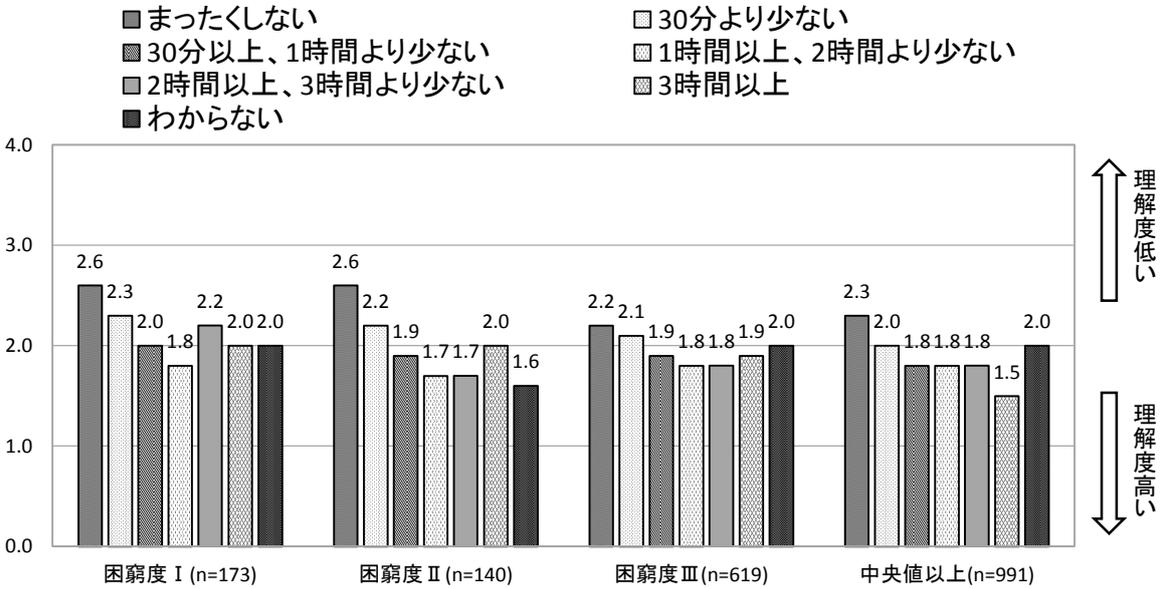
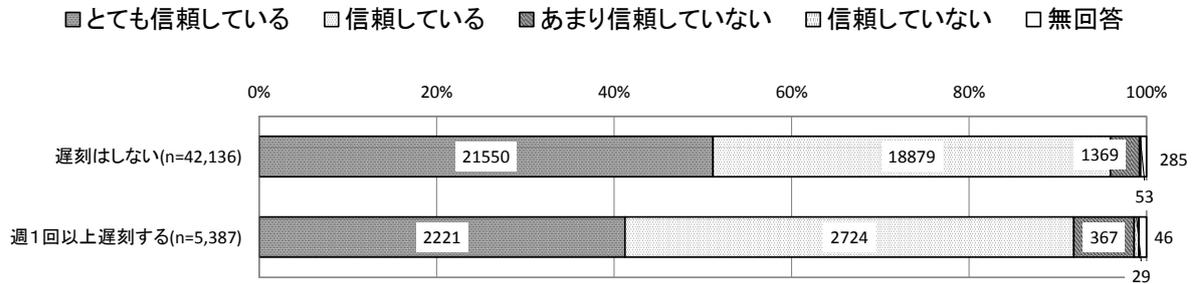


図 困窮度別に見た、授業以外の勉強時間と学習理解度の関連

困窮度別の授業以外の勉強時間と学習理解度の関連を見ると、困窮度が厳しいほど、同じ勉強時間であっても、理解度が低くなっている傾向が見られます。

学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの信頼度）
 （子ども票問 9×保護者票問 14-1）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

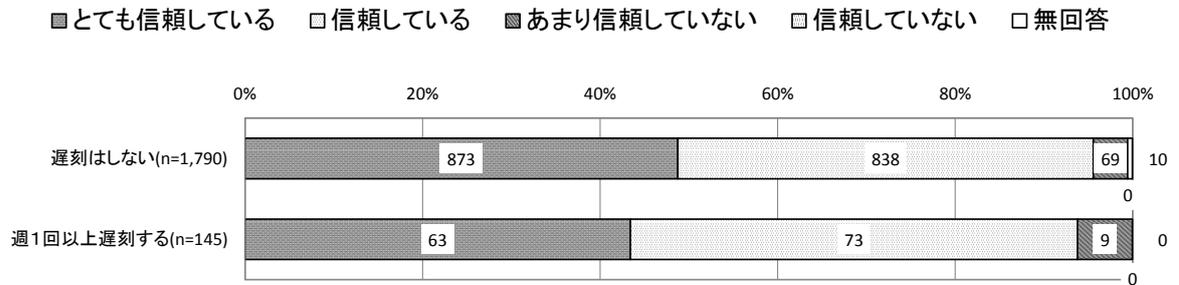


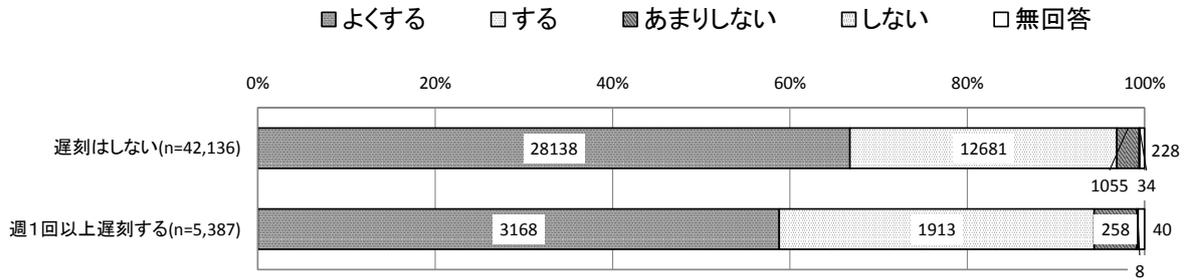
図 学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの信頼度）

ここでは、子ども票問 9 において「遅刻はしない」と回答した子どもを「遅刻はしない」、それ以外を選択した子ども（無回答除く）を「週 1 回以上遅刻する」としています。

学校への遅刻別に保護者と子どもの関わり（子どもへの信頼度）を見ると、「遅刻はしない」子どもにおいては、保護者は「とも信頼している」割合が高く、48.8%でした。「週 1 回以上遅刻する」子どもにおいては、保護者は「あまり信頼していない」割合が高く、6.2%でした。

学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと会話）
 (子ども票問 9×保護者票問 14-2)

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

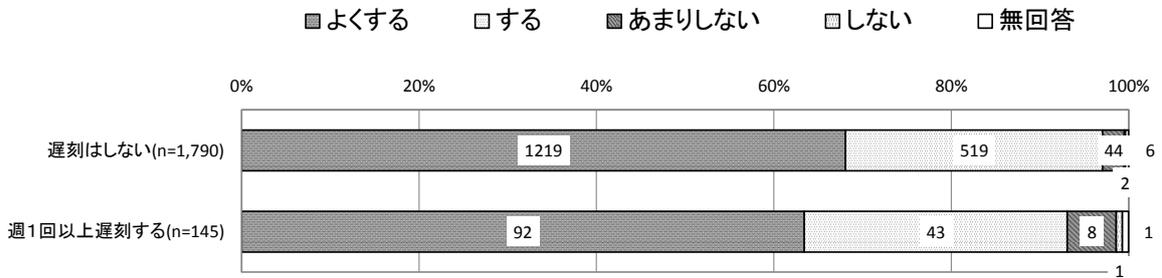
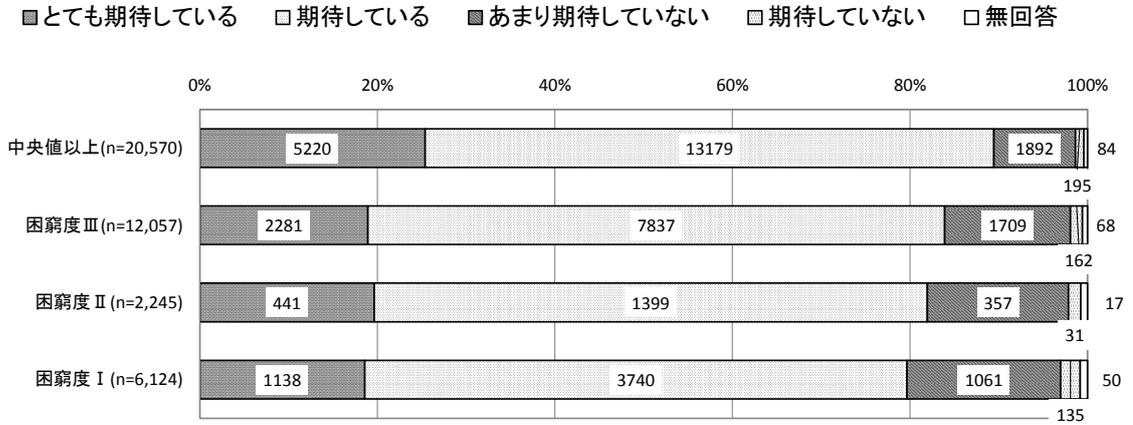


図 学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと会話）

学校への遅刻別に保護者と子どもの関わり（子どもと会話）を見ると、「遅刻はしない」子どもにおいては、保護者は会話を「よくする」割合がわずかに高く、68.1%でした。「週1回以上遅刻する」子どもにおいては、保護者は会話を「あまりしない」割合が高く、5.5%でした。

困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの将来の期待）（保護者票問 14-4）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

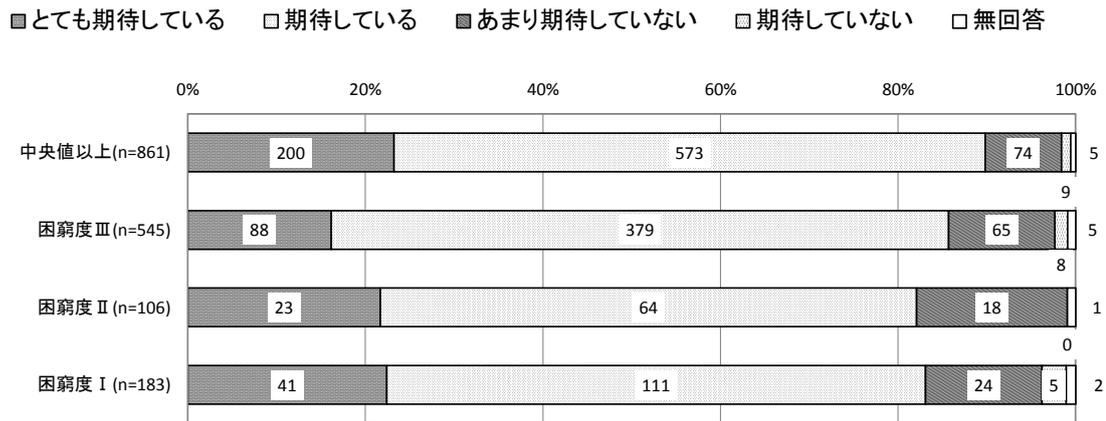
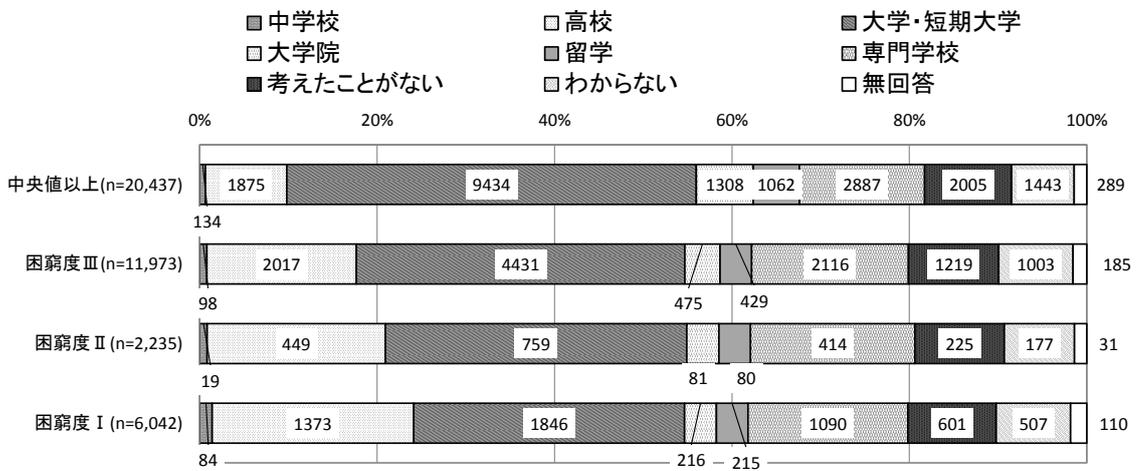


図 困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの将来の期待）

困窮度別に保護者と子どもの関わり（子どもへの将来の期待）を見ると、困窮度が厳しいほど、「あまり期待していない」「期待していない」が増えています。

困窮度別に見た、希望する進学先（子ども票問 24）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

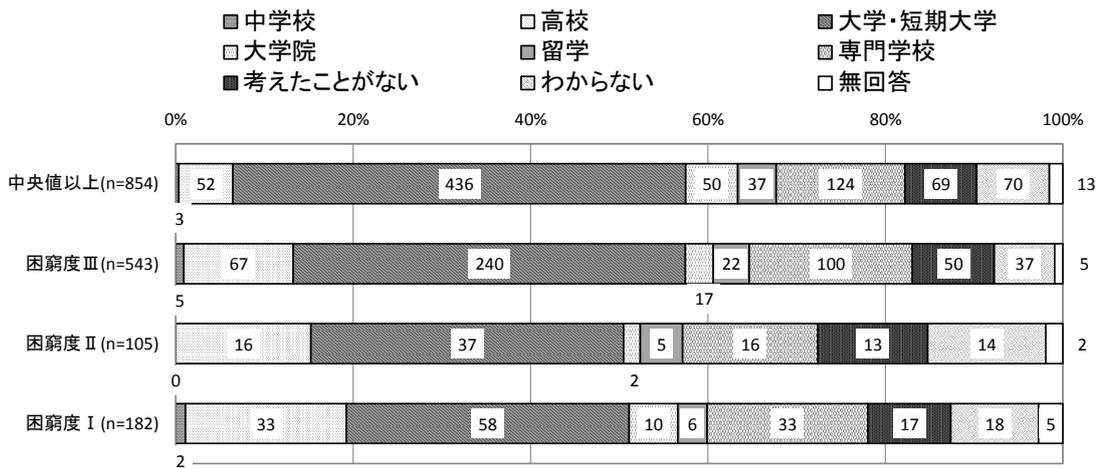
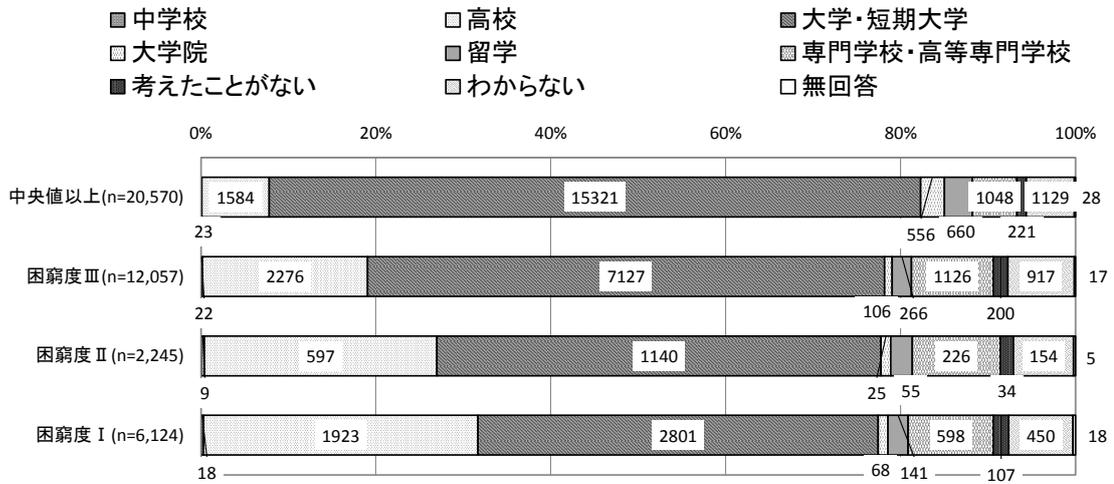


図 困窮度別に見た、希望する進学先

困窮度別に子どもの希望する進学先を見ると、困窮度が厳しいほど、「高校」、「専門学校」の割合が高くなっています。困窮度Ⅰ群では、「中学校」「高校」と回答した子どもは合計19.2%、「専門学校」と回答した子どもは18.1%でした。中央値以上群において「大学・短期大学」と回答した割合は高く、51.1%でした。

困窮度別に見た、保護者による子どもの進学希望（保護者票問 15）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

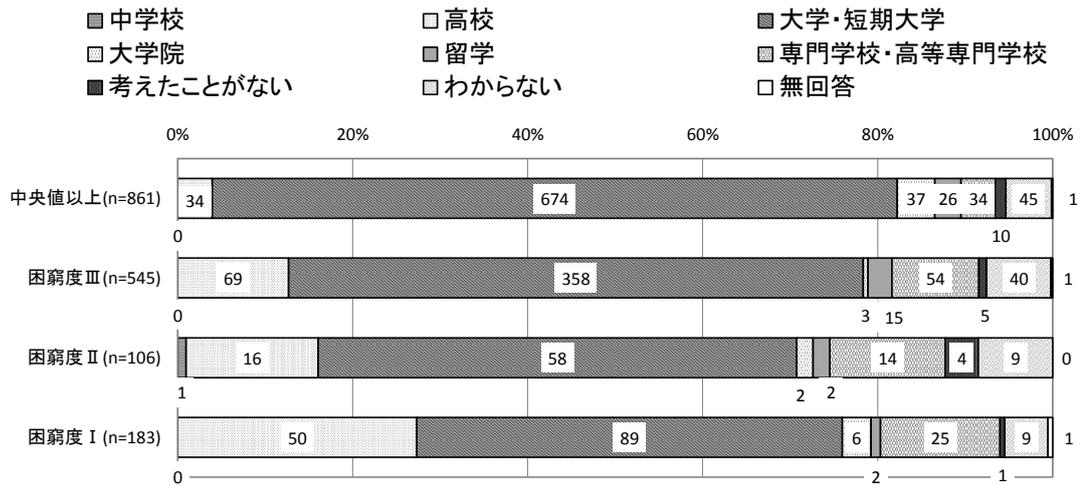
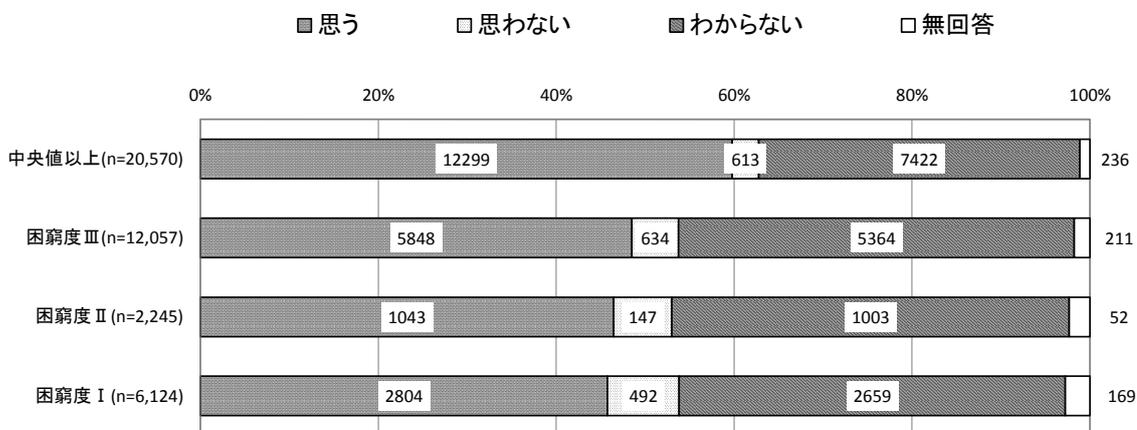


図 困窮度別に見た、保護者による子どもの進学希望

困窮度別に保護者による子どもの進学希望を見ると、困窮度が厳しいほど、「高校」までの割合と「専門学校・高等専門学校」と回答した割合が高くなっています。困窮度Ⅰ群では、「中学校」「高校」と回答した人は合計 27.3%、「専門学校・高等専門学校」と回答した人は 13.7%でした。中央値以上群において「大学・短期大学」と回答した割合は高く、78.3%でした。

困窮度別に見た、保護者による子どもの進学達成予測（保護者票問 16）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

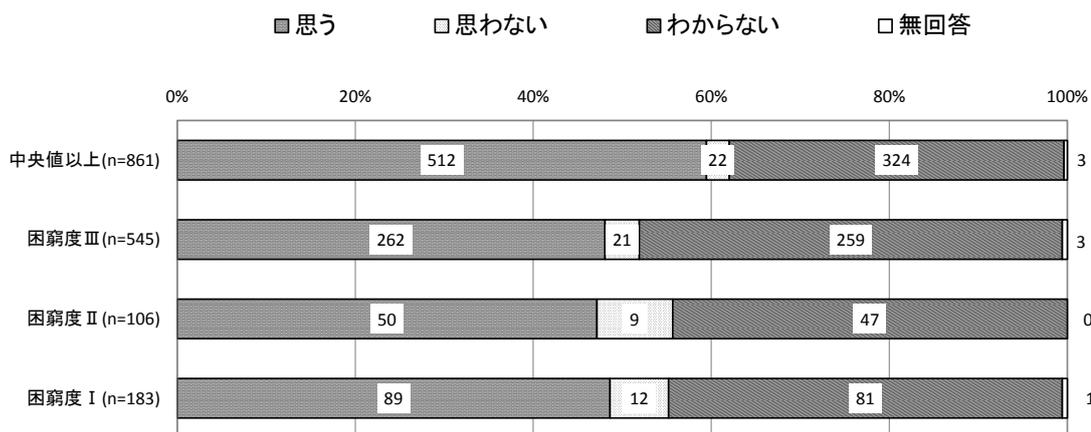
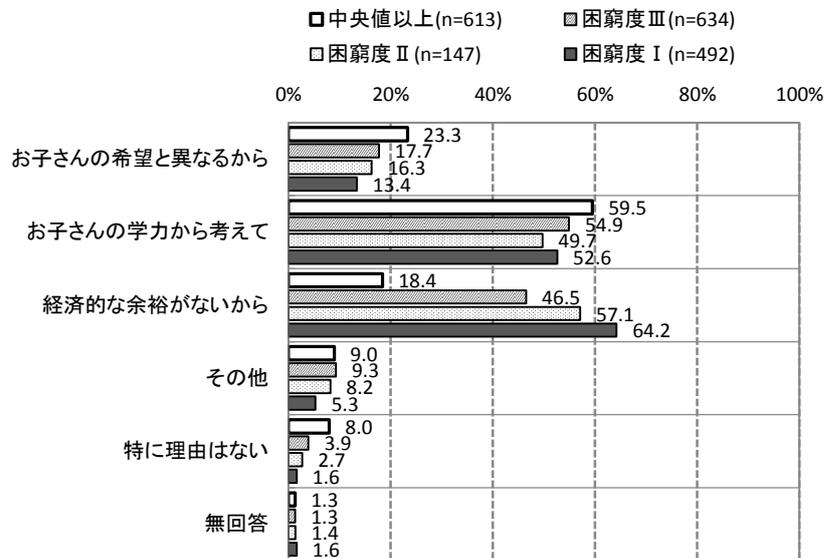


図 困窮度別に見た、保護者による子どもの進学達成予測

困窮度別に保護者による子どもの進学達成予測を見ると、困窮度が厳しいほど、希望どおりの学校に進学することについて「思わない」と回答した保護者の割合が高くなっています。「思わない」と回答した人は困窮度Ⅰ群で 6.6%、困窮度Ⅱ群で 8.5%でした。中央値以上群において「思う」と回答した割合は高く、59.5%でした。

困窮度別に見た、子どもの進学達成「思わない」理由（保護者票問 17）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

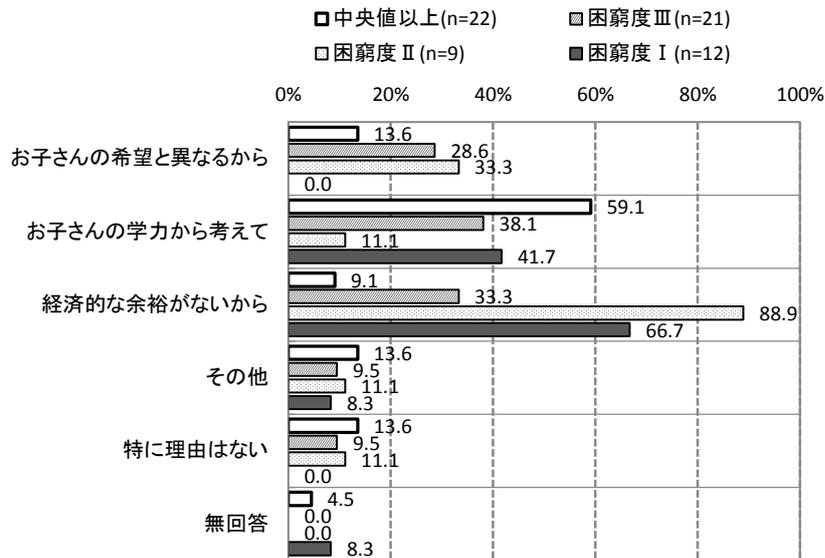
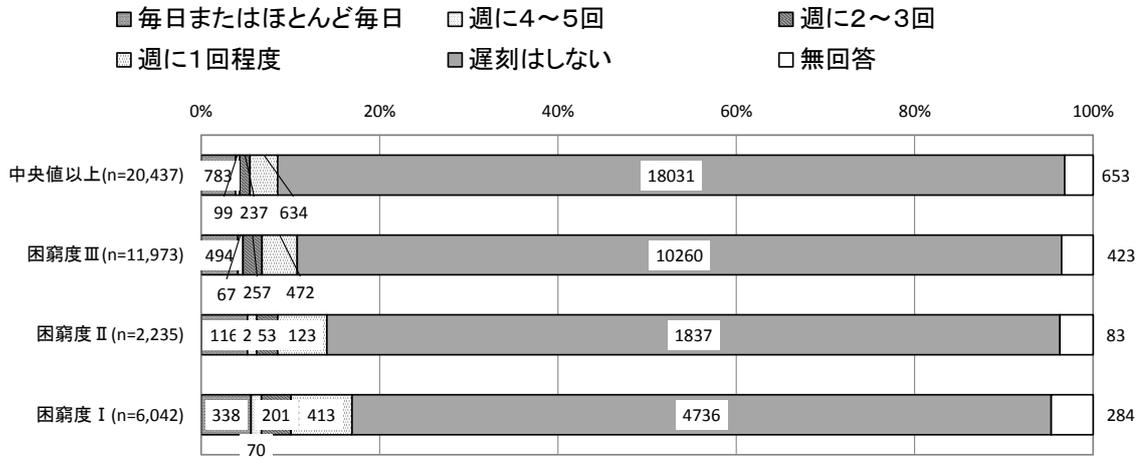


図 困窮度別に見た、子どもの進学達成「思わない」理由

困窮度別に保護者にとって、子どもが希望どおりの学校に進学することについて「思わない」理由を見ると、中央値以上群と困窮度Ⅰ群とで最も差が大きいのは「経済的な余裕がないから」でした。困窮度Ⅰ群・困窮度Ⅱ群において「経済的な余裕がないから」と回答した人はそれぞれ、66.7%、88.9%でした。

困窮度別に見た、学校への遅刻（子ども票問 9）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

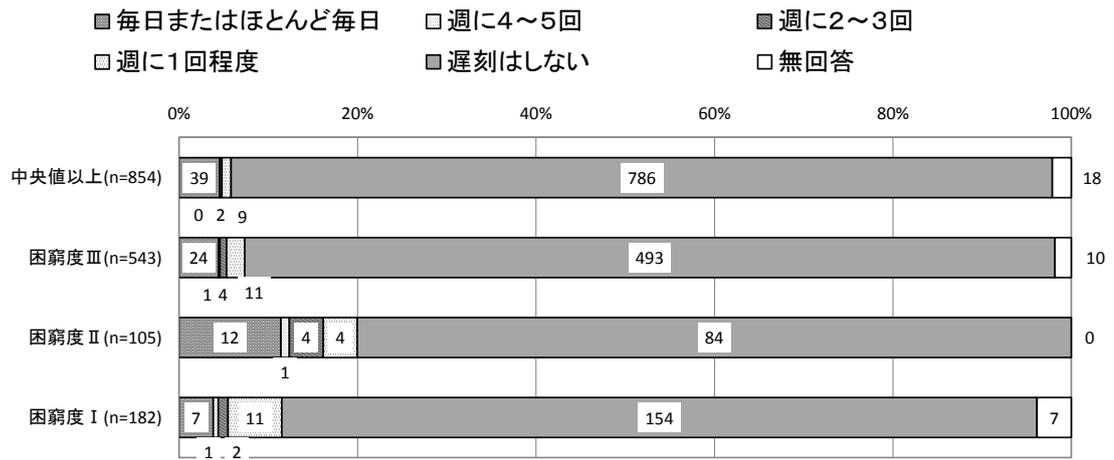
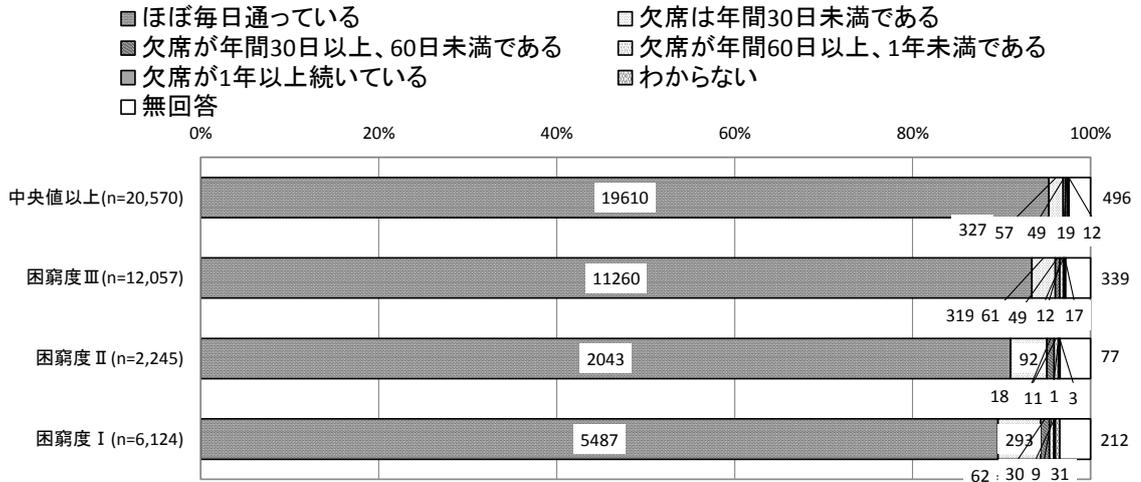


図 困窮度別に見た、学校への遅刻

困窮度別に学校への遅刻を見ると、困窮度Ⅱ群で、週に1回以上遅刻をする子どもの割合が20.0%と高い結果となりました。困窮度Ⅰ群で、週に1回以上遅刻をする子どもの割合は11.5%でした。

困窮度別に見た、子どもの通学状況（保護者票問 18）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

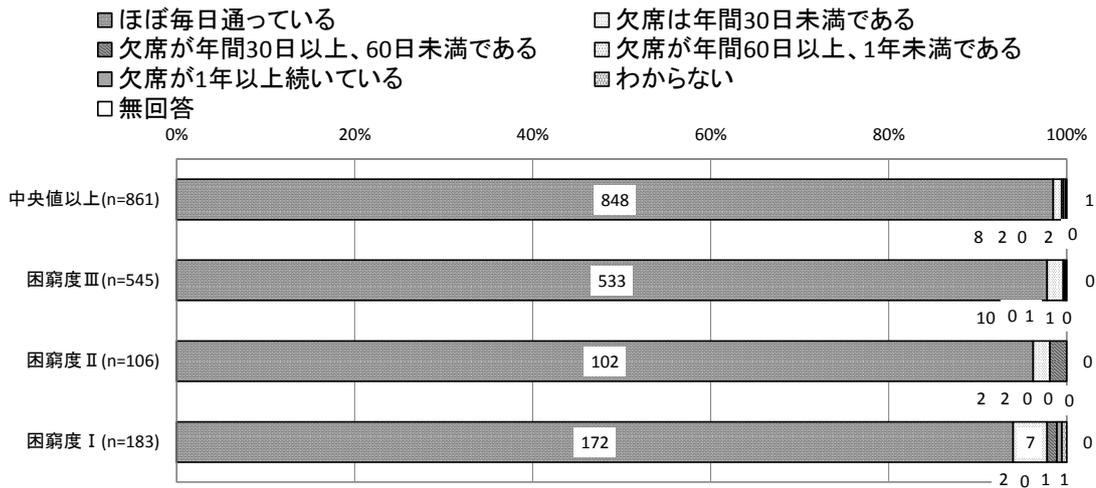


図 困窮度別に見た、子どもの通学状況

困窮度別に子どもの通学状況を見ると、困窮度が厳しいほど、「ほぼ毎日通っている」割合が低くなる傾向が見られます。困窮度Ⅱ群、困窮度Ⅰ群では、年間30日以上欠席している割合は1.9%、1.6%でした。

学校への遅刻別に見た、悩んでいること（子ども票問9×子ども票問18）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

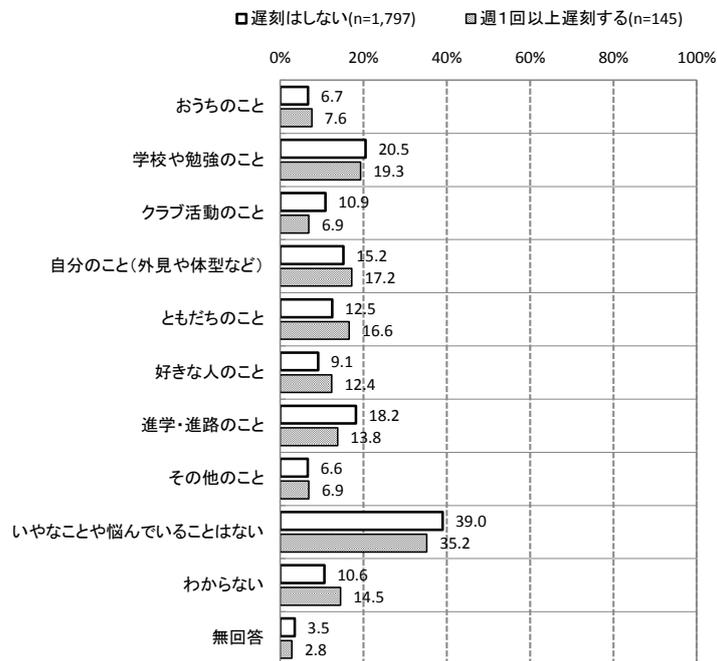
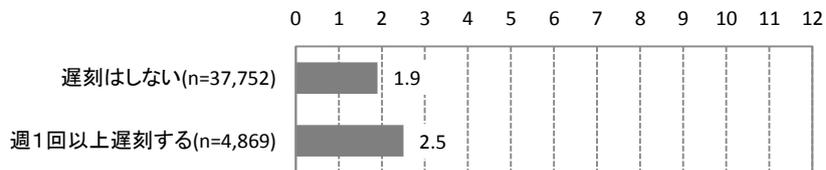


図 学校への遅刻別に見た、悩んでいること

学校への遅刻別に子どもが悩んでいることを見ると、「週1回以上遅刻する」子どもの方が「遅刻はしない」子どもよりも、「ともだちのこと」では4.0ポイント、「好きな人のこと」では3.3ポイント、「自分のこと（外見や体型など）」では2.0ポイント、回答した割合が高くなりました。また、「遅刻はしない」子どもにおいては、「いやなことや悩んでいることはない」と回答した割合が39.0%でした。

学校への遅刻別に見た、自分の体や気持ちで気になることの該当数
 (子ども票問 9×子ども票問 21)

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

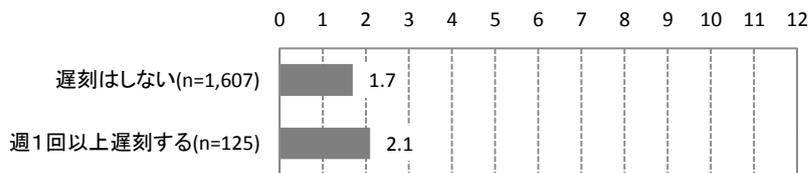
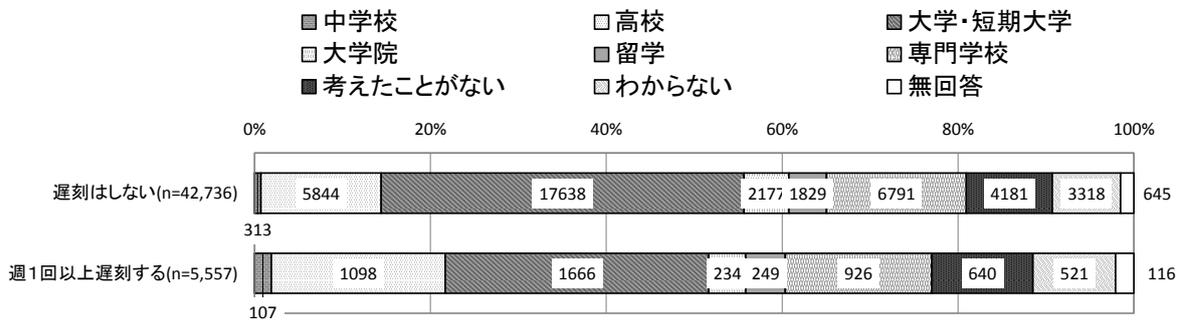


図 学校への遅刻別に見た、自分の体や気持ちで気になることの該当数

学校への遅刻別に子どもが自分の体や気持ちで気になることの該当数を見ると、「週1回以上遅刻する」子どもは、自分の体や気持ちで気になることが平均 2.1 個該当していました。

学校への遅刻別に見た、希望する進学先（子ども票問9×子ども票問24）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

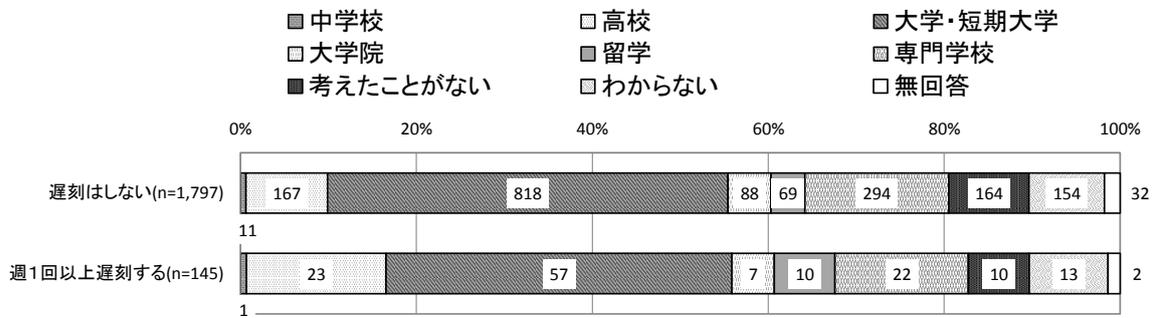


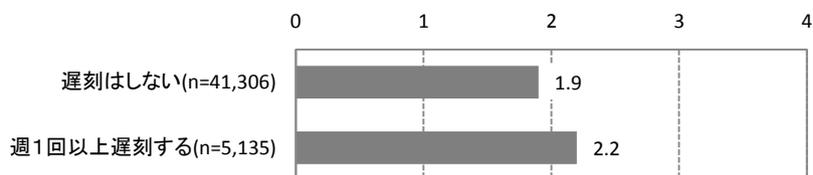
図 学校への遅刻別に見た、希望する進学先

学校への遅刻別に子どもの希望する進学先を見ると、「週1回以上遅刻する」子どもは「高校」と回答した割合が高く、15.9%でした。「遅刻はしない」子どもは、「大学・短期大学」と回答した割合が高く、45.5%でした。

学校への遅刻別に見た、学習理解度（子ども票問9×子ども票問15）

※学習理解度について、「1. よくわかる」～「4. ほとんどわからない」まで4項目で評定しました。数値が低いほど、学習理解度が高いことを表します。

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

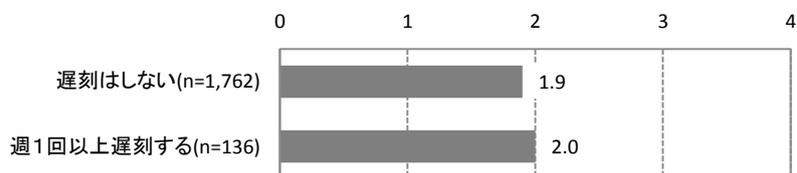
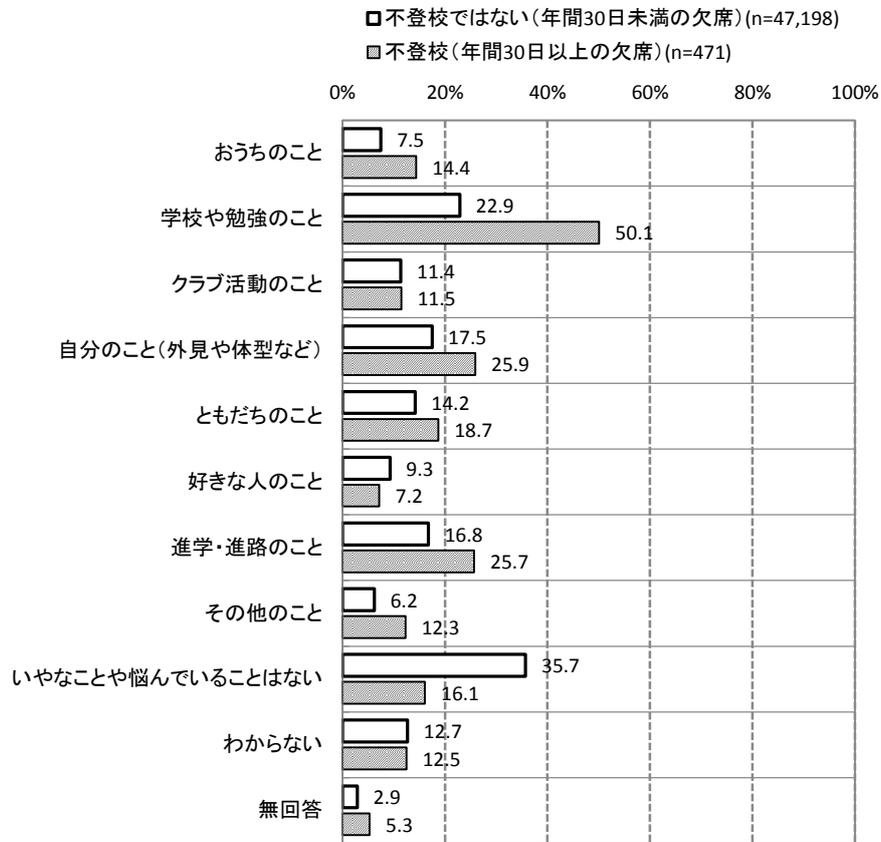


図 学校への遅刻別に見た、学習理解度

学校への遅刻別に子どもの学習理解度を見ると、「週1回以上遅刻する」子どもは「遅刻はしない」子どもよりも学習理解度がわずかに低い結果となりました。

登校状況別に見た、悩んでいること（保護者票問 18×子ども票問 18）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

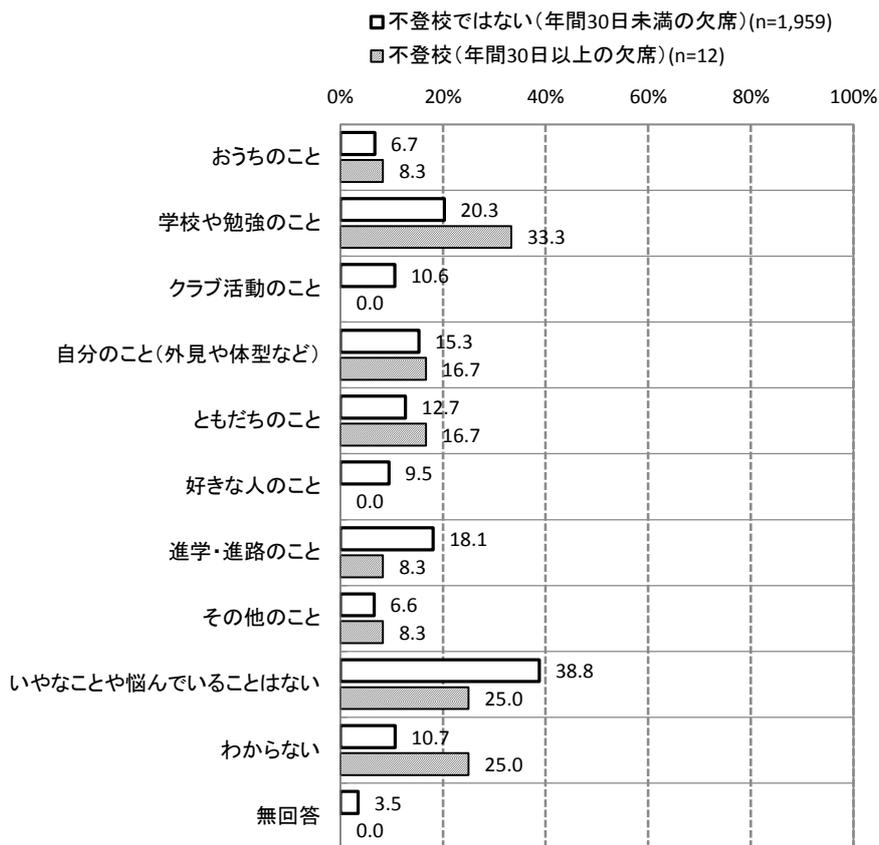


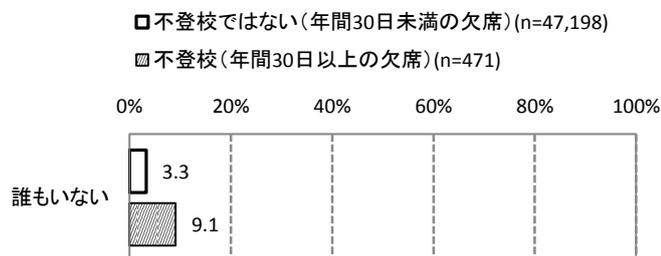
図 登校状況別に見た、悩んでいること

ここでは、保護者票問 18 において「ほぼ毎日通っている」「欠席は年間 30 日未満である」を「不登校ではない」、「欠席が年間 30 日以上、60 日未満である」「欠席が年間 60 日以上、1 年未満である」「欠席が 1 年以上続いている」を「不登校」としています。

登校状況別に子どもの悩んでいることを見ると、「学校や勉強のこと」に悩んでいる子どもは「不登校」において「不登校ではない」の 1.6 倍となっています。また、「不登校ではない」子どもでは、「いやなことや悩んでいることはない」に該当するのは 38.8%でした。

登校状況別に見た、「悩んだときの対処を教えてください」がない割合
 (保護者票問 18×子ども票問 20-6)

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

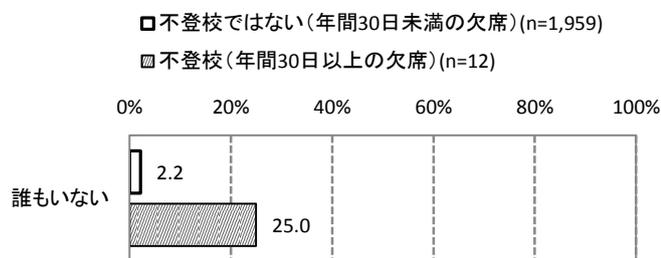
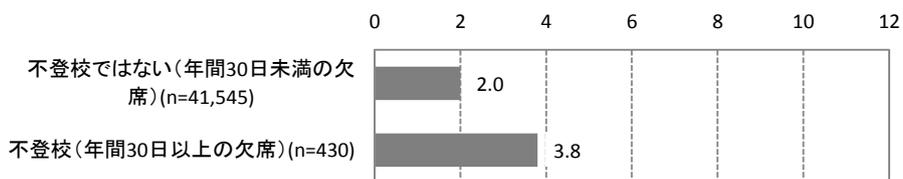


図 登校状況別に見た、「悩んだときの対処を教えてください」がない割合

登校状況別に子どもの「悩んだときの対処を教えてください」がない割合を見ると、「不登校」では 25.0%であり、「不登校ではない」子どもの 11.1 倍でした。

登校状況別に見た、自分の体や気持ちで気になることの該当数（保護者票問 18×子ども票問 21）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

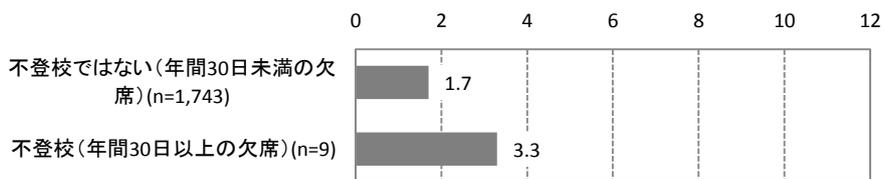
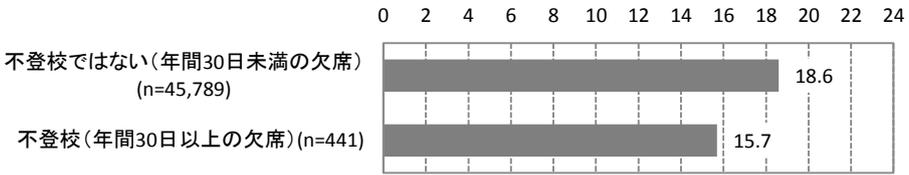


図 登校状況別に見た、自分の体や気持ちで気になることの該当数

登校状況別に子どもの自分の体や気持ちで気になることの該当数を見ると、「不登校」では平均 3.3 個であり、「不登校ではない」子どもの約 1.9 倍でした。

登校状況別に見た、子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）（保護者票問 18×子ども票問 23）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

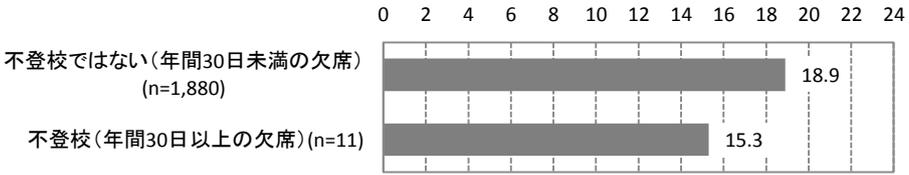
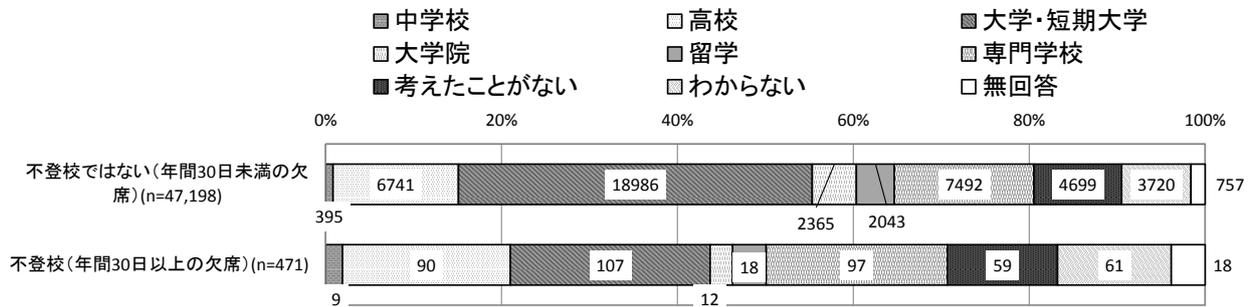


図 登校状況別に見た、子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）

登校状況別に子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）の得点を見ると、「不登校」では平均 15.3 点であり、「不登校ではない」子どもよりも約 3.7 点低い結果となりました。

登校状況別に見た、希望する進学先（保護者票問 18×子ども票問 24）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

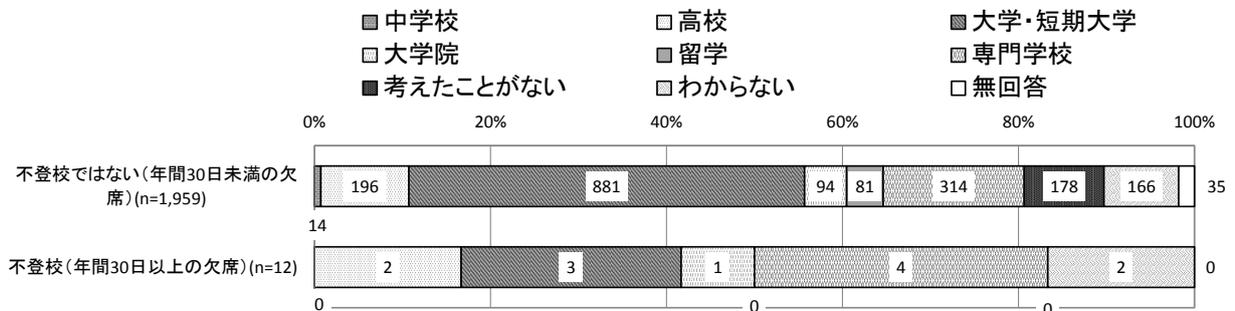
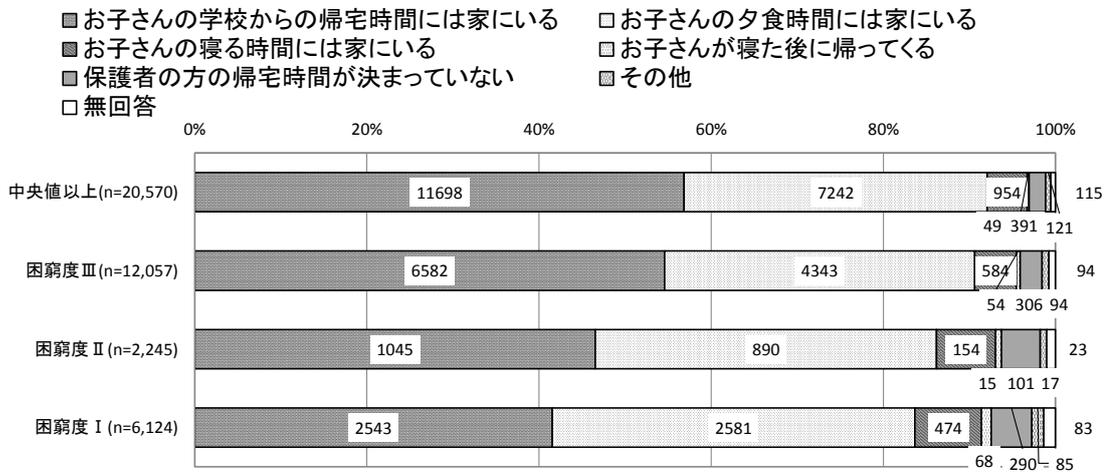


図 登校状況別に見た、希望する進学先

登校状況別に子どもの希望する進学先を見ると、「不登校」である子どもは「高校」、「専門学校」の割合が高くなっています。

困窮度別に見た、保護者の在宅時間（保護者票問 10）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

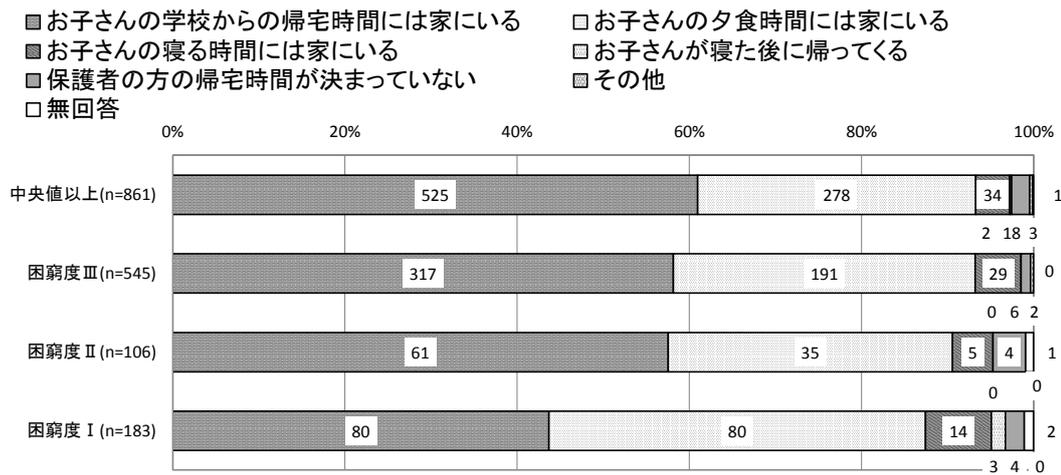
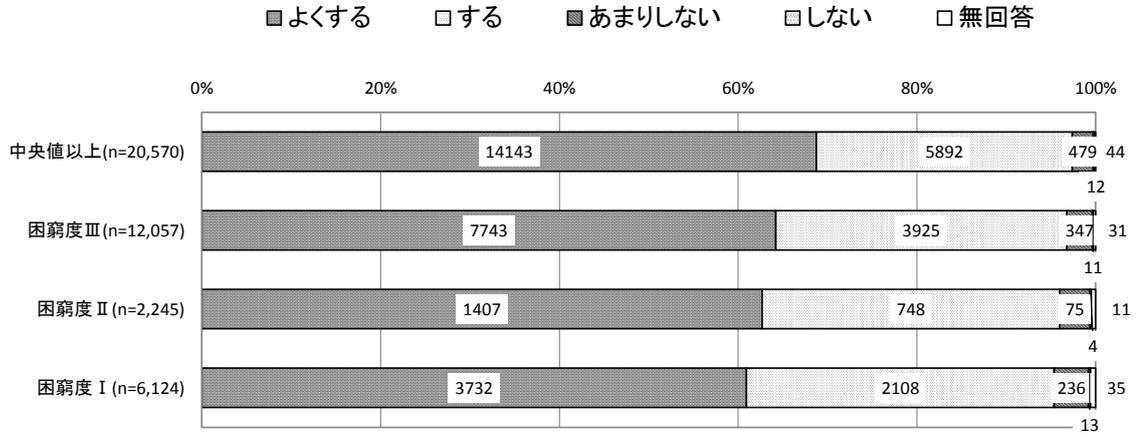


図 困窮度別に見た、保護者の在宅時間

困窮度別に保護者の在宅時間を見ると、中央値以上群・困窮度Ⅲ群・困窮度Ⅱ群の方が、困窮度Ⅰ群よりも、「お子さんの学校からの帰宅時間には家にいる」と回答した割合が高くなりました。また、困窮度Ⅰ群では「お子さんの夕食時には家にいる」と回答した割合が高く、43.7%でした。

困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと会話）（保護者票問 14-2）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

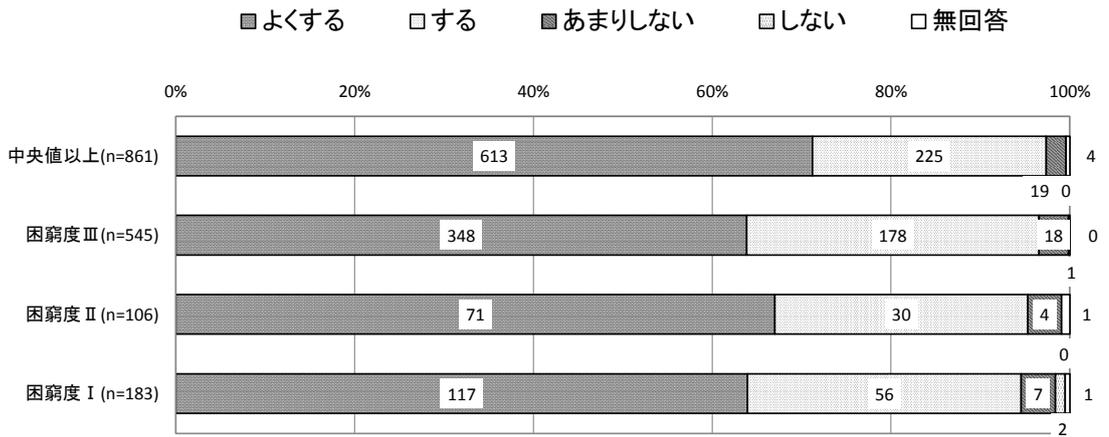
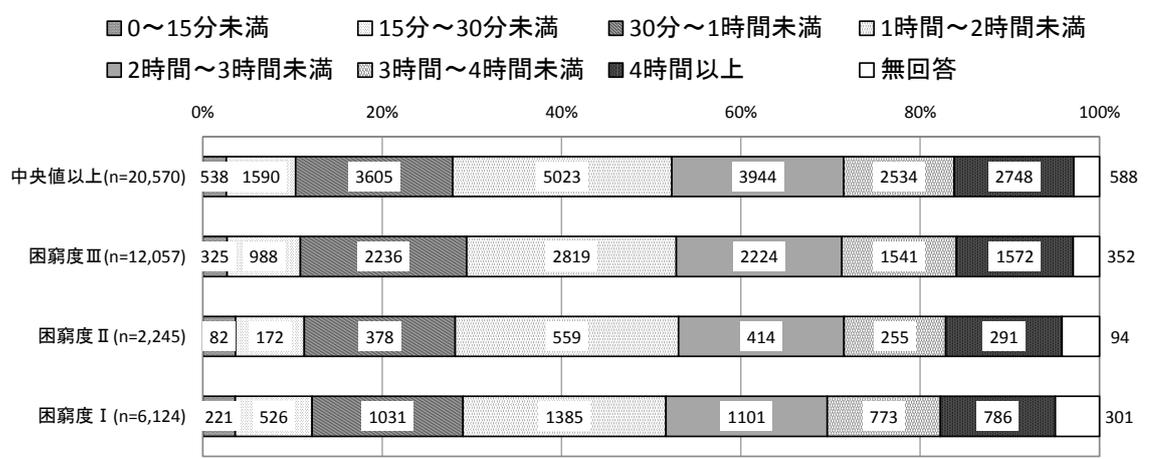


図 困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと会話）

困窮度別に保護者と子どもの関わり（子どもと会話）を見ると、困窮度Ⅰ群では「よくする」と回答した割合が低くなりました。

困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（平日））（保護者票問 14-3）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

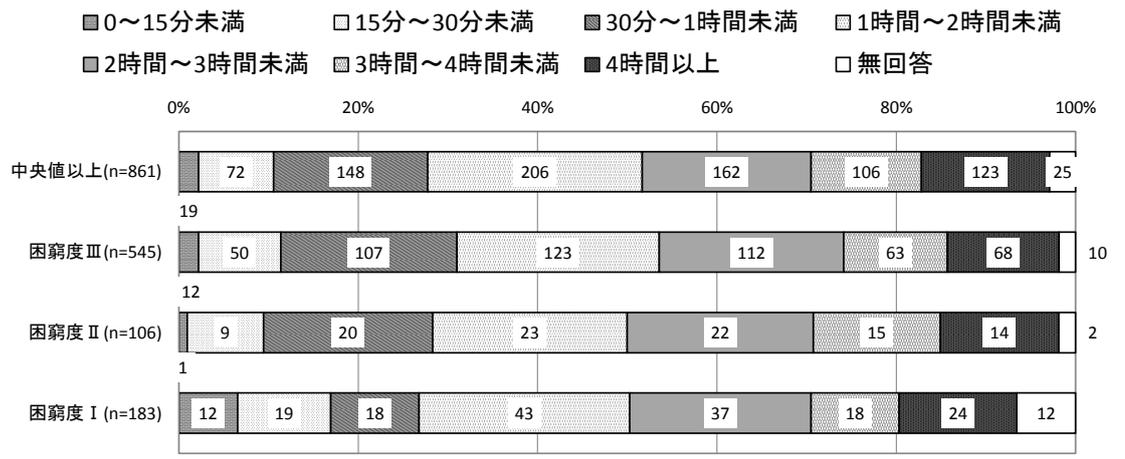
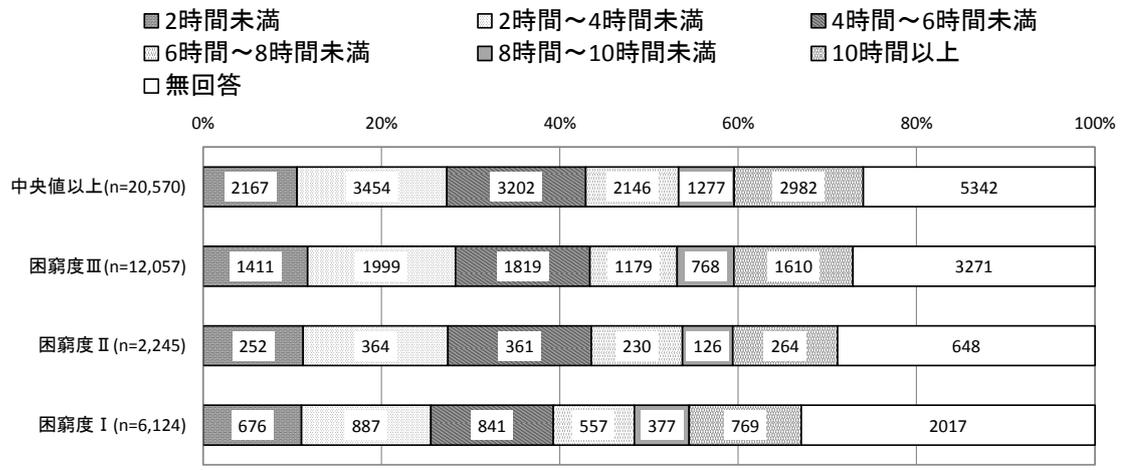


図 困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（平日））

困窮度別に保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（平日））を見ると、困窮度Ⅰ群では「0～15分未満」と回答した割合が高くなりました。

困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（休日））（保護者票問 14-3）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

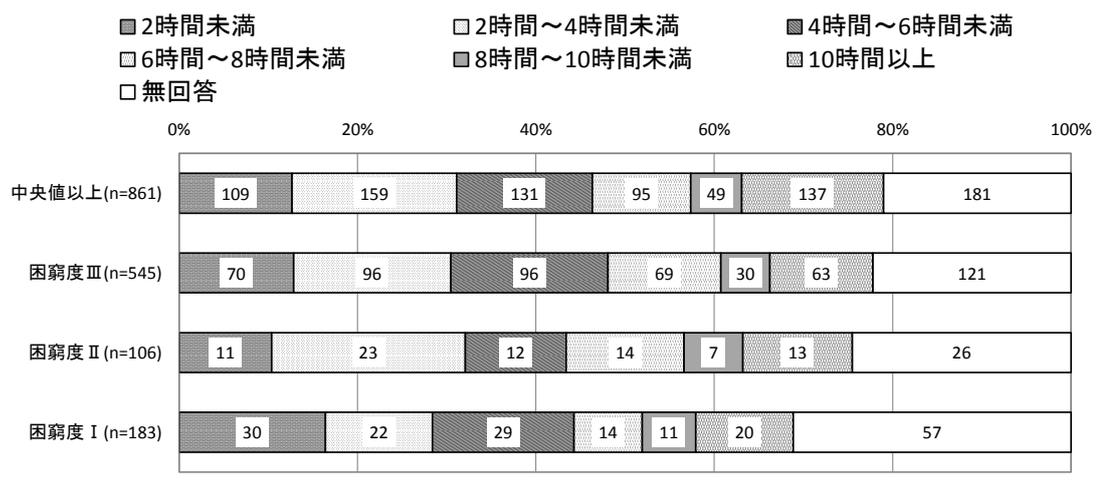


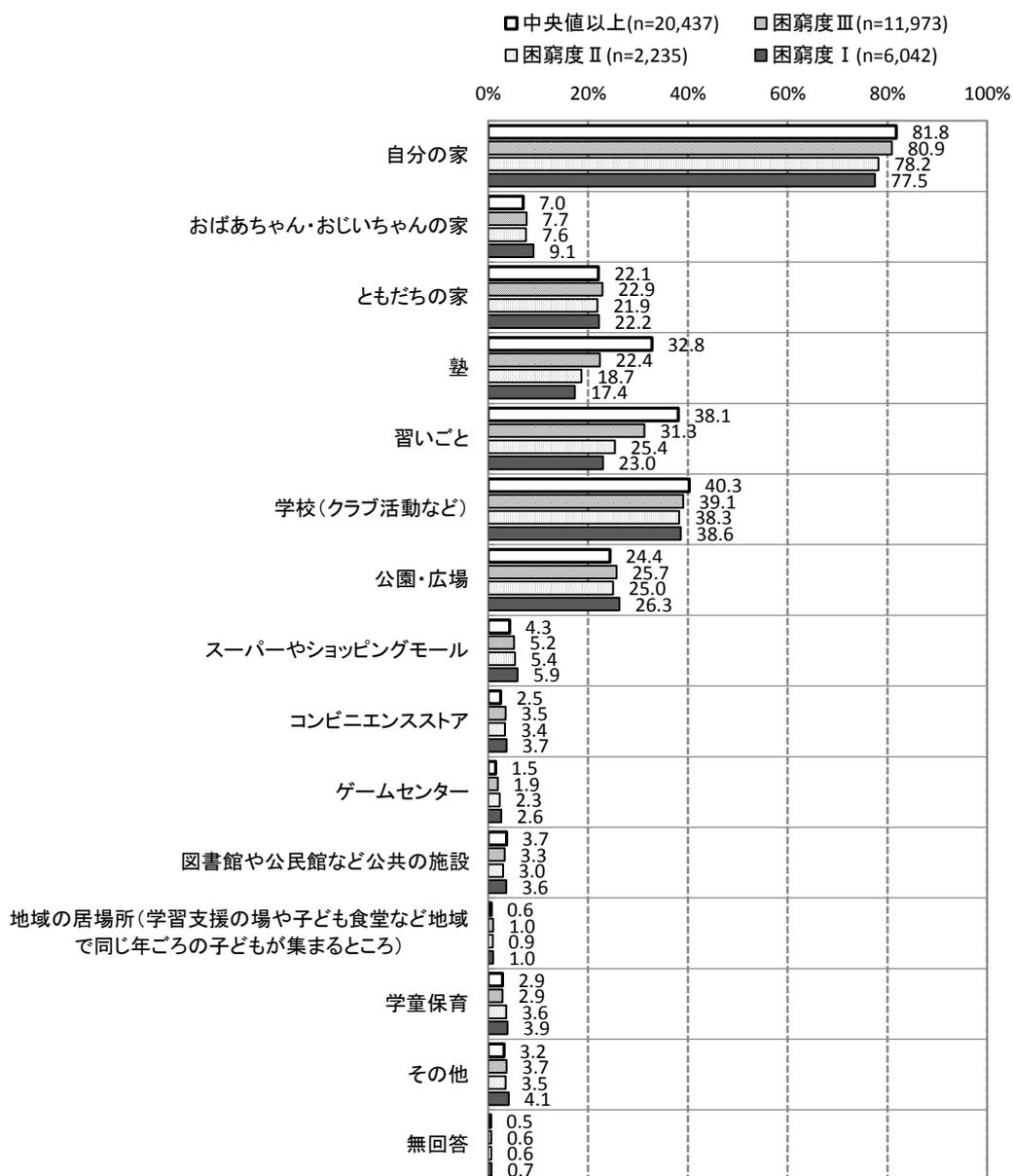
図 困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（休日））

困窮度別に保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（休日））を見ると、困窮度Ⅰ群では「2時間未満」と回答した割合が高くなりました。ただし、いずれも「無回答」が多くなっています。

3-5. 対人関係

困窮度別に見た、放課後に過ごす場所（子ども票問13）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

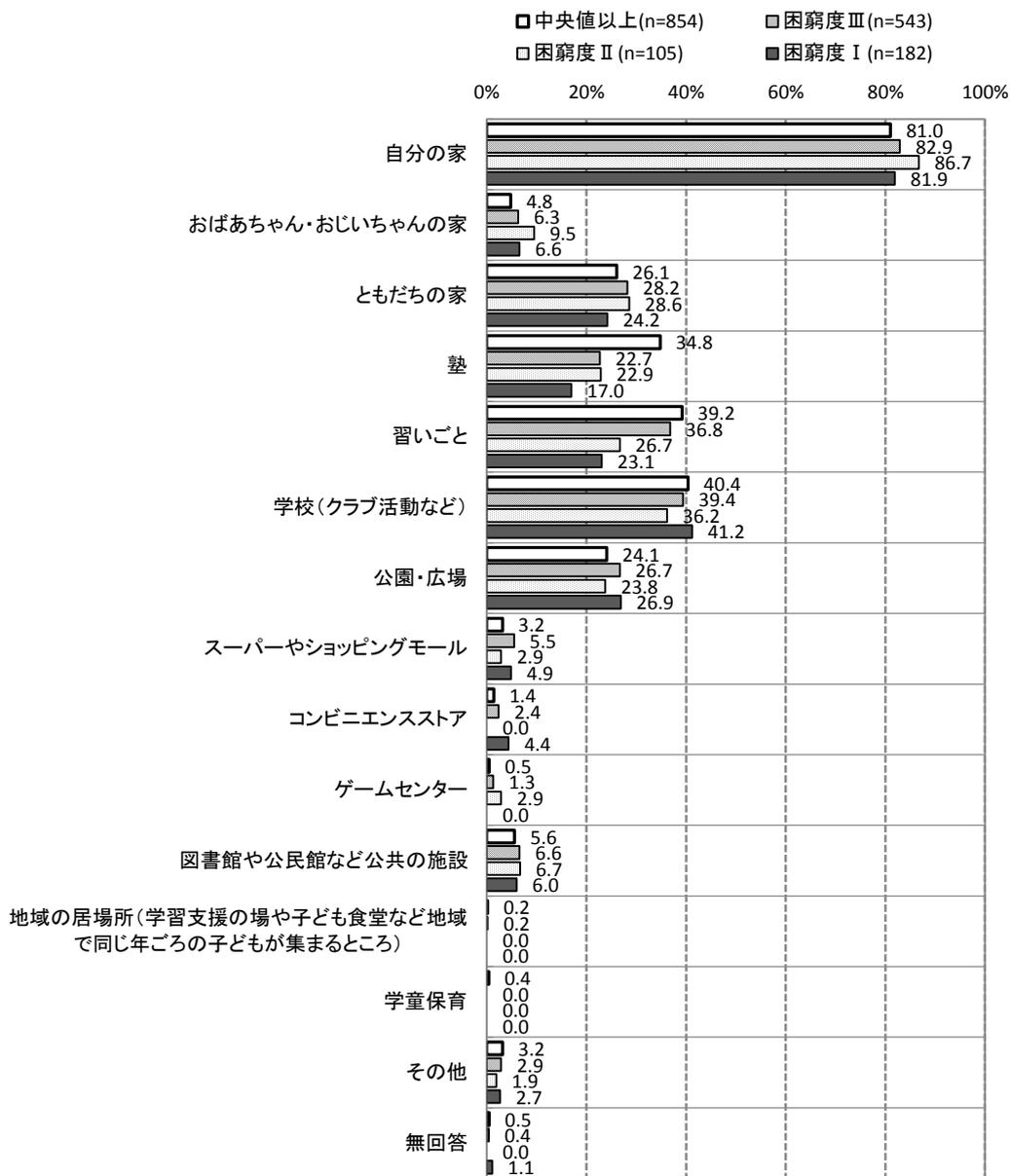
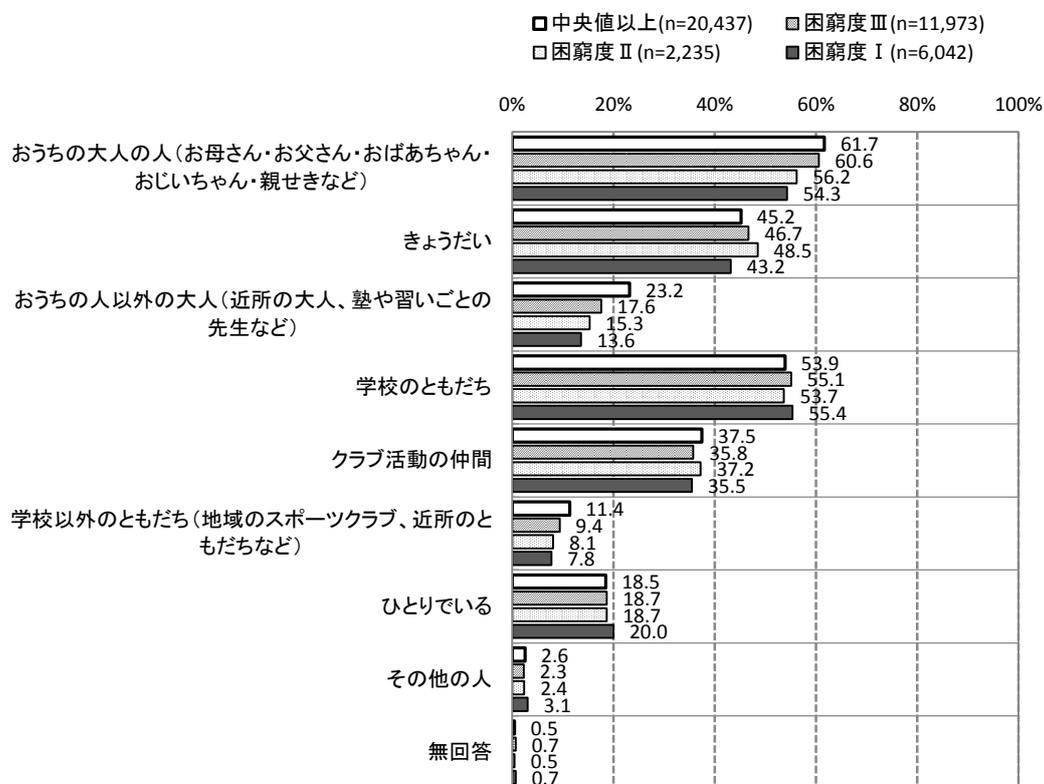


図 困窮度別に見た、放課後に過ごす場所

困窮度別に子どもが放課後に過ごす場所について、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で差が大きい項目に着目しながら、困窮度Ⅰ群の数値を挙げると、「コンビニエンスストア」4.4%（中央値以上群に対して、3.1倍）、「スーパーやショッピングモール」4.9%（1.6倍）となり、困窮度Ⅰ群において高い項目が複数見られました。また、中央値以上群では「塾」34.8%（困窮度Ⅰ群に対して、2.0倍）、「習いごと」39.2%（1.7倍）が高い結果となりました。

困窮度別に見た、放課後一緒に過ごす人（子ども票問 12）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

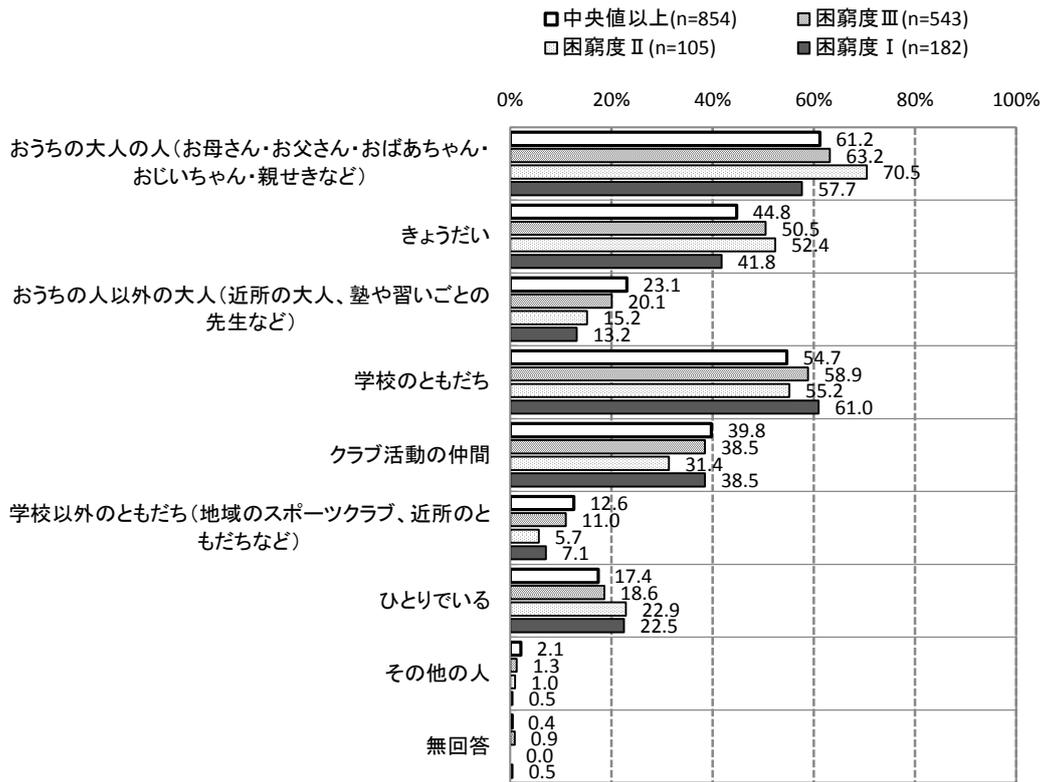
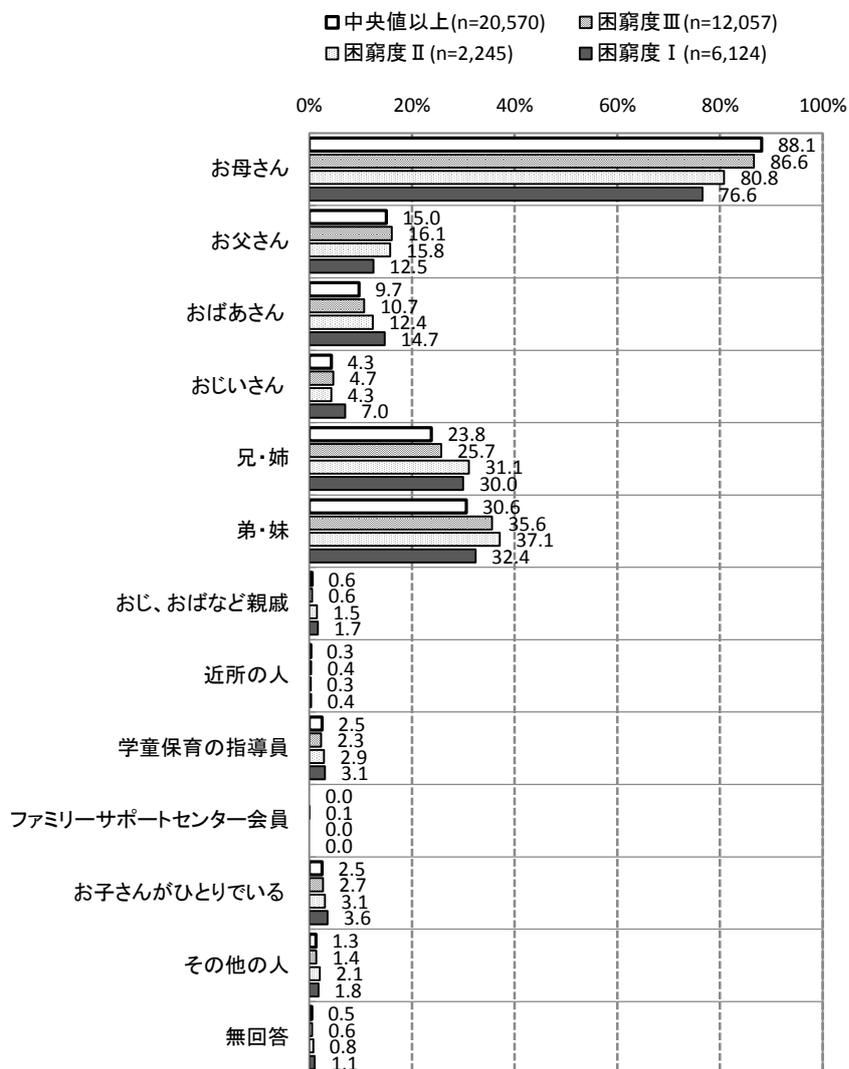


図 困窮度別に見た、放課後一緒に過ごす人

困窮度別に子どもが放課後一緒に過ごす人について、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で差が大きい項目に着目すると、中央値以上群では「学校以外のともだち(地域のスポーツクラブ、近所のともだちなど)」12.6%(困窮度Ⅰ群に対して、1.8倍)、「おうちの人以外の大人(近所の大人、塾や習いごとの先生など)」23.1%(1.7倍)が高くなりました。

困窮度別に見た、子どもと過ごす時間が長い人（保護者票問 11）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

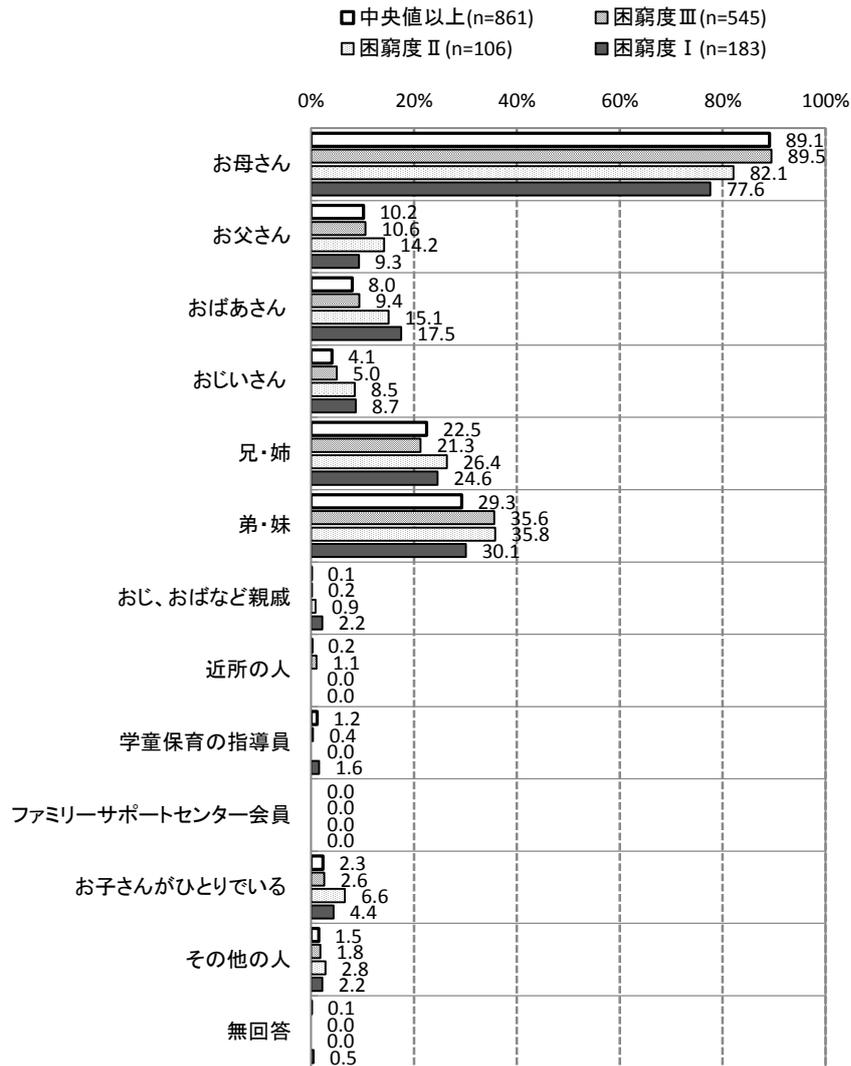
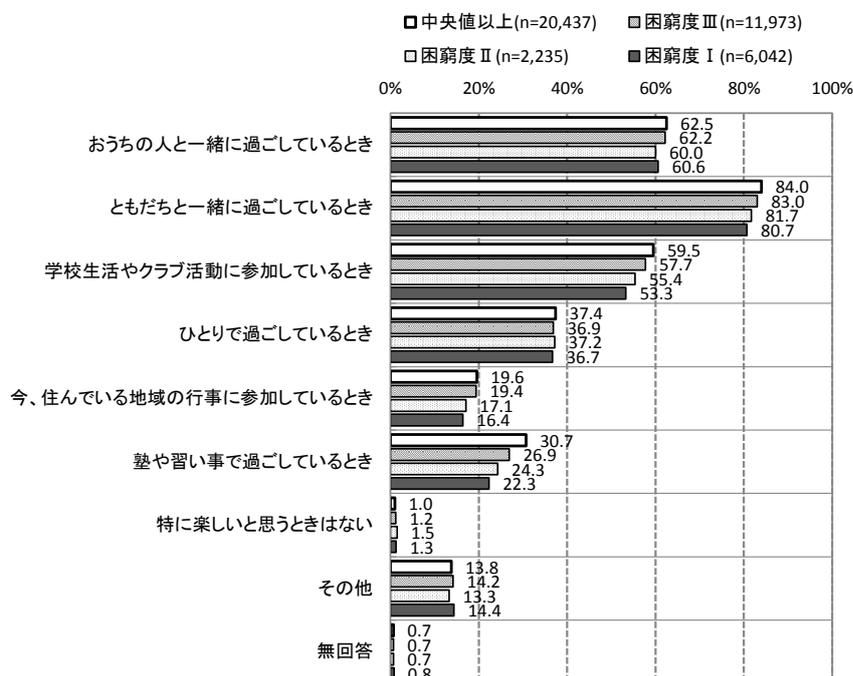


図 困窮度別に見た、子どもと過ごす時間が長い人

困窮度別に保護者が放課後に子どもと過ごす時間が長い人について、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で差が大きい項目に着目しながら、困窮度Ⅰ群の数値を挙げると、「おじ、おばなど親戚」2.2%（中央値以上群に対して、18.8倍）、「おばあさん」17.5%（2.2倍）、「おじいさん」8.7%（2.2倍）、「お子さんがひとりである」4.4%（1.9倍）となり、困窮度Ⅰ群において高い項目が複数見られました。

困窮度別に見た、毎日の生活で楽しいこと（子ども票問 11）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

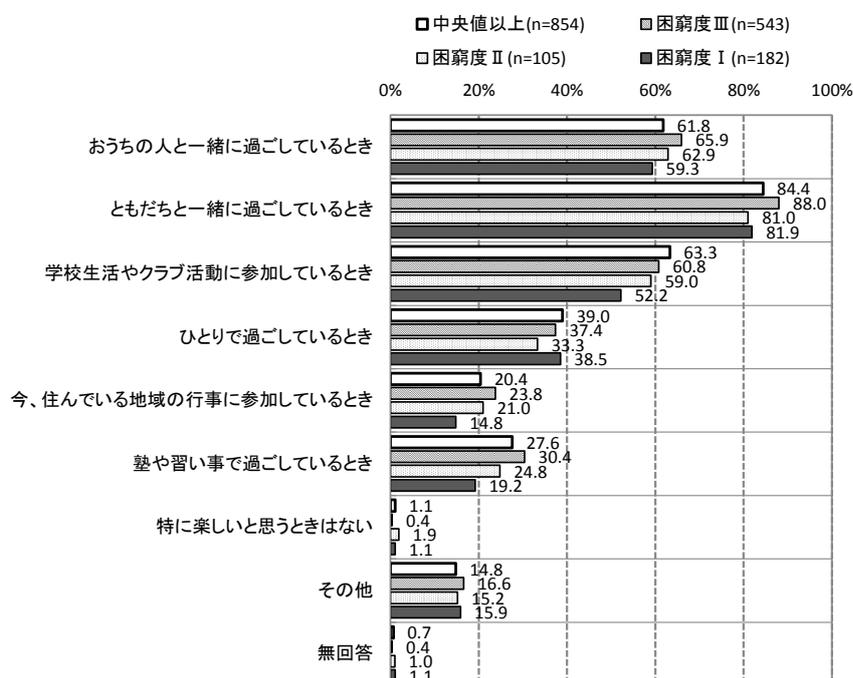
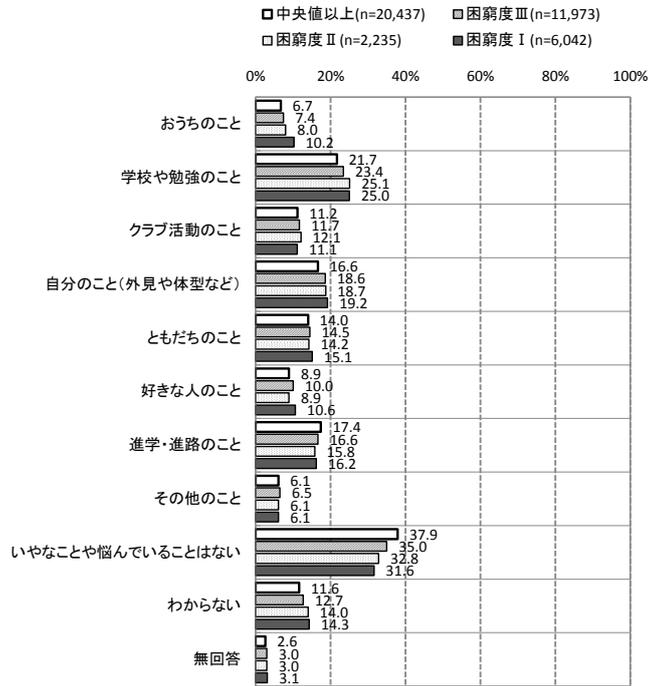


図 困窮度別に見た、毎日の生活で楽しいこと

困窮度別に子どもが毎日の生活で楽しいことについて、中央値以上群と困窮度 I 群間で差が大きい項目に着目しながら、中央値以上群の数値を挙げると、「塾や習い事で過ごしているとき」27.6%（困窮度 I 群に対して、1.4 倍）、「今、住んでいる地域の行事に参加しているとき」20.4%（1.4 倍）が高くなりました。

困窮度別に見た、悩んでいること（子ども票問 18）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

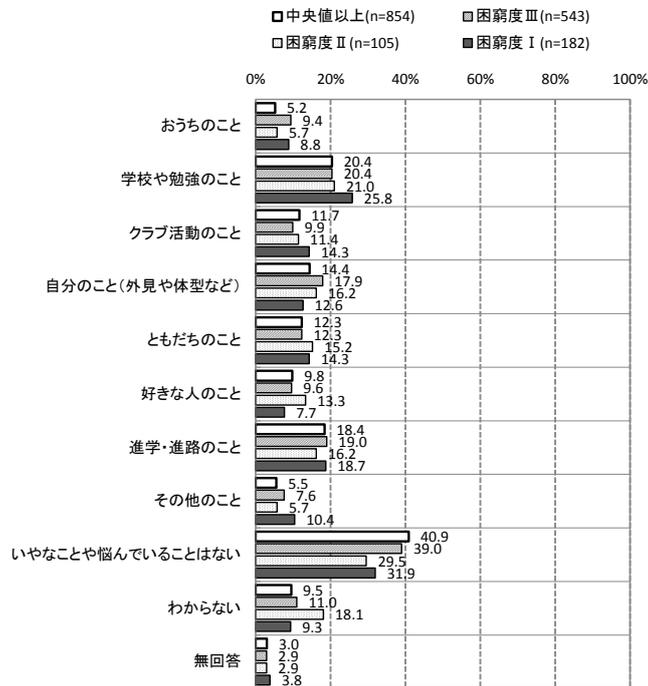
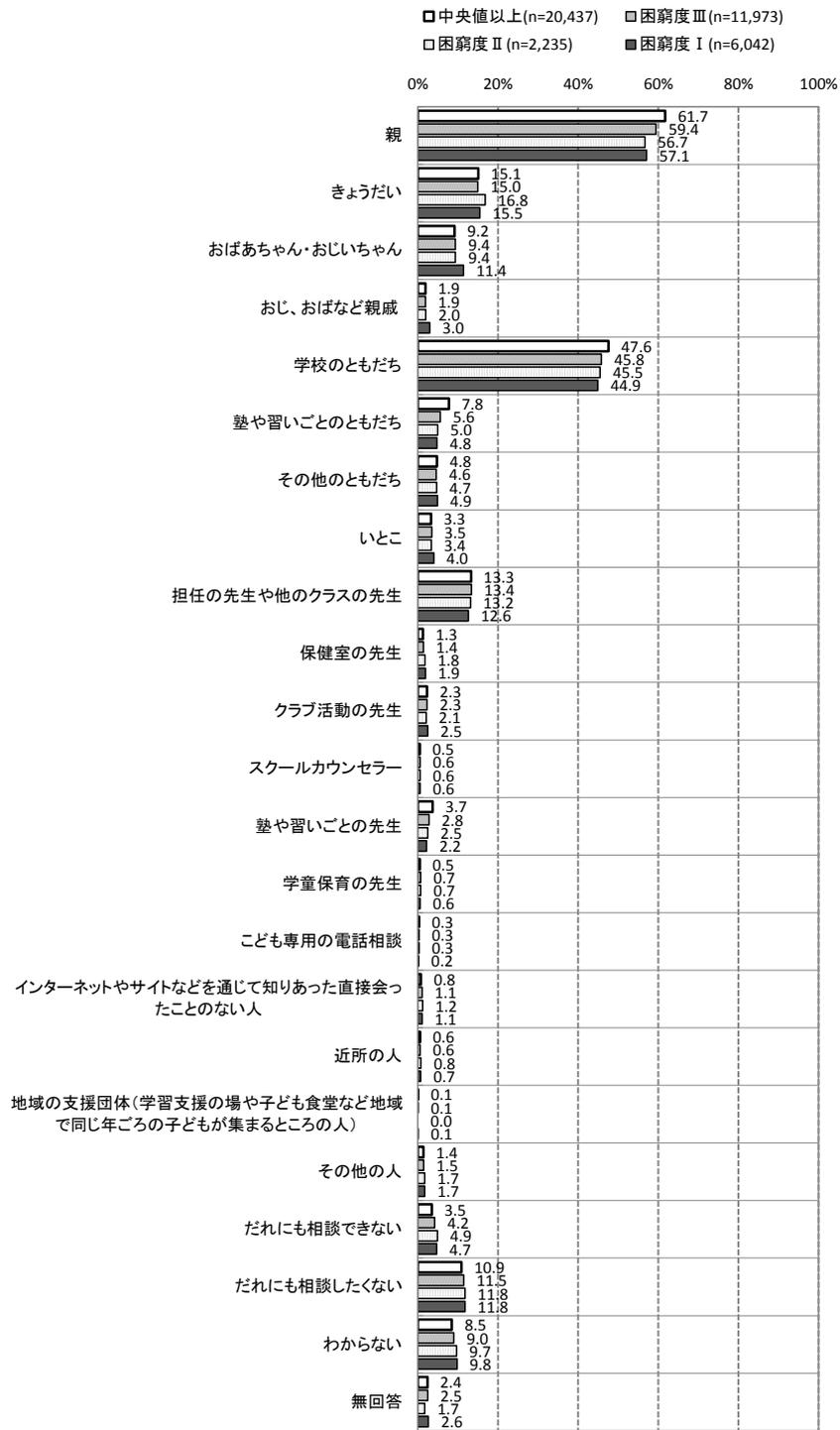


図 困窮度別に見た、悩んでいること

困窮度別に子どもが悩んでいることについて、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で差が大きい項目に着目すると、困窮度Ⅰ群では、「おうちのこと」8.8%（中央値以上群に対して、1.7倍）が高く、一方、中央値以上では特に高い項目は見られませんでした。

困窮度別に見た、子どもの嫌なことや悩んでいるときの相談相手（子ども票問 19）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

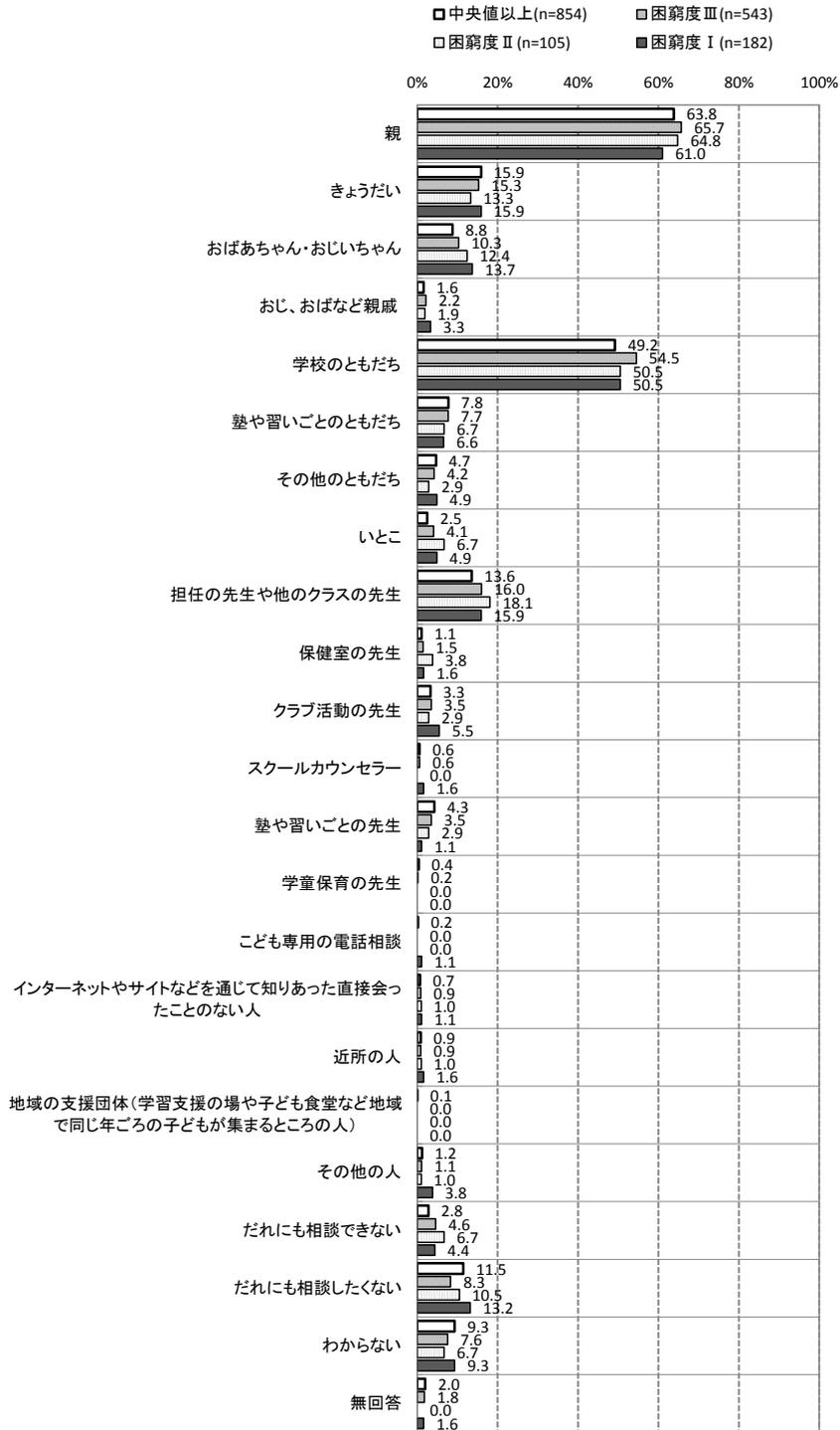
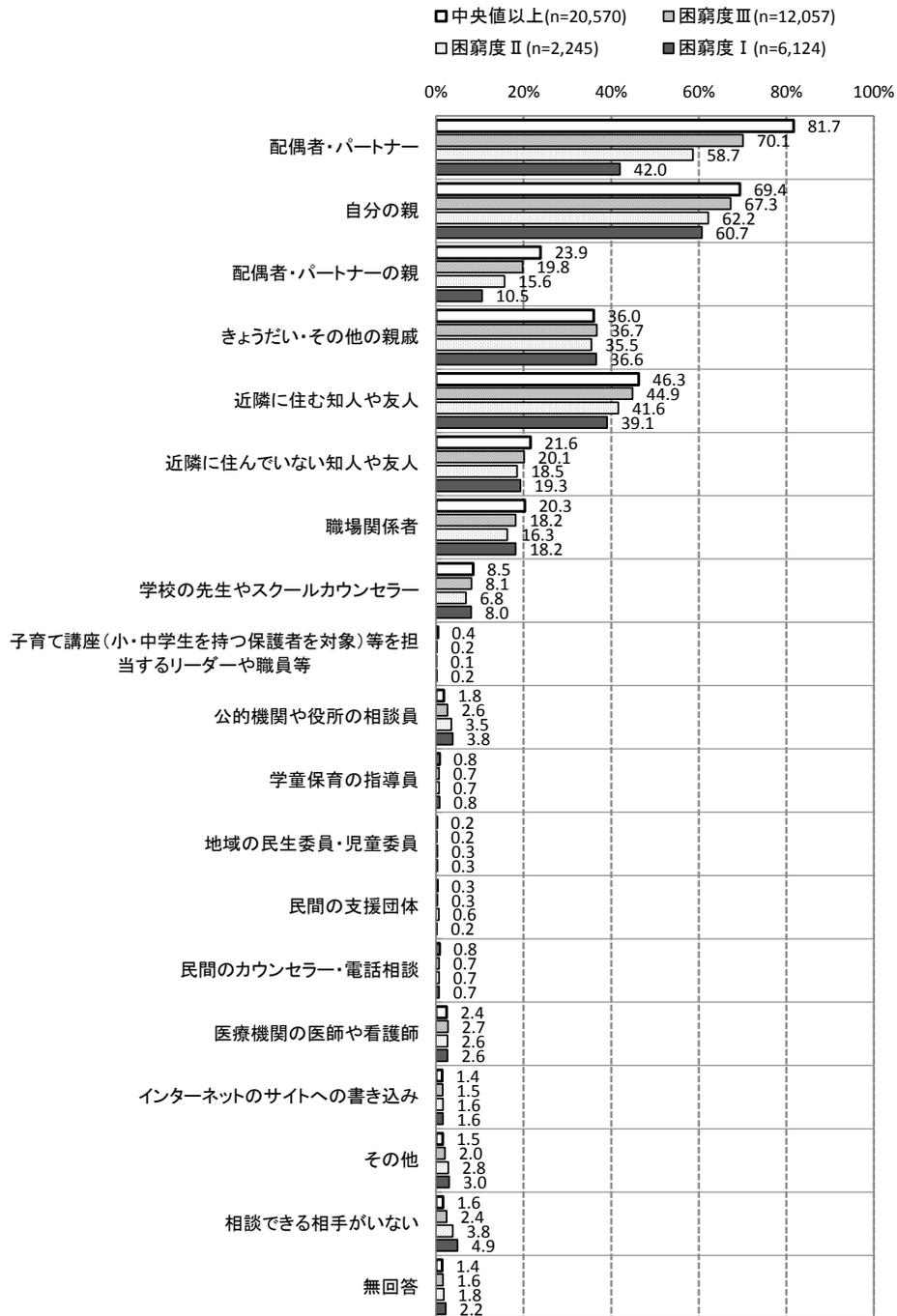


図 困窮度別に見た、子どもの嫌なことや悩んでいるときの相談相手

困窮度別に子どもの嫌なことや悩んでいるときの相談相手について、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で差が大きい項目に着目しながら、困窮度Ⅰ群の数値を挙げると、「こども専用の電話相談」1.1%（中央値以上群に対して、4.7倍）、「スクールカウンセラー」1.6%（2.8倍）、「おじ、おばなど親戚」3.3%（2.0倍）、「いとこ」4.9%（2.0倍）、「近所の人」1.6%（1.8倍）となり、困窮度Ⅰ群において高い項目が複数見られました。

困窮度別に見た、保護者の困ったときの相談先（保護者票問 21）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

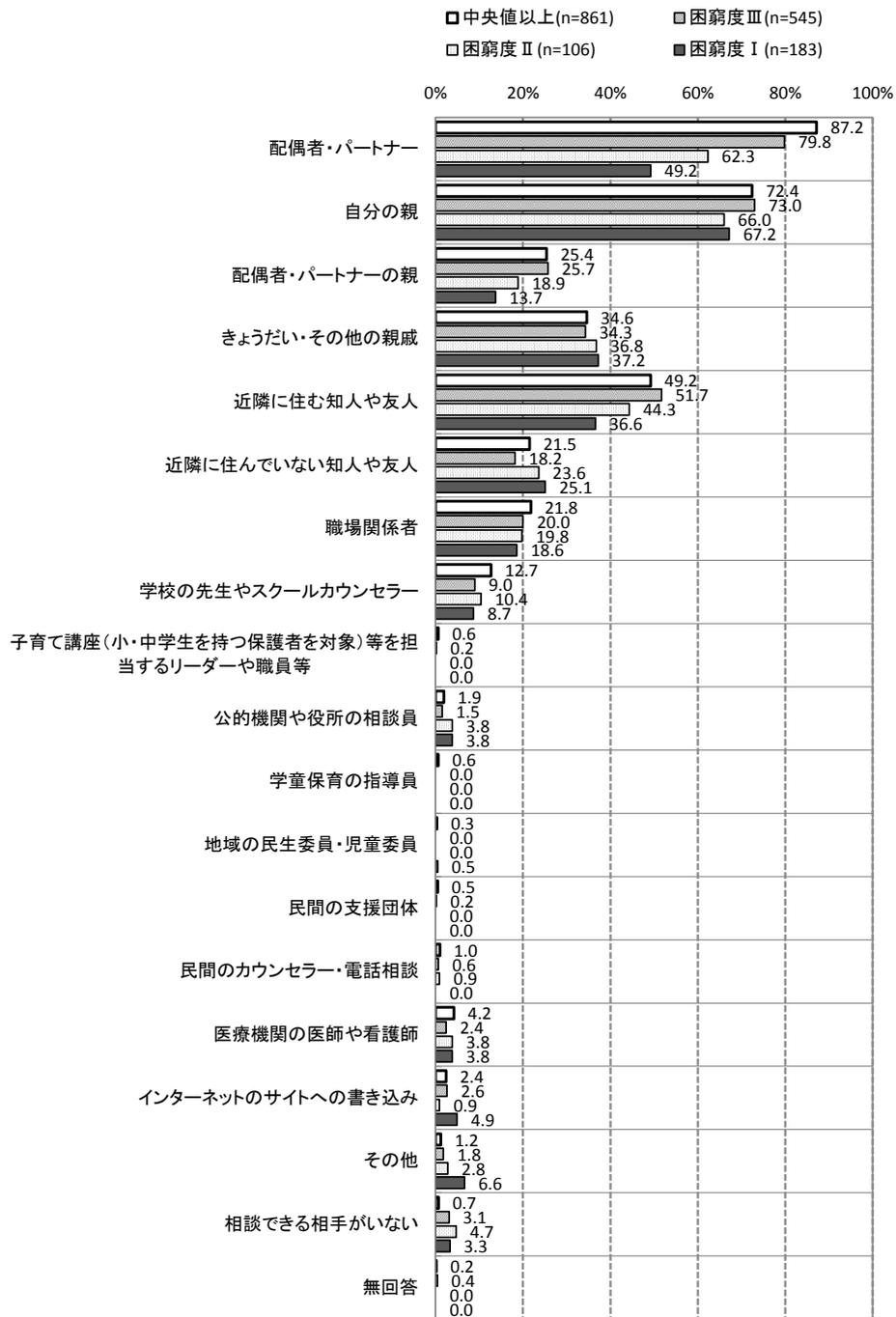
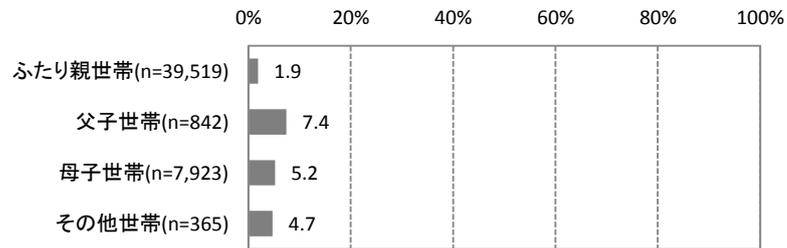


図 困窮度別に見た、保護者の困ったときの相談先

困窮度別に保護者の困ったときの相談先について、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で差が大きい項目に着目しながら、困窮度Ⅰ群の数値を挙げると、「相談できる相手がいない」3.3%（中央値以上群に対して4.7倍）、「公的機関や役所の相談員」3.8%（2.1倍）などとなる一方で、「配偶者・パートナー」や「自分の親」、「近隣に住む知人や友人」に相談する割合は低くなっており、生活困窮世帯の孤立の状況が伺えます。また、公的機関や役所の相談員に相談する割合は、困窮度の程度に関わらず少ない状況にあるといえます。

世帯構成別に見た、保護者の困ったときの相談相手のいない割合（保護者票問 21）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

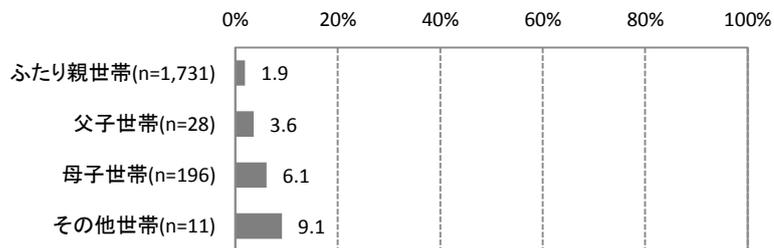
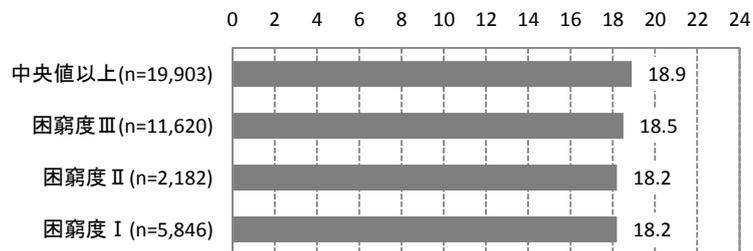


図 世帯構成別に見た、保護者の困ったときの相談相手のいない割合

世帯構成別に保護者の困ったときの相談先を見ると、「相談相手がいない」と回答した人は、父子世帯で3.6%、母子世帯で6.1%いました。

困窮度別に見た、子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）（子ども票問 23）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

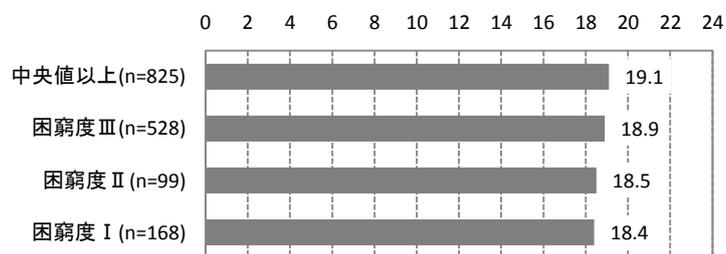
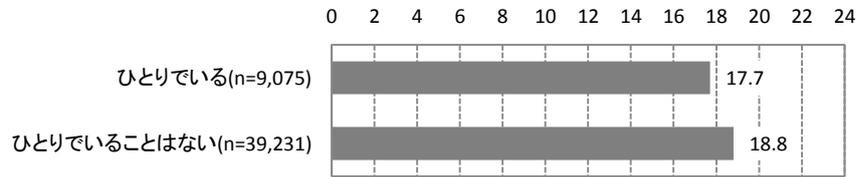


図 困窮度別に見た、子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）

困窮度別に子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）を見ると、困窮度が厳しいほど、セルフ・エフィカシーがやや低くなっています。

子どもが放課後ひとりで過ごすかどうかと、子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）
 （子ども票問 12×子ども票問 23）

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

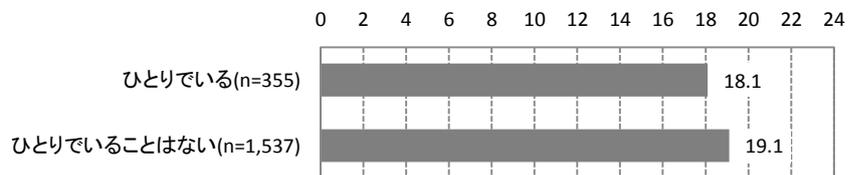


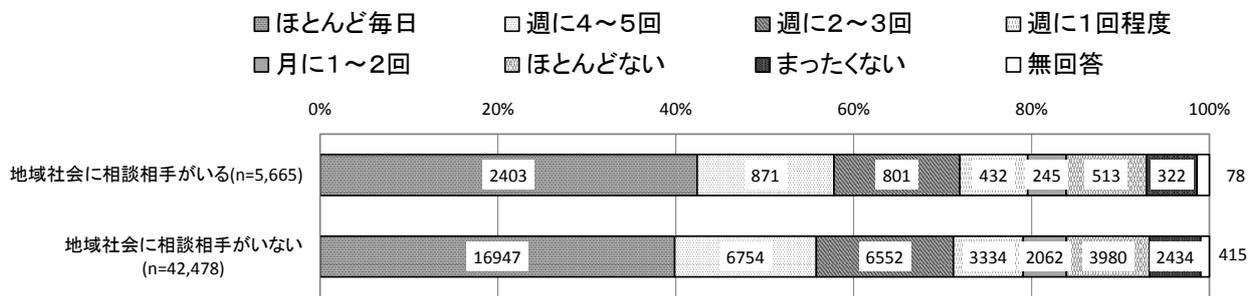
図 子どもが放課後ひとりで過ごすかどうかと、子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）

子どもが放課後ひとりで過ごすかどうかによって子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）を見ると、放課後ひとりで過ごす子どもの方がそうでない子どもよりも自己効力感（セルフ・エフィカシー）が低い結果となりました。

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と学校の話をするか）（保護者票問 21×子ども票問 10-6）

※「あなたが本当に困ったときや悩みがあるとき、相談相手や相談先はどこですか」という問に対し、「学校の先生やスクールカウンセラー」「子育て講座（小・中学生を持つ保護者を対象）等を担当するリーダーや職員等」「公的機関や役所の相談員」「学童保育の指導員」「地域の民生委員・児童委員」「民間の支援団体」「民間のカウンセラー・電話相談」「医療機関の医師や看護師」のうち少なくとも1つを選択した人を、「地域社会に相談相手がいる」としました。

<大阪府内全自治体>



<枚方市>

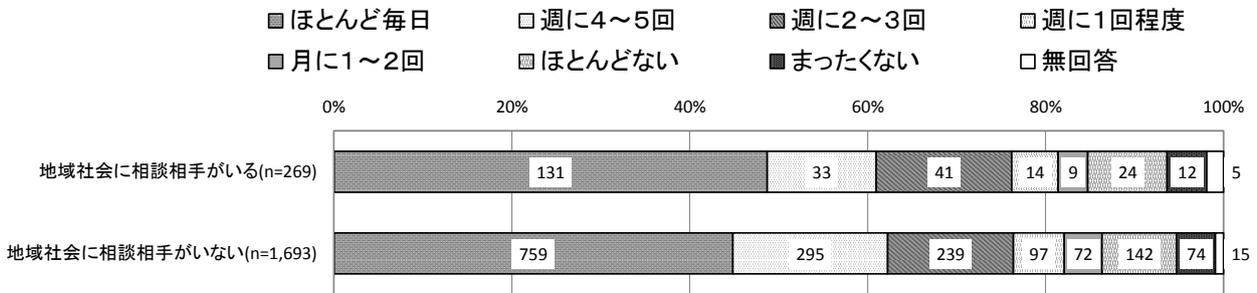


図 地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と学校の話をするか）

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と学校の話をするか）を見ると、「地域社会に相談相手がいる」人の方が、「地域社会に相談相手がない」人よりも、「おうちの大人の人と学校のできごとについて話す」に「ほとんど毎日」と回答する割合が高い結果となりました。

4. 枚方市独自追加設問の結果

大阪府内全自治体の共通設問とは別に、枚方市では子どもの居場所のニーズに関する設問を独自に設けました。当該設問に関する単純集計と、困窮度別のクロス集計結果については、以下のとおりです。

子ども-H-28 子どもが家の近くにあれば行きたい場所
 問 H-28 あなたは、放課後や休みの日（夏休みなども含む）に、家の近くで自由に行くことができる場所として、どのようなところがあれば行ってみたいと思いますか。
 （あてはまる番号すべてに○をつけてください）

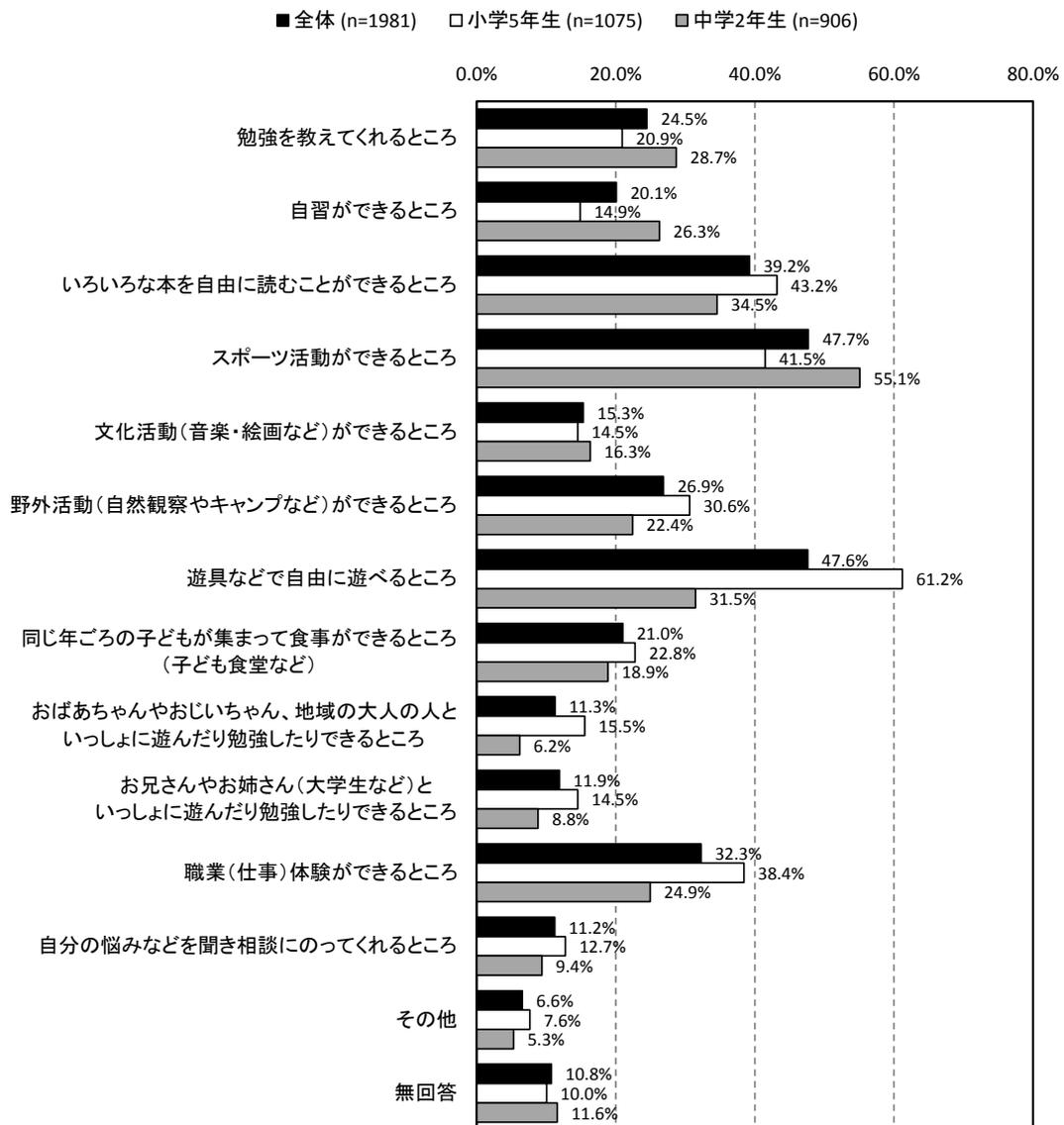


図 子どもが家の近くにあれば行きたい場所

全体では、「スポーツ活動ができる場所」が 47.7%、「遊具などで自由に遊べる場所」が 47.6%とほぼ横並びで最も高くなりました。続いて、「いろいろな本を自由に読むことができる場所」が 39.2%、「職業(仕事)体験ができる場所」が 32.3%、「野外活動(自然観察やキャンプなど)ができる場所」が 26.9%、「勉強を教えてくれる場所」が 24.5%、「同じ年ごろの子どもが集まって食事ができる場所」

ろ（子ども食堂など）」が21.0%、「自習ができる場所」が20.1%、「文化活動（音楽・絵画など）ができる場所」が15.3%、「お兄さんやお姉さん（大学生など）といっしょに遊んだり勉強したりできる場所」が11.9%、「おばあちゃんやおじいちゃん、地域の大人の人といっしょに遊んだり勉強したりできる場所」が11.3%、「自分の悩みなどを聞き相談にのってくれる場所」が11.2%の順に高くなりました。

小学5年生では、「遊具などで自由に遊べる場所」が61.2%と最も高く、続いて、「いろいろな本を自由に読むことができる場所」が43.2%、「スポーツ活動ができる場所」が41.5%、「職業（仕事）体験ができる場所」が38.4%、「野外活動（自然観察やキャンプなど）ができる場所」が30.6%、「同じ年ごろの子どもが集まって食事ができる場所（子ども食堂など）」が22.8%、「勉強を教えてくれる場所」が20.9%、「おばあちゃんやおじいちゃん、地域の大人の人といっしょに遊んだり勉強したりできる場所」が15.5%、「自習ができる場所」が14.9%、「文化活動（音楽・絵画など）ができる場所」および「お兄さんやお姉さん（大学生など）といっしょに遊んだり勉強したりできる場所」がともに14.5%、「自分の悩みなどを聞き相談にのってくれる場所」が12.7%の順に高くなりました。

中学2年生では、「スポーツ活動ができる場所」が55.1%と最も高く、続いて、「いろいろな本を自由に読むことができる場所」が34.5%、「遊具などで自由に遊べる場所」が31.5%、「勉強を教えてくれる場所」が28.7%、「自習ができる場所」が26.3%、「職業（仕事）体験ができる場所」が24.9%、「野外活動（自然観察やキャンプなど）ができる場所」が22.4%、「同じ年ごろの子どもが集まって食事ができる場所（子ども食堂など）」が18.9%、「文化活動（音楽・絵画など）ができる場所」が16.3%、「自分の悩みなどを聞き相談にのってくれる場所」が9.4%、「お兄さんやお姉さん（大学生など）といっしょに遊んだり勉強したりできる場所」が8.8%、「おばあちゃんやおじいちゃん、地域の大人の人といっしょに遊んだり勉強したりできる場所」が6.2%の順に高くなりました。

保護者-H-29 保護者が家の近くにあれば子どもに利用させたい場所

問 H-29 放課後や休みの日（夏休みなども含む）に、お子さんが家の近くで自由に行くことができる場所として、どのようなところがあれば利用してみたいと思いますか。

（当てはまる番号すべてに○をつけてください）

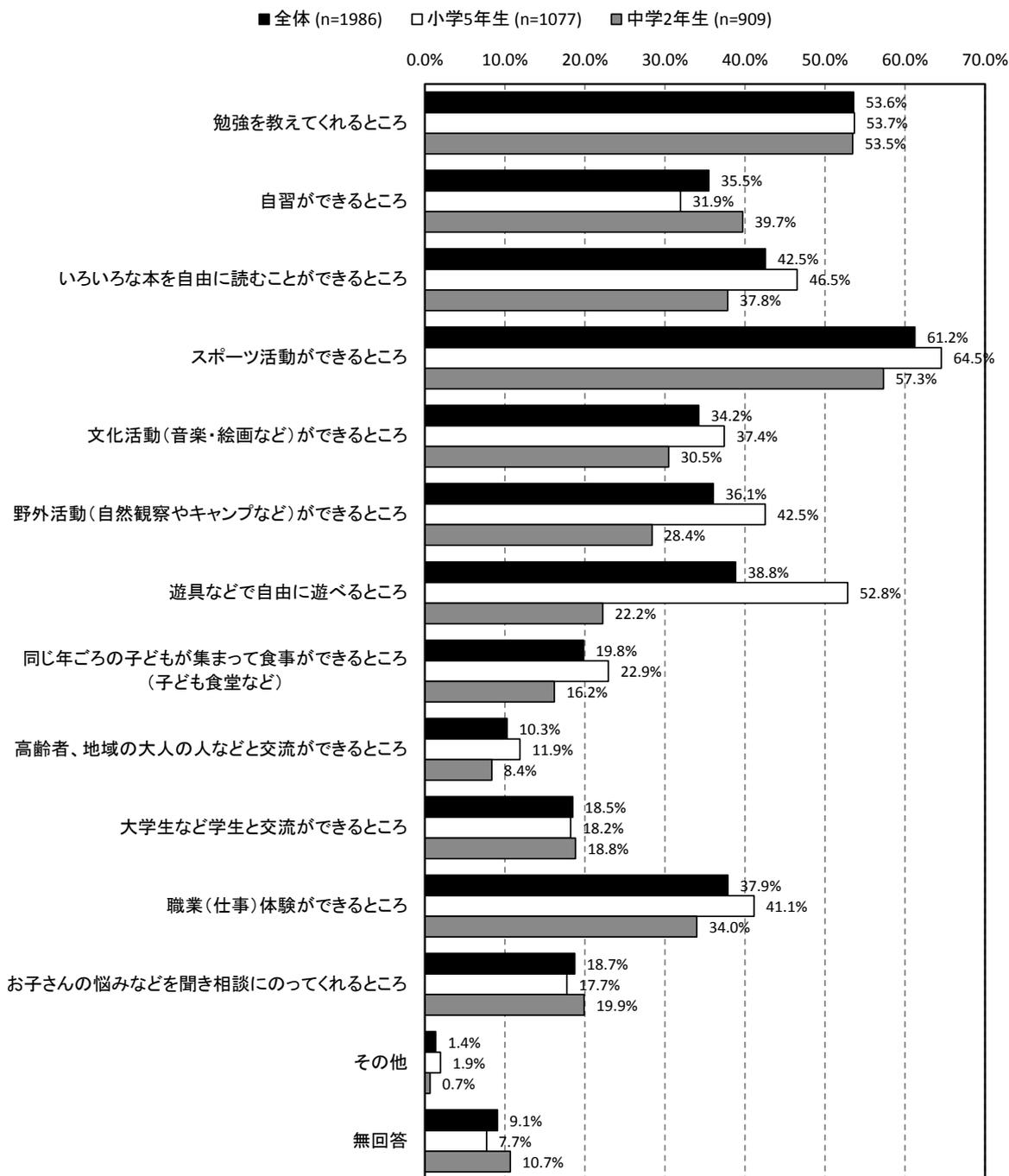


図 保護者が家の近くにあれば子どもに利用させたい場所

保護者全体では、「スポーツ活動ができる場所」が 61.2%と最も高く、次いで「勉強を教えてくれる場所」が 53.6%、「いろいろな本を自由に読むことができる場所」が 42.5%、「遊具などで自由に遊べる場所」が 38.8%、「職業（仕事）体験ができる場所」が 37.9%、「野外活動（自然観察やキャン

ブなど)ができるところ」が 36.1%、「自習ができるところ」が 35.5%、「文化活動(音楽・絵画など)ができるところ」が 34.2%、「同じ年ごろの子どもが集まって食事ができるところ(子ども食堂など)」が 19.8%、「お子さんの悩みなどを聞き相談にのってくれるところ」が 18.7%、「大学生など学生と交流ができるところ」が 18.5%、「高齢者、地域の大人の人などと交流ができるところ」が 10.3%の順で高くなりました。

小学 5 年生では、「スポーツ活動ができるところ」が 64.5%と最も高く、次いで「勉強を教えてくれるところ」が 53.7%、「遊具などで自由に遊べるところ」が 52.8%、「いろいろな本を自由に読むことができるところ」が 46.5%、「野外活動(自然観察やキャンプなど)ができるところ」が 42.5%、「職業(仕事)体験ができるところ」が 41.1%、「文化活動(音楽・絵画など)ができるところ」が 37.4%、「自習ができるところ」が 31.9%、「同じ年ごろの子どもが集まって食事ができるところ(子ども食堂など)」が 22.9%、「大学生など学生と交流ができるところ」が 18.2%、「お子さんの悩みなどを聞き相談にのってくれるところ」が 17.7%、「高齢者、地域の大人の人などと交流ができるところ」が 11.9%の順で高くなりました。

中学 2 年生では、「スポーツ活動ができるところ」が 57.3%と最も高く、次いで「勉強を教えてくれるところ」が 53.5%、「自習ができるところ」が 39.7%、「いろいろな本を自由に読むことができるところ」が 37.8%、「職業(仕事)体験ができるところ」が 34.0%、「文化活動(音楽・絵画など)ができるところ」が 30.5%、「野外活動(自然観察やキャンプなど)ができるところ」が 28.4%、「遊具などで自由に遊べるところ」が 22.2%、「お子さんの悩みなどを聞き相談にのってくれるところ」が 19.9%、「大学生など学生と交流ができるところ」が 18.8%、「同じ年ごろの子どもが集まって食事ができるところ(子ども食堂など)」が 16.2%、「高齢者、地域の大人の人などと交流ができるところ」が 8.4%の順で高くなりました。

【クロス集計による分析結果】

困窮度別に見た、子どもが家の近くにあれば行きたい場所（子ども票問 H-28）

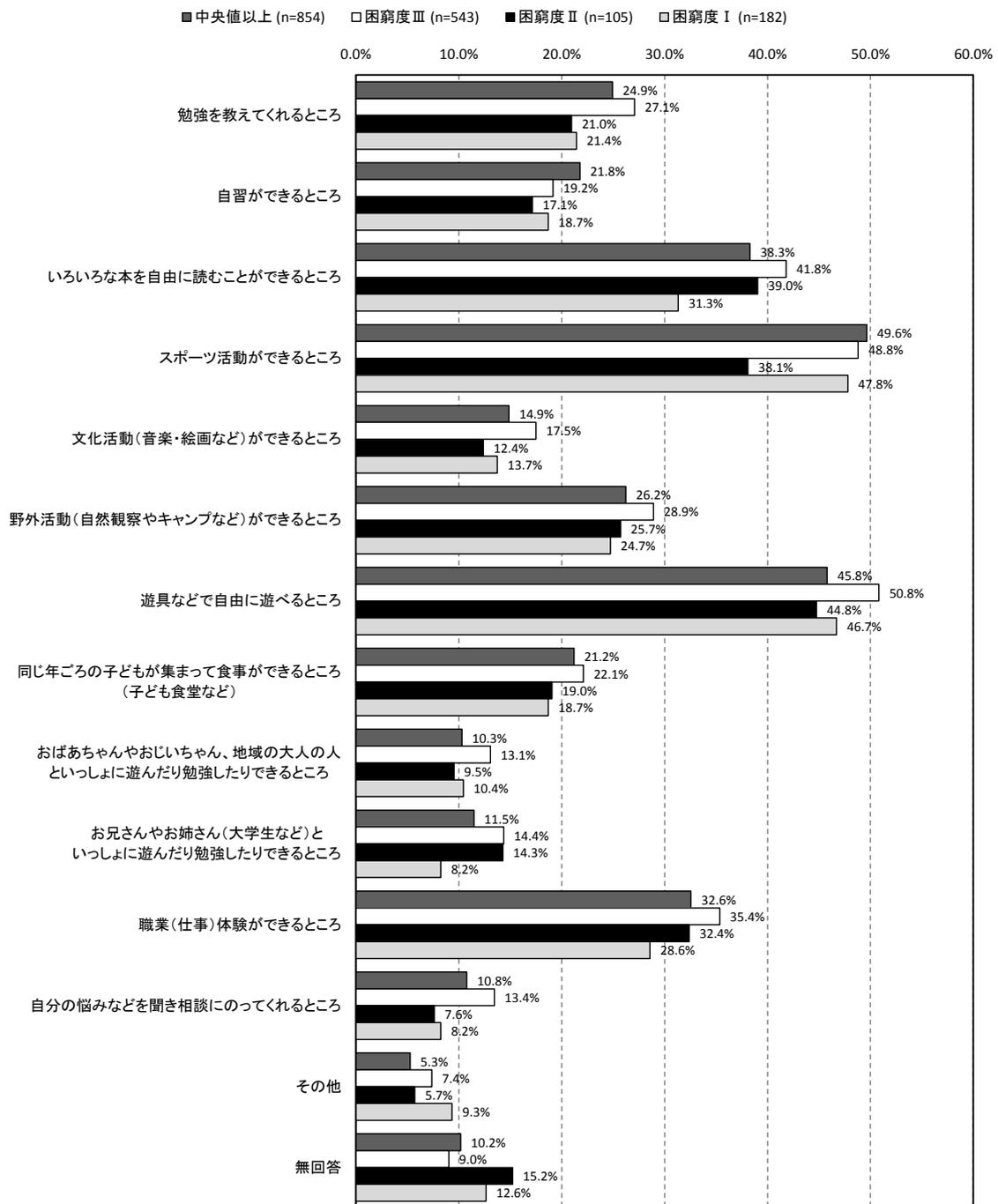


図 困窮度別に見た、子どもが家の近くにあれば行きたい場所（子ども票問 H-28）

困窮度別に、子どもが家の近くにあれば行きたい場所をみたところ、「勉強を教えてくれるところ」について、中央値以上群が 24.9%、困窮度Ⅲ群が 27.1%だったのに対し、困窮度Ⅱ群は 21.0%、困窮度Ⅰ群は 21.4%と相対的に低い傾向がみられました。また、「いろいろな本を自由に読むことができる場所」について、中央値以上群が 38.3%、困窮度Ⅲ群が 41.8%、困窮度Ⅱ群が 39.0%であったのに対し、

困窮度Ⅰ群は31.3%と他の群よりも低い傾向がありました。

なお、いずれの群においても「スポーツ活動ができる場所」と「遊具などで自由に遊べる場所」が約5割程度と高い傾向にありました。

困窮度別にみた、保護者が家の近くにあれば子どもに利用させたい場所（保護者票問 H-29）

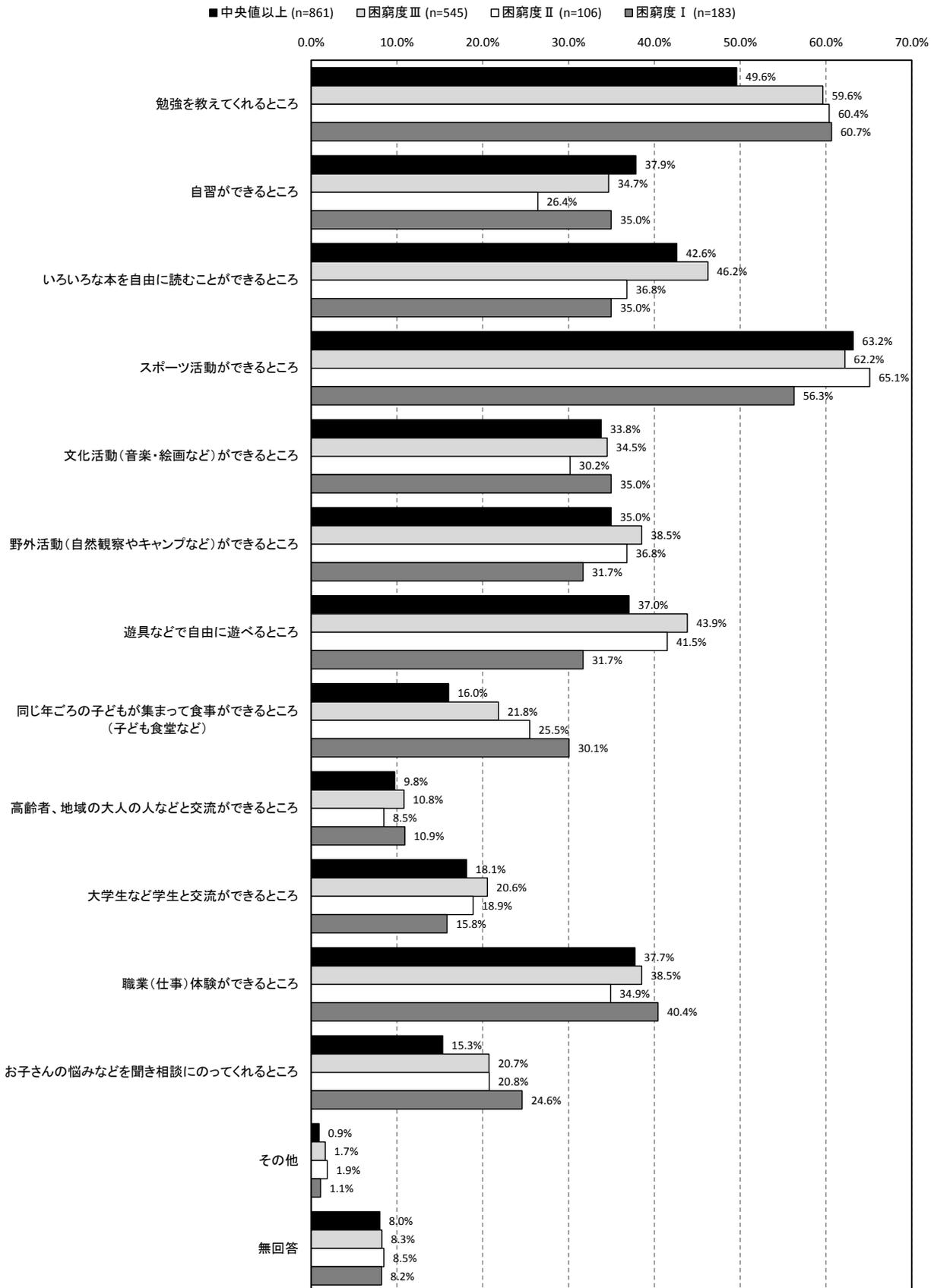


図 困窮度別に見た、家の近くにあれば子どもに利用させたい場所（保護者票問 H-29）

困窮度別に保護者が、家の近くにあれば子どもに利用させたい場所をみたところ、「同じ年ごろの子どもが集まって食事ができるところ（子ども食堂など）」について、困窮度が上がるにつれてその割合が高くなり、中央値以上群は 16.0%であったのに対し、困窮度Ⅰ群は 30.1%でした。

「勉強を教えてくれるところ」についても、中央値以上群が 49.6%であったのに対し、困窮度Ⅲ群が 59.6%、困窮度Ⅱ群が 60.4%、困窮度Ⅰ群が 60.7%と中央値以上群よりも高い傾向にありました。

そのほか、「お子さんの悩みなどを聞き相談にのってくれるところ」についても、中央値以上群が 15.3%であったのに対し、困窮度Ⅲ群が 20.7%、困窮度Ⅱ群が 20.8%、困窮度Ⅰ群が 24.6%と中央値以上群よりも高い傾向となりました。

5. 支援機関等調査の結果

子ども及び保護者への調査とは別に、保育所（園）や幼稚園、小・中学校、NPO団体、主任児童委員などの子どもに関わる支援機関等に対し、支援上での課題等を把握するための支援機関等調査結果の概要を以下に示します。

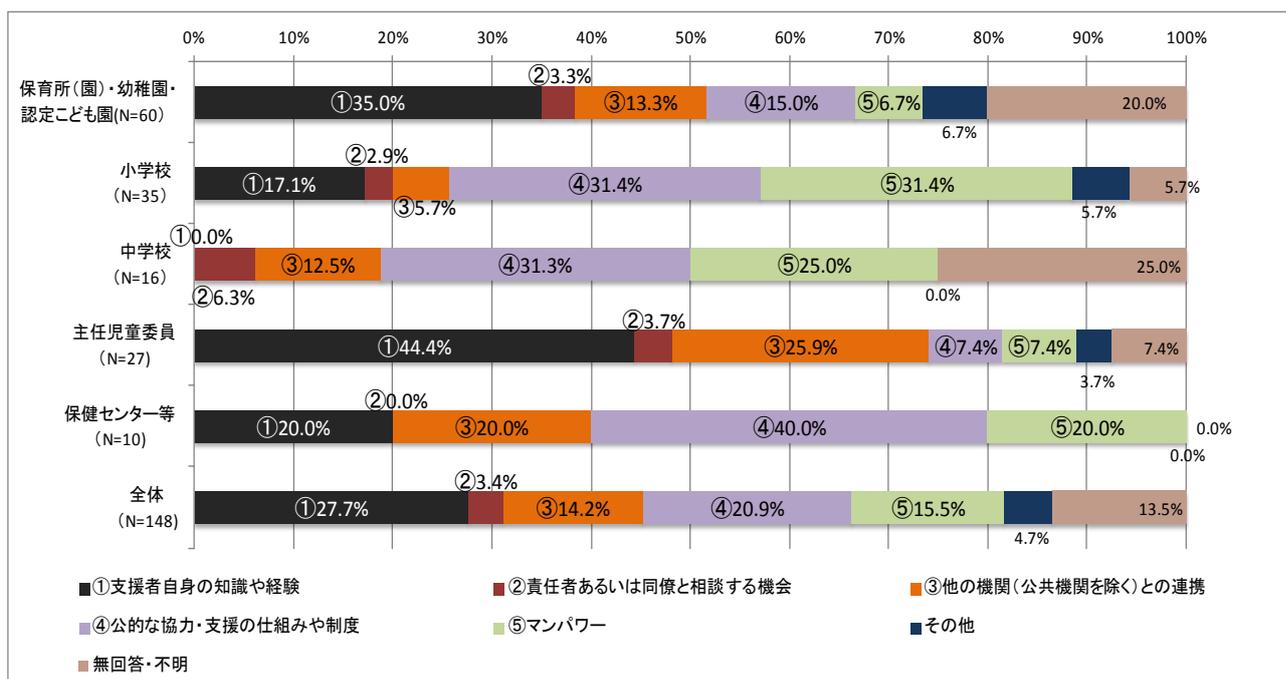
【支援機関等】

1. 保育所（園）・幼稚園・認定こども園（公立及び私立の施設）〈回収数 60 件〉
2. 小学校（公立の施設）〈回収数 35 件〉
3. 中学校（公立の施設）〈回収数 16 件〉
4. 主任児童委員〈回収数 27 件〉
5. 保健センター〈回収数 1 件〉
6. 母子・父子自立支援員〈回収数 1 件〉
7. 福祉事務所（生活困窮者自立支援制度の相談機関）〈回収数 1 件〉
8. 家庭児童相談員〈回収数 1 件〉
9. 適応指導教室〈回収数 1 件〉
10. コミュニティソーシャルワーカー〈回収数 1 件〉
11. NPO団体（子どもの健全育成に関わる NPO 法人）〈回収数 4 件〉

支援機関 - 3. 支援を行っているなかで不足しているところ

問3 日頃、支援を行っているなかで、足りていないと思うところを教えてください。
（代表的なもの1つに○をつけてください。）

支援機関等にとって、支援を行う上で足りていないこととして、支援者の知識や経験・マンパワーといった担い手の質と量、また、他の機関との連携や公的な協力・支援の仕組みといった支援機関同士の連携体制に関することの大きく2つの課題がみられます。



(注) 回収数を考慮し、「保健センター等」には、母子・父子自立支援員、福祉事務所、家庭児童相談員、適応指導教室、コミュニティソーシャルワーカー、NPO 団体を含んでいます。

支援機関 - 4. 不足していると思う理由

問4 (問3での回答に関して) なぜ、そのように思いますか。(記述式)

支援機関等ごとに、問3での回答項目別に整理した主な意見(理由)は以下のとおりです。

【保育所(園)・幼稚園・認定こども園】

問3での回答	意見(理由)
支援者自身の知識や経験	<ul style="list-style-type: none"> ・さまざまな生活環境の変化による多様化に追いつけない。 ・相談ケースも複雑化し、スキルを高めていく必要を感じる。
責任者あるいは同僚と相談する機会	<ul style="list-style-type: none"> ・連絡、相談体制をとる時間がもてない。
他の機関(公共機関を除く)との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・制度が複雑で、それぞれが限定された援助制度しかない。 ・行政(例えば虐待・ネグレクトなど)がどこまで動いてくれているのか見えない。 ・どんな支援機関があるのか、把握しきれていない。
公的な協力・支援の仕組みや制度	<ul style="list-style-type: none"> ・個人情報がある為、お互いが全部出しにくく、保護者の方も行政に知られたくない思いがあるように思う。 ・困難なケースの場合、他機関と連携が必要になるため、行政の中でも複数の課と連携を取るが、それぞれの課が支援内容を知らず、公的制度の仕組みの難しさを感じる。
マンパワー	<ul style="list-style-type: none"> ・保育士の数に余裕が無く、日常の保育をこえた働きが物理的に難しい。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・支援を受ける人の気持ちと支援者との思いに温度差があると思う。

【小学校】

問3での回答	意見(理由)
支援者自身の知識や経験	<ul style="list-style-type: none"> ・若い教員が増えている中、子どもの貧困問題をどう考え、学校としてどうしていくのかを毎年いちから始めていかなければならないという課題がある。 ・学校では、児童の教育についてのかかわりが主で、家庭の経済的な側面にかかわることが難しい。
責任者あるいは同僚と相談する機会	<ul style="list-style-type: none"> ・日常業務が忙しく、時間が取れない。
他の機関(公共機関を除く)との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・支援の対象である児童については、他機関との連携が非常に重要である。
公的な協力・支援の仕組みや制度	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者に公的な協力・支援の仕組みや制度を紹介する時に、どこを紹介したらよいか分かりづらい。 ・保護者の生活支援や家庭教育の補助をしたいが、どの専門機関と連携すればいいのかがわからない。
マンパワー	<ul style="list-style-type: none"> ・児童への支援や指導に多くの時間を割いているなか、経済的、社会的支援が必要などの場合、担任等の余力がない。すぐに動けるSSWのような存在が必要である。 ・フリーに動ける教職員が少ない。

【中学校】

問3での回答	意見（理由）
責任者あるいは同僚と相談する機会	・業務増加のため、他の職員との十分な分析・検討・再構築等の時間がとりにくい。
他の機関（公共機関を除く）との連携	・関係諸機関との連絡調整やケース会議をもととしても実施までに相当な時間を要し、その間にも不登校生徒の状況は悪化していることが考えられる。
公的な協力・支援の仕組みや制度	・保護者の経済的な困窮、病気等により、子どもの家庭生活の状況が悪化した際、保護者支援を行うことで家庭環境を改善する必要があるが、学校では限界がある。公的機関の積極的介入が必要な場合がある。
マンパワー	・不登校児童への対応として担任を中心として、率先して取り組んでいるが、教諭数も少ないので組織として対応しきれていない。

【主任児童委員】

問3での回答	意見（理由）
支援者自身の知識や経験	・勉強会をして知識を得ても、経験がないと戸惑う。支援を受ける側の背景も十人十色であるため、配慮の仕方も一律にはいかない。
責任者あるいは同僚と相談する機会	・仕事をしながらなので、相談する時間が取れない。
他の機関（公共機関を除く）との連携	・保育所、小学校、中学校からあまり情報をもらえない。 ・関係機関との会議等の場がない。
公的な協力・支援の仕組みや制度	・当事者に支援方法を紹介をしても、すぐに動いてもらえず、継続的な支援につながらない。 ・子育てに必要な経済的援助は行われているが、その使い方が不明確で、結局、貧困から抜け出せずにいる家庭が多い。経済的支援より、教育・一般常識があれば良いと思うことがある。
マンパワー	・連携をとる民生委員が欠員している場合がある。

【保健センター等】

問3での回答	意見（理由）
支援者自身の知識や経験	<ul style="list-style-type: none"> ・スタッフ全員が、傾聴の知識や経験を修得するには、まだまだ不十分。 ・児童・生徒が不登校になる要因はそれぞれ異なり、個別の理解や支援の仕方について、専門的な知識や指導方法をもっと学ぶ必要がある。
他の機関（公共機関を除く）との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・本人のための情報共有と欲しているが、守秘義務ということで、閉じてしまうことが多い。
公的な協力・支援の仕組みや制度	<ul style="list-style-type: none"> ・公的機関が縦割りになっているので、横の連携が難しかったり、年齢で支援が打ち切りになってしまうことがある。
マンパワー	<ul style="list-style-type: none"> ・現状では、窓口に来る相談者の対応に追われ、アウトリーチができていない。 ・全体的な相談件数が年々増加しており、きめ細かい支援を行き届かせるためのマンパワーの不足を感じている。

支援機関 - 11. 他機関と連携する際の課題

問4 他機関と連携する際の課題を教えてください。（記述式）

他機関と連携する際の課題として、主な意見は以下のとおりです。

- ・個人情報保護法のしぼりがきつく、密に連携が取れない。要支援者自身（保護者）の同意がないと連携できないため支援できない。困難なケースは、他機関や専門機関とつながり、それぞれの役割を果さなければうまくいかない。
- ・状況が刻々と変わる場合など、他の機関と連携するのに、迅速さが必要で、それが課題になることがある。
- ・具体的な事案を説明しても、他の機関との温度差があり、迅速な対応に結びつかないことがある。
- ・複数の支援のケースがある場合、1つの施設で同一の担当者だと助かる。
- ・支援機関同士で支援の方向性に関して、立場の違いからずれが生じる場合がある。
- ・支援機関が保護者との関係悪化を危惧して通告が遅れるケースがあり、「通告は支援の始まり」ということを理解してもらう必要がある。
- ・会議開催の日程調整や他機関の担当者との連絡がとりづらい。

支援機関 - 13. 関係機関との連携施策の提案

問 13 関係機関と連携した施策として、どんなものがあればいいか教えてください。
(記述式)

関係機関との連携施策の提案として、主な意見は以下のとおりです。

- ・それぞれの支援機関の守秘義務や権限の壁をなくし、コーディネートできるライセンスを持つ機関があればよい。
- ・学校と福祉に関する公的機関が連携を図れるシステムがほしい。
- ・スクールソーシャルワーカーを学校に派遣する制度があればよい。
- ・学校 1 校に支援を行う専属の担当者を配置してほしい。
- ・関係機関と共同で行う支援事業等を検討する。
- ・家庭訪問を協同して行う。
- ・人材派遣等人的支援があればよい。退職教員等のよさもあるが、福祉の専門性の高い人材も派遣してほしい。
- ・各機関の代表者がケースを共有できるような連絡会議（どのようなケースがあり、それぞれにどのように対応しているか、どのような機関が関わっているか等）があれば、各職場に下ろすことで少しでも幅が広がり、支援者自身の知識も技術も広がると思う。
- ・どこが何を担当しているか、わかりやすくまとめたリーフレットみたいなものがあれば便利だと思う。

支援機関 - 6. 複数の課題を抱えたケースで支援がうまくいった事例

問 6 うまくいったポイントは何だったかを教えてください。(記述式)

複数の課題を抱えたケースで支援がうまくいった事例として、支援機関等ごとの主な意見は以下のとおりです。

保育所（園）・幼稚園・認定こども園	・入園時から親子とも不安を抱えていたが、子どもの様子を細かく伝え、家庭での様子も聞きつつ、少しずつ登園・お弁当・遠足などがクリアできたことで、自信につながり、小学校への連携もスムーズに行えた。
小学校	・民生委員児童委員から、情報提供があり、学校側が解決に向けた情報を得た上で、保護者と話をする機会を持った。情報を得た段階ですぐに対応したことがよかった。
中学校	・保護者が家事・育児等の支援が必要であることがわかり、家庭児童相談所や生活福祉室との連携や親類の助けにより、解決につなげることができた。

主任児童委員	<ul style="list-style-type: none"> 学校より支援が必要な子どもについて連絡が入り、子ども家庭センター、家庭児童相談所、小学校、保健センター、民生委員児童委員、主任児童委員で、個別ケース会議を3ヶ月に一度行った。主に、見守りを行い、子どもは登校できるようになった。
保健センター等	<ul style="list-style-type: none"> 学習支援や進路へのサポート等、個別に話を聞くことで、子どもたちの自尊感情が高まり、子どもたちが希望した高校へ進学することができた。 NPO会員の税理士事務所で受け入れ、仕事の指導と社会人との交流経験を体験させた結果、社会参加ができるようになった。

支援機関 - 8. 複数の課題を抱えたケースで支援がうまくいかなかった事例

問8 うまくいかなかった原因は何だったかを教えてください。(記述式)

複数の課題を抱えたケースで支援がうまくいかなかった事例として、支援機関等ごとの主な意見は以下のとおりです。

保育所(園)・幼稚園・認定こども園	<ul style="list-style-type: none"> 保護者が家庭内の事情を知られる事に抵抗を感じていたため、本当に困っていることを相談できず、また、支援側も踏み込まず、子どもの置かれている現状をあまり変えることができなかった。
小学校	<ul style="list-style-type: none"> 不登校支援において、保護者の協力が得られず、頻繁に迎えに行ったり、連絡をとり登校要請を繰り返すことを継続するが、保護者自身の生活の不安定さもあり、状況の改善がみられない。
中学校	<ul style="list-style-type: none"> ひとり親家庭で、保護者が生徒の登校時間よりも早く出勤するため、生徒は一人で起きることができず、また、孤食状態になり、不登校傾向がより重篤になってしまった。
主任児童委員	<ul style="list-style-type: none"> 地域の見守りの方により、不登校で遅刻しがちな児童を発見したが、ひとり親家庭で、保護者が忙しく、訪問するも助けを求めている様子だった。支援を求めている場合の見守りをどこまですべきかが課題となった。
保健センター等	<ul style="list-style-type: none"> DVの事例で複数の課題があるため、複数の支援機関が関係した。それぞれの支援機関が個々に支援に動いたため、本人の意向がわかりにくくなってしまい、本人に寄り添いながら支援することができなかった。

支援機関 - 14. 複数の課題ごとの改善策

問 14 経済的困窮をはじめ複数の課題を抱えるケースに対応されていて、課題があると思われることはありますか。また、考えられる改善策がありましたらご回答ください。（記述式）

複数の課題ごとの改善策として、主な意見は以下のとおりです。

(課題) 発見の仕組みがない
<ul style="list-style-type: none">・保護者等が気軽に集まれる居場所づくり。・関係機関への連絡方法、取り組み事例の紹介などのマニュアルの作成。・保護者・子どもへの相談機関の周知活動・教育を行なう。
(課題) 支援の対象がわからない
<ul style="list-style-type: none">・学校と連携する。・市民に対し民生委員児童委員・主任児童委員などの存在を知ってもらう。
(課題) 発見後のつなぎ先がわからない
<ul style="list-style-type: none">・支援機関等が研修や講座等を積極的に受講する。・課題別に関係機関の連絡先をまとめた冊子等の作成。
(課題) 支援を拒否される
<ul style="list-style-type: none">・普段からのコミュニケーションを通じて信頼関係を構築しておく。・関係機関による継続的なアプローチと連携の強化。
(課題) 子どもへの支援策が少ない
<ul style="list-style-type: none">・給付金などが子どもに直接給付される仕組み。・地域との繋がりをもてる支援（子ども食堂、学習支援、通学支援等）の広がり。
(課題) 若者への支援策が少ない
<ul style="list-style-type: none">・就労支援を実施する前に学習支援と家庭的な習慣を身につける支援を実施する。・高校卒業後（退学後）の若者が自立するための就労支援の充実。
(課題) 関係機関等との連携が困難
<ul style="list-style-type: none">・職員やソーシャルスクールワーカー等の人員を増やす。・関係機関の会議の場を増やす。
(課題) 個人情報の共有が困難
<ul style="list-style-type: none">・関係機関の間で情報共有できるよう個人情報の取り扱い規定を見直す。・関係機関を横断して情報収集できるコーディネート機関の構築。
(課題) 支援のネットワークがない
<ul style="list-style-type: none">・スクールソーシャルワーカー等を増やし、ネットワークを充実する。・地域へ働きかけ、支援機関の存在をアピールしていく。